史跡 斎宮跡

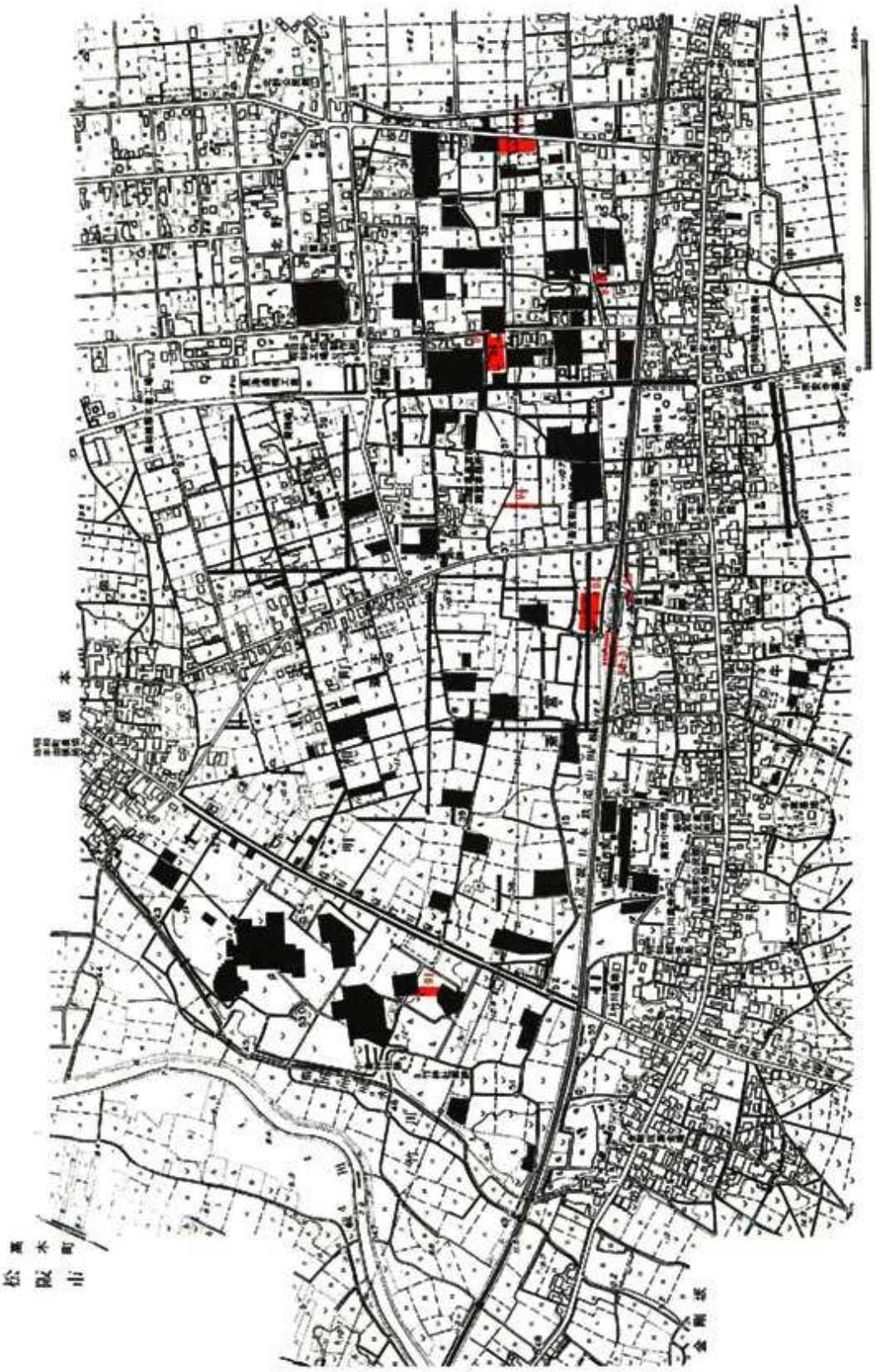
平成３年度発掘調査概報

1992

斎宮歴史博物館

第93次調査区遠景（北から）

左：羊形硯（第91次調査）　右：鳥形硯（第90次調査）



第１図　平成３年度発掘調査地区　　（１：１０,０００）

はじめに

斎宮跡が、昭和54年３月27日に国史跡となって13年が経過いたしました。この間、史跡の実態解明のための発掘調査体制の充実はもとより、史跡の有効な活用や普及を目途に、徐々にではありますが史跡公園としての史跡環境整備、調査成果の公開と文化財保護の啓発の場としての斎宮歴史博物館の設置等に努め、その成果として多くの人々の来訪を得て好評をいただいているところであります。

しかしながら、史跡を訪れる人々の増加に伴ってその交通機関の整備、地域住民の生活環境整備としての水路整備や上水道の設置、道路改良、個人住宅の増築や改築等、史跡の保存と対峙せざるを得ない諸問題も山積し、これらとの調和のとれた史跡保存のあり方を求め、地元明和町とも協力しつつその実現に努めているところであります。

とりわけ発掘調査は、史跡公有化事業の進捗をみてきた今日でもなお土地所有者各位のご協力を得て進めている部分も多く、また史跡現状変更に伴う発掘調査においても各地権者との調整による様々な要因により必ずしも計画的にまた円滑に進んでいない面もありますが、発掘調査の現地説明会や体験発掘教室などを通じて、少しでも埋蔵文化財保護への理解を深める一助となっているものと自負しております。

ここに公表させていただく平成３年度の発掘調査結果も、調査用地所有者をはじめとする地権者のご理解と文化庁並びに斎宮跡調査指導委員会の諸先生方のご指導、地元明和町や関係各位のご協力の賜ものと感謝いたします。

平成４年３月

斎宮歴史博物館

館長　中林昭一

例　　言

1．本書は、斎宮歴史博物館が国庫補助金の交付を受けて平成３年度に実施した史跡斎宮跡の発掘調査の概要をまとめたものである。

2．明和町教育委員会が、国庫補助金の交付を受け調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の報告書は別途、明和町教育委員会が刊行している。

3．遺構の実測にあたっては国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、方位は座標北を用いた。

4．遺構の時期区分は、「斎宮の土師器（三重県斎宮跡調査事務所年報1984）」による。

5．遺構表示記号は次の通りである。

ＳＢ；建物　ＳＫ；土坑　ＳＤ；溝　ＳＥ；井戸　ＳＡ；柵　ＳＦ；道路　ＳＸ；その他

6．遺物実測図は、特に標示がない限り実物の４分の１である。

7．斎宮跡の調査全般については、次の先生方の指導を得た。

京都府立大学学長	門脇禎二
千葉大学教授	北原理雄
椙山女学園大学名誉教授	久徳高文
(財)大阪文化財センター理事長	坪井清足
名古屋学院大学教授	植崎彰一
三重大学教授	八賀 晋
名古屋大学教授	早川庄八
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	福山敏男
皇学館大学教授	渡辺 寛

8．本概報の編集・執筆は斎宮歴史博物館調査課の吉水康夫、御村充生、大川勝宏、森田幸伸があたり、森脇景子、赤岩 操がこれを補佐した。

また、遺物整理には島村紀久子、角谷和代、鈴木美智子の協力を得た。

目　　次

Ⅰ．調査の経過と概要 …… 1
Ⅱ．第90次調査 …… 3
Ⅲ．第91次調査 …… 22
Ⅳ．第92次調査 …… 31
Ⅴ．第93次調査 …… 37
Ⅵ．第94次調査 …… 52

表・挿図目次

〔表〕1．平成３年度発掘調査地区一覧 …… 2
2．第90次調査　時期別遺構分類表 …… 4
3．第91次調査　時期別遺構分類表 …… 24
4．第92次調査　時期別遺構分類表 …… 32
5．第93次調査　時期別遺構分類表 …… 38
6．掘立柱建物一覧表 …… 55
7．竪穴住居一覧表 …… 56
8．斎宮跡発掘調査次数一覧表 …… 57
〔図〕1．平成３年度発掘調査地区(1:10,000) …… 巻頭３
2．第90次調査　遺構実測図(1:200) …… 5・6
3．〃　出土遺物実測図(ＳＫ6419・ＳＥ6440) …… 11
4．〃　出土遺物実測図(ＳＫ6424・6425) …… 13
5．〃　出土遺物実測図(ＳＫ6418・6428) …… 14
6．〃　出土遺物実測図(ＳＥ6410) …… 15
7．〃　出土遺物実測図(ＳＥ6410) …… 16
8．〃　出土遺物実測図(ＳＥ6410) …… 17
9．〃　出土遺物実測図(その他) …… 18
10．〃　出土遺物実測図(その他) …… 19
11．〃　５間×２間建物群配置図(1:1,000) …… 21
12．第91次調査　調査区位置図(1:2,000) …… 23
13．〃　遺構実測図(1:200) …… 25・26
14．〃　出土遺物実測図(ＳＥ6480) …… 28
15．〃　出土遺物実測図(ＳＥ6480・包含層) …… 29
16．第92次調査　遺構実測図(1:200) …… 31
17．〃　鍛冶山地区周辺遺構模式図(1:1,000) …… 33
18．〃　出土遺物実測図(ＳＤ2400・ＳＫ6510・6524) …… 35

19. 第93次調査　調査区位置図(1:2,000) …… 37
20.　〃　遺構実測図(1:200) …… 39・40
21.　〃　時期別遺構配置図(1:500) …… 41
22.　〃　中世墓実測図(1:40) …… 44
23.　〃　出土遺物実測図(ＳＫ6549・6551・6552) …… 46
24.　〃　出土遺物実測図(ＳＫ6548・6550) …… 47
25.　〃　出土遺物実測図(ＳＸ6533・6534・6537) …… 48
26.　〃　出土遺物実測図(ＳＥ6530・6535・6536・ＳＫ6545・ＳＤ6555)…… 49
27. 第94次調査　調査区位置図(1:2,000)・遺構実測図(1:200)・遺物実測図 …… 53・54
28. 斎宮跡地区表示 …… 61

写　真　図　版

巻頭1．第93次調査区遠景(北から)
巻頭2．左：羊形硯(第91次調査出土)　右：鳥形硯(第90次調査出土)
1．第90次調査　調査区全景(真上から)
2．　〃　上：西半区全景(東から)　下：東半区調査後(東から)
3．　〃　上：ＳＢ6420(東から)　下：ＳＢ6460(東から)
4．　〃　上：ＳＢ6422(東から)　下：ＳＢ6439・6441・6443(北から)
5．　〃　上：ＳＥ6440(東から)　下：ＳＥ6466(北から)
6．　〃　上：ＳＫ6458・6459(東から)　下：南トレンチ(西から)
7．第91次調査　上：調査区遠景(北から)　下：調査区全景(北から)
8．　〃　上：中央部建物群(東から)　下：ＳＢ6481(北から)
9．　〃　上：ＳＥ6480(北東から)　下：ＳＥ6490・ＳＢ6495(西から)
10. 第92次調査　上：調査区全景(南から)　下：ＳＡ2800(西から)
11.　〃　上：ＳＤ2400(西から)　下：ＳＤ2404・ＳＫ6524(西から)
12. 第93次調査　上：調査区全景(東から)　下：調査区全景(真上から)
13.　〃　上：ＳＢ6592・6593(東から)　下：ＳＢ6532(西から)
14.　〃　上：ＳＢ6539・6540(北から)　下：ＳＢ6540・6541(北から)
15.　〃　上：ＳＢ6553(西から)　下：ＳＫ6546～6552(西から)
16.　〃　上：ＳＤ6546(北東から)　下：ＳＥ6535(北東から)
17.　〃　上：ＳＸ6533(東から)　下：同　上
18.　〃　上：ＳＸ6534(東から)　下：ＳＸ6537(東から)
19. 第94次調査　調査区全景(北から)
20. 第90次調査　出土遺物
21.　〃　〃
22. 第91次調査　〃
23. 第93次調査　〃
24.　〃　〃　上：ＳＸ6533　中：ＳＸ6534　下：ＳＸ6537

Ⅰ．　調査の経過と概要

斎宮跡の顕彰と地域振興のため、地元明和町が中心となり昭和59年から史跡内を会場に毎年開かれている「斎王まつり」も本年で第８回を迎え、はなしょうぶの盛りである６月の第２日曜にあたる平成３年６月９日に行われた。毎年これに併せ発掘調査現地説明会を行っており、本年度最初の計画発掘調査である第90次調査もこれを目標に４月８日より開始した。

この第90次調査区はこれまでの周辺の調査から５間×２間の東西棟で大型の掘立柱建物が規格的に並ぶことが想定されている。今回はその南端の２棟の所在を確認し、あわせて当該区画の中央を南北に貫く溝の追確認を主な目的に、排土置場等の都合から２回に分けて実施した。

調査の結果、想定どおり２棟の掘立柱建物が確認され、平安時代初期の南北120m、東西60mの範囲には５間×２間の東西棟の掘立柱建物８棟が整然と並んでいたことが確認された。さらに調査の終盤には今回検出した井戸４基のうち、上部に現在の排水溝が通る１基を除き３基について専門業者に委託して完掘した。特にそのうちの１基からは櫛３点や斎串、曲物等の木製品が出土し、斎宮跡の発掘調査にとって井戸完掘の必要性を再確認することとなった。

第91次調査は斎宮歴史博物館の南側、斎宮跡発見の端緒ともなった通称古里地区と呼ばれる竹川字中垣内地内に幅12m、長さ52mのトレンチを設定して、７月17日から調査を開始した。ここは博物館建設の際資材搬入路となっていたところで、土が固くしまり、作業は非常に困難であった。また、史跡内でも博物館に近いこともあり、恒例の体験発掘教室もここで実施することとし、参加者の募集を中勢教育事務所から南勢志摩教育事務所管内までひろげ、遠方から通う熱心な子供たちの参加を得て７月29日から８月１日までの４日間実施した。

調査は当初から目的のひとつとしていた奈良時代の井戸を完掘したほか、その所在を想定していた奈良時代古道の延長部が北に迂回していることが明らかとなり、中世の掘立柱建物群などが検出された。また、遺物にも羊形硯の出土など多大な成果を得るとともに、中世の遺構群は今後斎宮以降の当地域を検討するうえで重要な資料を提供するところとなった。

第92次調査は当初冬に予定していたが、土地所有者の意向で急遽８月５日から開始した。

方格地割りの広がる通称中町地区に位置する当調査区は、東に隣接する第46次及び第88次調査から東西方向の区画溝と柵列、これに直交する南北方向の区画溝、奈良時代古道の側溝等の検出が予想された。そこで、これら周辺の調査成果に基づき、畑の北半部の約 220㎡について調査を実施した。遺構は予想された区画溝、柵列、奈良時代古道の側溝のほか調査区南東隅では何基かの土坑を重複して検出した。とりわけ東西方向の区画溝に並行する柵列は、さらに西へ続き、昭和54年度のトレンチ調査で検出された柱穴を経てなお西に延びることが想定され、南北溝よりも古いことが確認された。このことから、当該地周辺では整然とした方格地割りに

方位は合うものの、東西方向で大きくズレた区画が一時期に存することが明確となった。

第93次調査は、斎王の森南側に広がる地域の将来の史跡環境整備に向けた基礎資料を得、あわせて近鉄利用者や斎宮歴史博物館の来館者への広報の意味もあって近鉄斎宮駅のすぐ北側、斎宮字内山で約1,500㎡にわたり9月30日より調査を実施した。調査期間中には調査の進展に伴い週1回を原則として調査速報を作成し、入館者に発掘調査を実施中であることの周知に努めたが、実際に現地を訪れた人々は少なかった。しかし、11月24日に開催した発掘調査現地説明会では約150名の参加者を得て好評を得た。

また、第93次調査に引き続き御館地区で第94次調査を11月18日から実施した。斎王の森の南に広がる水田地帯は以前から粘土採取が行われ、少なからず遺構が削平されていると言われ、その遺存状態や東西方向の区画溝の存否を確認することを目的に幅4m、延長約60mのトレンチを設定して行った。結果は、予想どおり攪乱がひどく、僅かに溝1条を確認したのみである。しかし、遺物には平安時代後期の土器がややまとまって出土し、かつて周辺に当該時期の遺構が存したことをうかがえる。

一方、今年度から新たに面的な広がりをもつ調査区について航空写真撮影を実施することとなり、本年度は第90次調査区と第93次調査区について斜め写真と立体視及び図化の可能な垂直写真を専門業者に委託してラジコンヘリコプターにより撮影した。

さらに、上記の発掘調査以外に当斎宮歴史博物館が担当する史跡現状変更に伴う発掘調査のうちホーム延伸に伴う調査では、調査区が線路敷に近接して危険であるため終電車通過後から始発電車までの間に作業を実施しなければならず、1月下旬の深夜、寒風の中の発掘作業となり、遺構検出・掘り下げ、実測や写真撮影等に困難を極める調査となった。　（吉水康夫）

調査次数	地区名	調査面積㎡	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	区分
89－1	6ADM－O	200	H.4.1.6～H.4.1.16	明和町斎宮字内山3043－5	近畿日本鉄道株式会社	駅舎改築	4
89－2	6AGI－M	1,190	H.4.1.20～H.4.3.25	明和町斎宮字東加座2432－2 他	北村和吉他	盛土工事	2
89－3	6ADM－N·O	160	H.4.1.20～H.4.1.24	明和町斎宮字内山3060－4 他	近畿日本鉄道株式会社	ホームの延伸	4
90	6AFH－A·B	1,420	H.3.4.8～H.3.7.16	明和町斎宮字西加座2680 他	谷口清雄他	計画発掘調査	2
91	6ABH－F	624	H.3.7.17～H.3.12.5	明和町竹川字中垣内393 他	明和町	計画発掘調査	1
92	6AGN－A	220	H.3.8.5～H.3.9.9	明和町斎宮字鍛冶山2734－3	竹内玄之	計画発掘調査	2
93	6ADN	1,500	H.3.9.30～H.4.1.17	明和町斎宮字内山3045－12 他	乾秀治他	計画発掘調査	1
94	6AEM	220	H.3.11.18～H.4.1.21	明和町斎宮字御館2942	明和町	計画発掘調査	1

第1表　平成3年度発掘調査地区一覧

Ⅱ. 第90次調査

6AFH－A・B（西加座地区）

本年度最初の計画調査は4月8日から、旧斎宮跡調査事務所の東、斎宮字西加座2680番地ほかで実施した。現況は畑地で、調査区は南北28m東西52mの約1,420㎡にわたる。なお、今回の調査は排土置場等の都合から西半区→トレンチ調査→東半区の順に区切って実施した。

これまでの周辺の調査では、今回の調査区の南側で第86次調査(平成2年度)が実施され、東西方向の道路と溝が検出されている。さらにその南側で実施した第83次調査(平成元年度)では、柵と溝に囲まれた区画と建物群や、方格地割りの1ブロックの中央を南北方向に縦断する道路の西側溝が検出されている。また、北側では第51次調査(昭和58年度)、第61次調査(昭和60年度)、第73次調査(昭和62年度)により、平安時代初期から平安時代前期にかけての建て替えによって重複した掘立柱建物が100棟近くも検出されており、なかでも平安時代初期と考えられる5間×2間の大型建物が規則的に配置されていることが想定されていた。

今回の調査は、規則的配置のみられる建物群の南端にあたる2棟を確認することと、区画の中央を南北方向に分断する道路遺構の検出を主たる目的とした。

基本的層序は、Ⅰ；耕作土、Ⅱ；灰褐色土(遺物包含層)、Ⅲ；地山(黄褐色土又は黒色土)で、基本的には、黄褐色土上面で検出したが、北半では地山面が黒色土であったため、その上面で検出した。その深さは、北で約0.5m、南で約0.2mである。

(1) 奈良時代後期の遺構

この時期の遺構には、竪穴住居2棟、土坑2基がある。

竪穴住居SB6421は調査区の西端中央で検出した。規模は3.5m×3.1mで隅丸方形を呈す。東壁にカマドの痕跡と思われる焼土が見られたが、平安時代前期の掘立柱建物SB6415・6416の柱穴にその大部分が削平されていた。床面は、遺構検出面から0.1mと比較的 浅く、貼り床の痕跡が部分的に見られた。長軸方向はE4°Nで、区画溝の方位と一致する。これらの前後関係は、先行するものからSB6421→SB6416→SB6415の順である。遺物は土師器杯・皿・甕、製塩土器、須恵器小壺・杯・鉢等が出土した。竪穴住居SB6446は、今回の調査で検出した竪穴住居の中では最も大きく約4.7m×4.3mの規模で、調査区のほぼ中央で検出した。カマドは明確に検出できなかったが、東壁に焼土と支柱と考えられる甕片がみられ、東壁に位置したものと思われれる。遺物は、土師器杯・皿・甕、須恵器甕片が出土した。

SK6419は、調査区の西部中央に、SK6449は、北部中央に位置する土坑である。SK6419は、平安時代前Ⅱ期の土坑SK6418を掘り下げていく段階で検出した。その大部分をSK6418により削平されていたが、底部のみを6.0m×3.0mの規模で検出した。深さは遺構検出面から

約0.5mで、埋土は黒色土である。遺物には、土師器杯・皿・甕・鍋等がある。ＳＫ6449は、長径7.0m、短径2.0m、深さ0.1mの浅い土坑で、埋土の重複状況からＳＫ6449がＳＫ6451より古い。遺物は、土師器椀・杯・甕等が出土した。

（２）平安時代初期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物７棟、竪穴住居１棟、土坑５基、井戸２基がある。

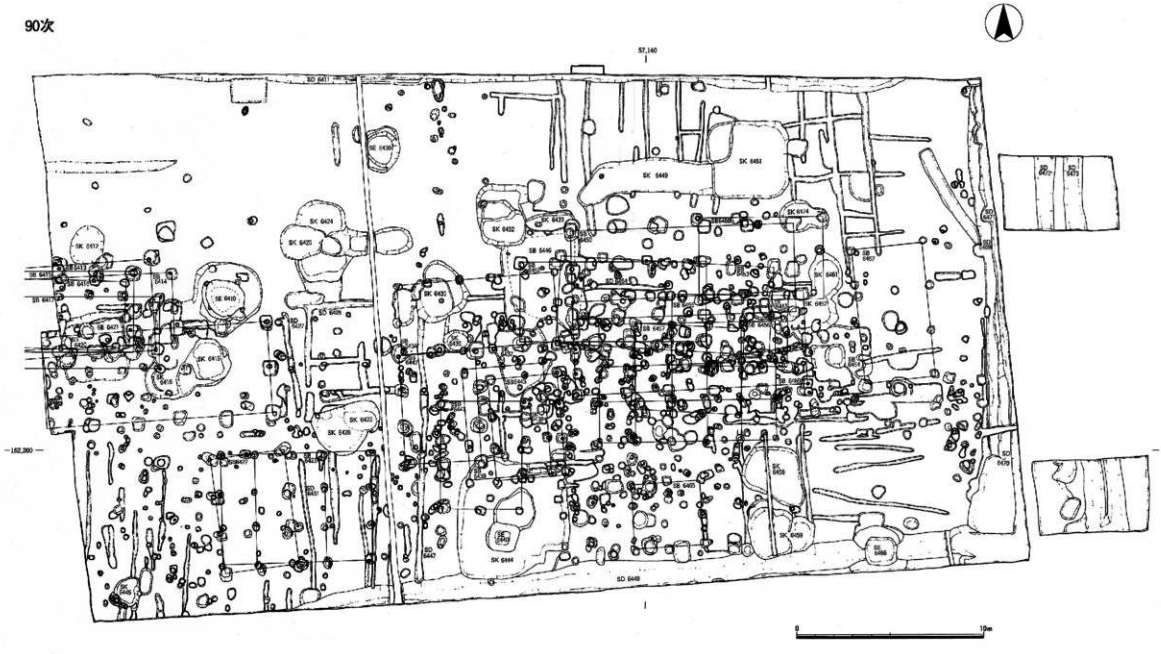
掘立柱建物ＳＢ6414・6420は調査区西端中央で検出した。ＳＢ6414は、柱掘形が一辺0.6m、深さ0.5m前後で、建物規模は梁行が3.8m、桁行は調査区外に続くため不明である。ＳＢ6420は、５間×２間の大型掘立柱建物で、棟方向はＥ４°Ｎを示す。この建物は、これまでの調査

		遺構の種別			
		ＳＢ	ＳＫ	ＳＤ	ＳＥ
奈良時代後期		6421・6446	6419・6449	――	――
平安時代	初期	6414・6420・6450・6460 6464・6465・6467・6468	6432・6444・6445 6458・6459	――	6430 6440
	前Ⅰ期	6416・6417・6422・6455	6425・6451	6447	6466
	前Ⅱ期	6413・6415・6439・6441 6442・6443・6452・6453 6457	6412・6418・6424 6428・6429・6433 6435・6461・6462 6463・6474（6438）	6454 （6427・6431）	6410
	中期	6434	6436・6437	――	――
	後Ⅰ期	6456	――	6411	――
	後Ⅱ期	6423	――	――	――
鎌倉時代		――	――	6472	――
不明		――	――	6426・6448 6469・6470 6471・6473	――

（　　）は平安時代前期のなかで時期細分できなかったもの

第２表　第90次調査　時期別遺構分類表

90次



第２図　第90次調査　遺構実測図（１：200）

で検出されているシンメトリーに並ぶ建物群の西側列のうち最南棟にあたる。柱掘形は一辺0.8m、深さ0.5m前後で、隅丸方形を呈し、埋土は黒褐色土で、建物の規模は桁行12.0m、梁行4.8mである。ＳＢ6450・6460は調査区東寄りのほぼ中央付近で検出した５間×２間の大型の掘立柱建物である。その前後関係は、ＳＢ6450がＳＢ6460より古い。ＳＢ6450は、柱掘形の一辺が0.7m～0.8m、深さ約0.4mで、埋土は黒褐色土である。規模は桁行12.0m×梁行4.8m、遺物には土師器杯・皿・椀・甕、須恵器杯・壺・甕が出土している。なお、この建物については現段階では平安時代初期としたが、同時期の建物ＳＢ6460との重複関係等から奈良時代後期までさかのぼる可能性がある。ＳＢ6460は、ＳＢ6420と同様、シンメトリーに並ぶ建物の一つで、東側列の最南部の４棟目にあたる。この建物もこれまでの調査の成果から、当初より想定していた地点で検出した。棟方向がＥ４°Ｎで、規模は桁行12.3m、梁行4.9mである。埋土は黒褐色土で一部に径30cm程度の柱痕跡がみられた。

竪穴住居ＳＢ6464、掘立柱建物ＳＢ6467・6468は、調査区西部中央で検出した。平安時代初期の竪穴住居の検出例は斎宮跡全体では４例目にあたり、方格地割りの内側では３例目にあたる。ＳＢ6464は、南北3.6m、東西3.2mの長方形を呈し、東壁のほぼ中央にカマドをもつ。同時期の掘立柱建物ＳＢ6460との切り合いからＳＢ6464がＳＢ6460に先行するものである。遺物は、カマド内部から土師器甕・鍋が、床面から土師器杯・皿、須恵器甕片等が出土した。ＳＢ6467は、３間×２間の南北棟である。柱掘形は、一辺0.5m、深さ0.3m前後である。遺物は少量の土師器片が出土した。ＳＢ6468は３間×２間の東西棟で、棟方向はＥ１°Ｎで、この時期にはめずらしく方格地割りの方位とは異なる。埋土の切り合い関係から同時期のＳＢ6420やＳＢ6460等の５間×２間の建物よりは新しい。ＳＢ6465は調査区南端部中央で検出した２間×２間の小型の建物である。農道を挟んだ北側で実施された第51次調査及び第61次調査においても同時期の建物が検出されているが、これらはいずれも総柱建物である。

土坑５基のうちＳＫ6432は調査区の北部に、ＳＫ6444・6445・6458・6459は調査区の南部に位置する。ＳＫ6432は、長径3.0m、短径2.5mの隅丸方形を呈し、底部に段差が見られる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕片が少量出土した。ＳＫ6445は、長径1.5m、短径1.2mの不整円形を呈する土坑である。遺物は、土師器皿・鍋・甕、須恵器壺・甕などが出土している。ＳＫ6458・6459は、２基の土坑が重複するものと考えたが、出土遺物や埋土の状況等を考慮すると一つの土坑になる可能性もある。ＳＫ6458は、長径3.0m、短径2.8mの不整円形を呈し、出土遺物は土師器杯・皿・甕・鍋・竈片、須恵器 甕・蓋片等が比較的多く出土した。ＳＫ6459は、一辺2.6mの不整円形を呈し、遺物は土師器杯・皿・鉢・高杯・ミニチュア土器の甑等が出土した。

井戸ＳＥ6430は、調査区の北東部で検出した。この井戸については、井戸の西端をかすめる

ように排水管が埋設されており、危険防止のため遺構面から約2.0mで掘削を取り止めた。遺物は、土師器杯・皿・甕・高杯、須恵器椀・壺等が出土した。ＳＥ6440は調査区の南端中央で検出した井戸で、一辺1.5mの隅丸方形を呈し、深さは2.4mである。井戸の壁面は内側へ傾斜しており、底部は直径約1.0mの円形を呈する。これまで斎宮跡で完掘した井戸の中ではもっとも浅い。遺物は、土師器杯・皿・甕・高杯・ミニチュア土器の鍋、須恵器杯蓋、製塩土器等のほか、井戸の上部からは鳥形硯の頭部片が出土した。なお、このＳＥ6440の上部では井戸の廃棄後に掘られた一辺約6.0m、深さ0.2mの隅丸方形の広くて浅い土坑ＳＫ6444が検出されている。遺物は比較的多く出土し、土師器杯・皿・甕・杯蓋・竈・高杯、須恵器杯・甕等がある。

（３）平安時代前Ⅰ期の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物４棟、土坑２基、溝１条、井戸１基がある。

掘立柱建物ＳＢ6416・6417・6422は調査区の西部で検出した。ＳＢ6416・6417は、ほぼ同じ場所で検出し、ともに桁行が調査区外にのびるため規模は不明である。棟方向は、ＳＢ6416がＥ２°Ｓで、ＳＢ6417がＥ０°Ｗである。ＳＢ6422は、３間×２間の南北棟で、桁行6.0m、梁行4.0mを測る。棟方向はＮ８°Ｗで区画溝の方位とややずれる。柱掘形は一辺0.6m～0.8m、深さは0.5m前後である。

土坑ＳＫ6425は調査区北部やや西寄りに、土坑ＳＫ6451は調査区北部の東寄りに位置する。ＳＫ6425は、長径7.0m、短径1.2mの隅丸長方形を呈し、平安時代前Ⅱ期の土坑ＳＫ6424と重複する。埋土は上層が礫混じりの黒褐色土、下層が黒色土で遺物のほとんどが上層からの出土である。出土した遺物は、整理箱にして２箱ほどで、土師器杯・椀・皿・甕・杯蓋・小型鍋等がある。ＳＫ6451は、一辺約4.0mの隅丸方形を呈し、深さは約0.2mと浅い。遺物は比較的多く、土師器杯・皿・甕・椀・高杯・鍋、須恵器杯蓋等が出土した。

井戸ＳＥ6466は、調査区の北東隅で検出した。上部を鎌倉時代後半～室町時代始めまで機能していたと考えられる溝ＳＤ6448に削平される。規模は直径約2.0m、深さ約4.5mである。平安時代前Ⅰ期の遺物のほとんどが検出面から約1.5m前後の深さで出土しており、埋没年代は平安時代前Ⅰ期と考えられるが、形成時期は平安時代初期まで遡る可能性もある。完掘したにもかかわらず、出土した遺物は比較的少ない。

（４）平安時代前Ⅱ期の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物９棟、土坑11基、溝１条、井戸１基がある。

掘立柱建物ＳＢ6413・6415は調査区西端部で、ＳＢ6439・6441・6442・6443は調査区中央部で、ＳＢ6452・6453・6457は調査区東部中央付近で検出した。ＳＢ6413・6415が位置する場所は、平安時代初期から平安時代前Ⅱ期にかけての掘立柱建物が数多く集中して検出された場所である。ＳＢ6413は、桁行が調査区外に続く、東西３間以上、南北２間の東西棟である。棟方

向はＥ４°Ｎである。ＳＢ6415についても桁行が調査区外へのびるため規模は不明で、柱掘形は一辺0.8m前後、深さ0.7mから0.8mと比較的大型である。ＳＢ6439・6441・6442・6443はすべて３間×２間の南北棟である。ＳＢ6439は、桁行6.0m、梁行4.3mで、柱掘形は一辺約0.5m、深さ0.5m前後で、棟方向はＮ５°Ｗである。ＳＢ6441は、ＳＢ6439に先行するもので、一部で径約10cmほどの柱痕を検出した。ＳＢ6442は、柱掘形が一辺0.8mから0.9m、深さ0.5m前後と大きく、各柱穴からは比較的多くの遺物が出土した。棟方向はＮ４°Ｗである。ＳＢ6443は、桁行5.4m、梁行3.6mと今回検出した掘立柱建物の中では最も規模が小さい。ＳＢ6452・6453はともに５間×２間の東西棟で、棟方向や規模にやや違いがあるものの、ほぼ同一場所に位置しており、建て替えの可能性が考えられる。建物の新旧関係はＳＢ6452が古く、ＳＢ6453が新しい。なお、ＳＢ6453の柱穴の一つからは石帯が出土した。ＳＢ6457は３間×２間の小型の建物で柱掘形も小さい。

土坑ＳＫ6412・6418・6424・6428・6429は調査区西部に位置する。ＳＫ6412は直径約2.0m、深さ0.2mで、土師器杯・甕、須恵器甕、灰釉陶器片等が出土した。ＳＫ6418は長径約4.0m、短径約3.0mの楕円形を呈し、奈良時代後期の土坑ＳＫ6419と重複している。出土遺物は、土師器杯・皿・椀、灰釉陶器椀・壺、須恵器杯蓋等がある。ＳＫ6424は、長径4.0m、短径2.5mの楕円形を呈し、比較的多くの遺物を出土した。器種は、土師器杯・皿・甕・高杯、土錘、須恵器杯蓋・甕・壺等がある。そのほとんどが斎宮跡標識遺構のＳＫ3127(前Ⅱ期古)期に属する。ＳＫ6428は、同時期の土坑ＳＫ6429と切り合い、その新旧関係はＳＫ6428が古い。ともに埋土は暗黒褐色土で、ＳＫ6428が土師器杯・小椀、須恵器杯の他、墨書の認められる灰釉陶器片等を、ＳＫ6429では土師器杯・皿・甕・鍋、灰釉陶器段皿、須恵器壺等が出土した。

土坑ＳＫ6433・6435は調査区中央部で、ＳＫ6461・6462・6463・6474は調査区の東部で検出した。いずれも小規模な土坑である。ＳＫ6461からは、土師器杯・皿・甕、須恵器甕・壺・灰釉陶器水注・皿等が、ＳＫ6462は、土師器杯・皿・甕・鍋、須恵器甕・杯蓋、灰釉陶器椀片が、ＳＫ6463からは、土師器杯・皿、黒色土器片、灰釉陶器椀が、ＳＫ6474からは土師器片が少量出土した。

ＳＤ6454は、調査区のほぼ中央で東西に約31m、南北に約15mを検出した幅0.2m～0.3m、深さ約５cmのＬ字状に走る溝で、溝底のレベルが一定でないため排水溝とは考えにくい。

井戸ＳＥ6410は、調査区の西部中央で検出した斎宮跡では比較的大きな井戸である。掘形は検出面で、径約4.0m×3.0mの楕円形を呈するが、約0.5m掘り下げた地点で一辺約2.0mの隅丸方形、深さ約1.5m付近で壁面がオーバーハングして径3.0m以上、深さ4.0m以下で一辺1.5mの隅丸方形となった。約3.5m掘り下げたあたりから涌水が始まり、約4.5mで底に達した。埋土は、暗茶褐色土(第１層)→暗茶褐色粘質土(第２層)→暗黒茶褐色粘質土(第３層)→青灰色砂礫

層(第４層)である。第１層～第３層上部から土師器杯・皿・甕、黒色土器、灰釉陶器小壺・皿、緑釉陶器片等が、第３層下部から第４層にかけて多量の土器片のほか櫛、曲物、斎串、桃の種、木片等が出土した。検出面から約1.5mの深さである第１層～第２層にかけて平安時代中期の遺物が、第２層から第４層にかけて平安時代前Ⅱ期の遺物が出土した。したがって、この井戸は平安時代前Ⅱ期にはじまり、平安時代中期には埋没したものと考えられる。

他に平安時代前半としか判別出来なかった遺構にＳＤ6427・6431がある。

（５）平安時代中期の遺構

この時期の遺構に掘立柱建物１棟、土坑２基がある。

掘立柱建物ＳＢ6434は調査区のほぼ中央で検出した。柱掘形は一辺0.4m、深さ0.3m前後で、規模は５間×２間の東西棟である。この時期の建物は、比較的区画溝の方位に規制されないものが多いが、この建物ではＥ５°Ｎと溝の方位とほぼ一致する。

土坑ＳＫ6436・6437は調査区のほぼ中央部に位置し、いずれも少量の土器が出土したのみである。ＳＫ6436はＳＢ6434と重複し、その新旧関係はＳＢ6434が古い。

（６）平安時代後Ⅰ期の遺構

この時期の遺構に掘立柱建物１棟、溝１条がある。

掘立柱建物ＳＢ6456は、５間×３間の総柱建物である。柱掘形は0.3m前後、深さ0.5mで、棟方向はＥ１°Ｎである。この時期の建物で、これまで斎宮跡では４間×２間、３間×２間の総柱建物は検出されているが今回の規模で総柱建物が検出されたのは初例である。

溝ＳＤ6411は調査区北端で東西約40mにわたって検出された溝である。埋土は茶褐色土である。出土遺物には土師器杯・皿・甕、土錘、須恵器片等がある。

（７）平安時代後Ⅱ期

この時期の遺構は掘立柱建物１棟のみである。

掘立柱建物ＳＢ6423は調査区南西部で検出された。規模は３間×２間の身舎に、東面及び西面に庇をもつ。柱掘形は小さく、一辺0.3m前後、深さ約0.4mで、埋土は茶褐色土である。棟方向はＮ２°Ｅを示す。

（８）鎌倉時代の遺構

この時期の遺構には北トレンチで検出した溝ＳＤ6472がある。南トレンチでもその延長部分を検出しており、南北に走る溝である。

（９）その他

溝ＳＤ6426・6448・6469・6470・6471・6473はいずれも時期不明である。しかし、調査区東端で検出したＳＤ6469・6470からの出土遺物には、中世の遺物に混じって平安時代前期の土師器杯・甕・高杯片等が見られた。

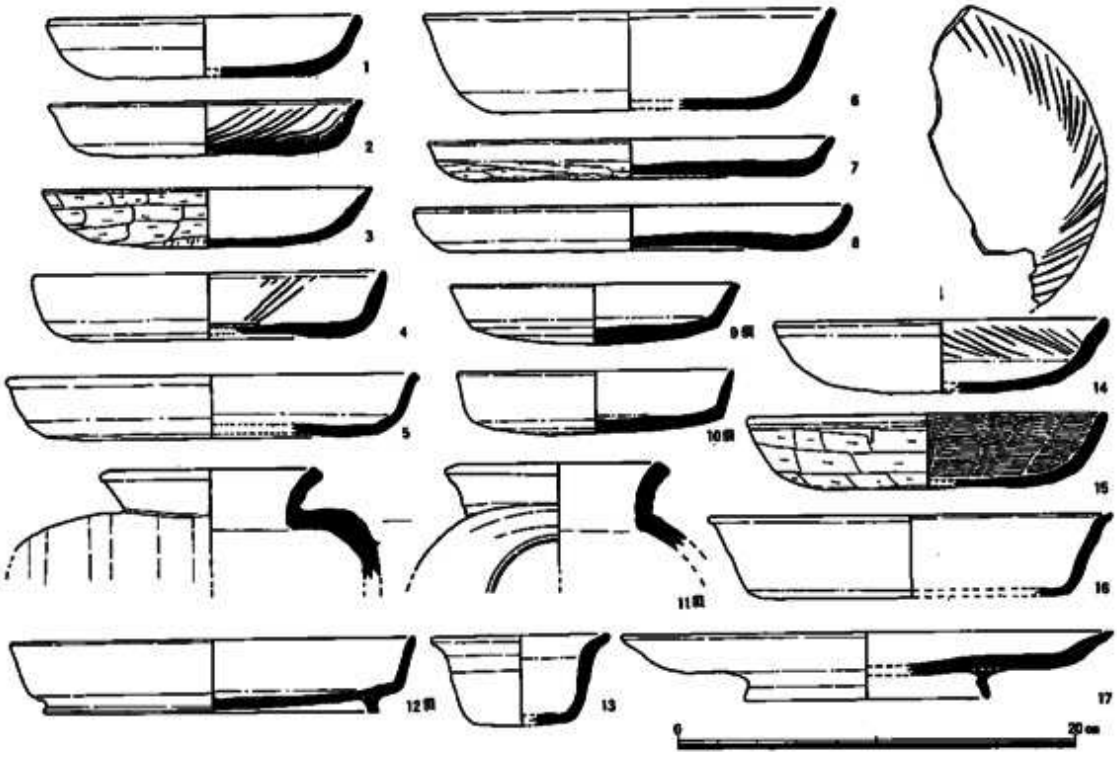
(10) 遺物

遺物は整理箱にして約220 箱である。今回出土した遺物は、遺構の時期に対応して平安時代前Ⅰ期及び前Ⅱ期のものが多い。

平安時代初期の土坑ＳＫ6419からは土師器杯・皿・甕、須恵器杯蓋等が出土した。(１～８)は、(３)を除いていずれもｂ手法によるものである。Ｃタイプ(奈良型)の杯である(４)や須恵器杯(９・10)などは奈良時代まで遡る可能性があり、混入もしくはＳＫ6419によって削平された土坑の遺物であることも考えられる。

同じく平安時代初期の井戸ＳＥ6440からは、土師器杯・椀・台付皿、ミニチュア鍋、須恵器杯・横瓶等が出土した。横瓶(11)は体部上半を残すのみで、口径11.3cmである。ミニチュア土器の鍋(13)は、口縁端部をヨコナデ、内面を指オサエ及びナデ調整する。口径9.2cm、器高4.6cmである。杯(14)は口径16.8cm、器高3.7cmで内面に粗い放射状暗文 がみられる。(15)は外面を全体にヘラ削りをするｃ手法によるもので、内面全体を密に横ハケメ調整をほどこす。

平安時代前Ⅰ期の土坑ＳＫ6424・6425からは比較的残りのよい好資料を得られた。ＳＫ6424からは土師器杯・皿・甕・高杯、須恵器杯蓋・甕・壺等が出土した。土師器杯には、口縁端部



第３図　第90次調査　出土遺物実測図　ＳＫ6419：１～10、ＳＥ6440：11～17（１：４）

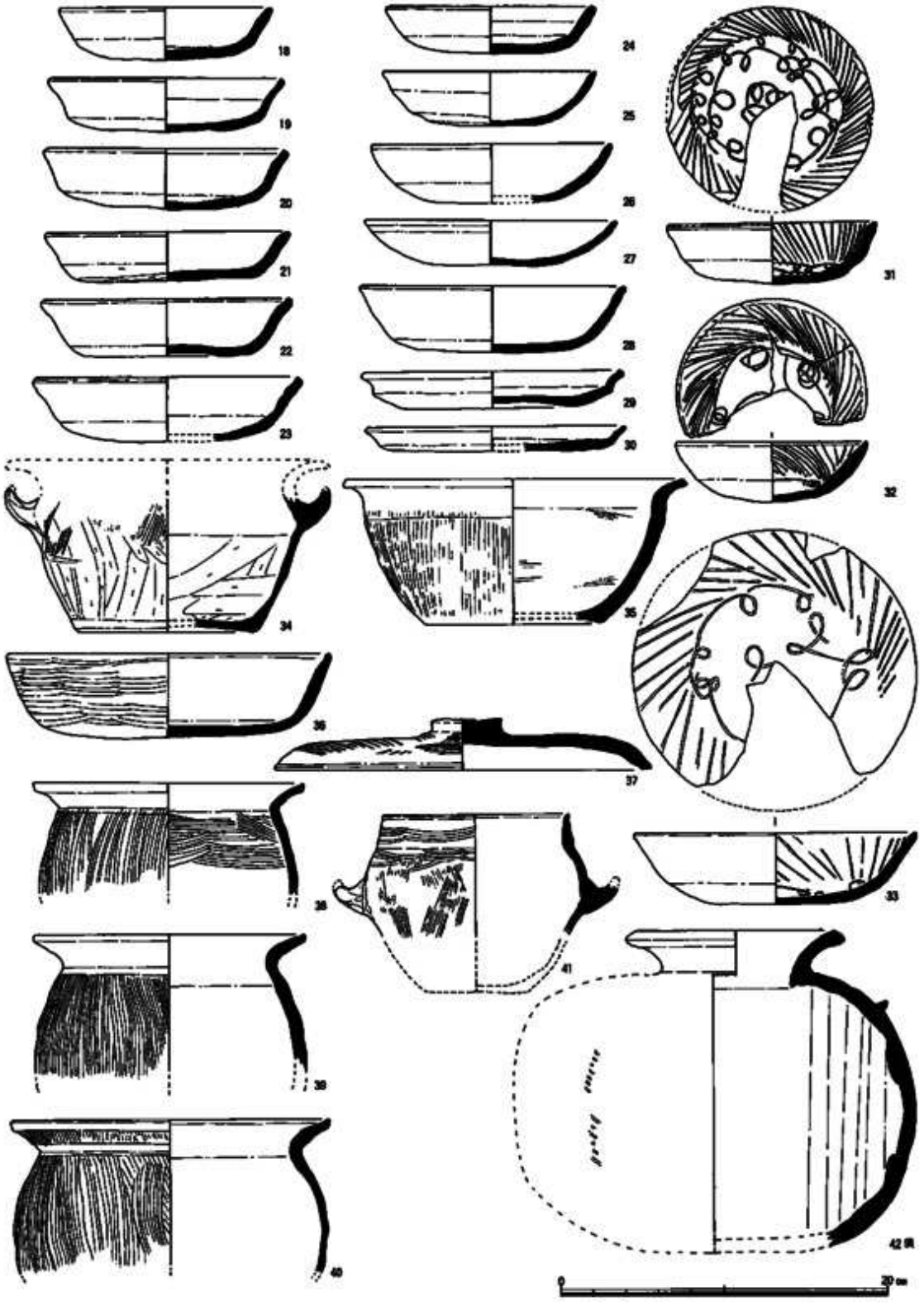
が外反気味にたちあがるAタイプ(19～23)と口縁部が外方にほぼまっすぐたちあがるBタイイプ(24～28、32・33)がある。(31～33)は、内面に放射状暗文及び螺旋状暗文がみられる。(31・32)は、口径12cm前後の小型、(33)は口径17.1cmの大型の杯である。皿(29・30)はどちらもAタイプで、(29)は口縁部をヨコナデするe手法、(30)は外面底部のみをヘラケズリをするb手法によるものである。(34)は、口径10.8cm、器高8.9cmの把手付鍋である。体部外面にはヘラケズリとタテハケメを施し、内面 下半では横方向にヘラケズリを施す。(35)は、口径20.7cm、器高8.8cmの鍋で体部外面 にタテハケメを施す。

SK6425からは土師器杯・椀・皿・甕・把手付鍋、須恵器の横瓶等が出土した。土師器の甕(38～40)は、いずれも体部外面を密にタテハケメを施し、口縁部を強く外反させ、端部が上方向に立ち上がるものである。(41)は、口径11.4cmの比較的小型の把手付鍋で、口頸部に横方向のミガキを、体部外面には縦方向のハケメを施した後にミガキを施す丁寧な作りである。横瓶(42)は口径11.8cmを測り、体部外面にはタタキがみられるほか粘土紐の痕跡がみられる。

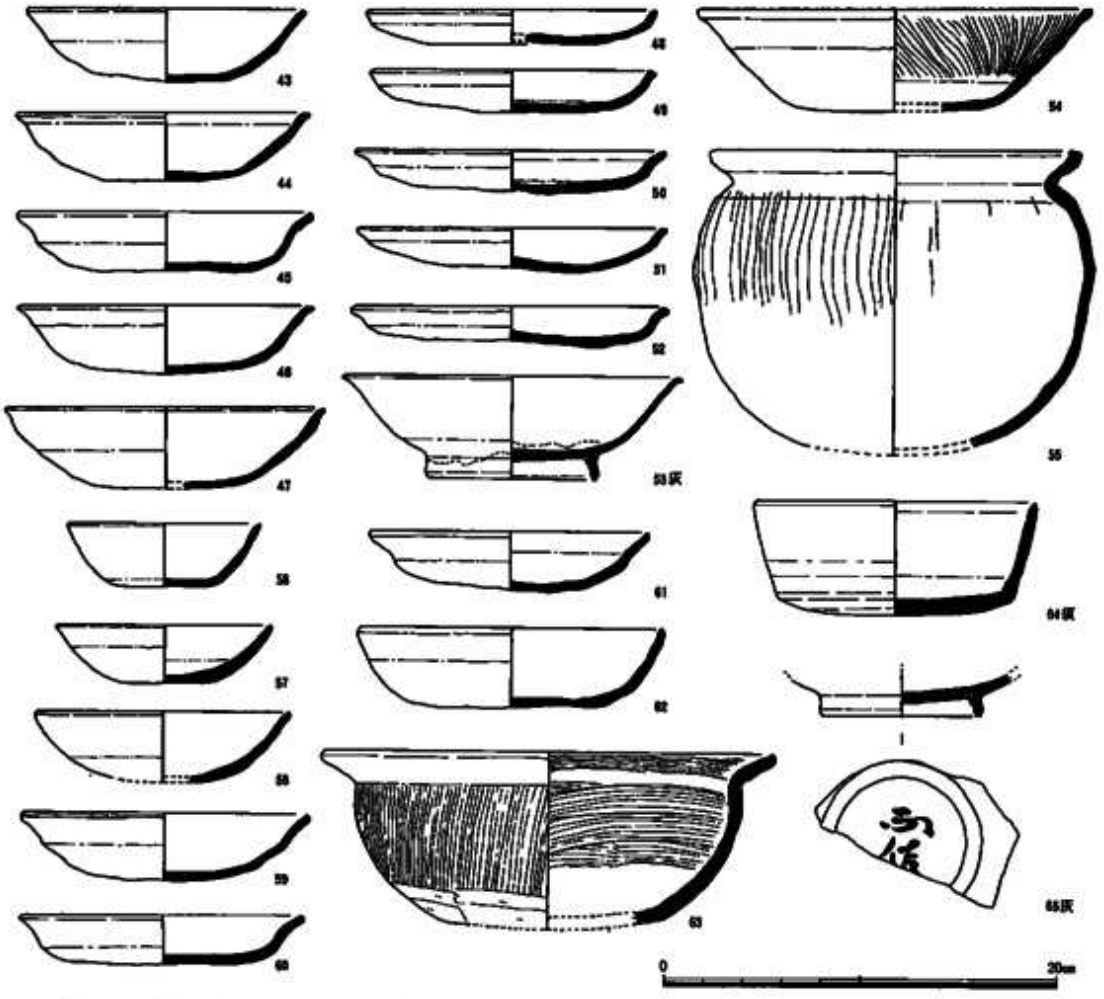
SK6418は、平安時代前Ⅱ期の土坑で土師器杯・椀・皿・甕、灰釉陶器椀・壺、須恵器杯蓋等が出土した。(43)は、口縁部が外方に真っ直ぐのびる。(44～47)は、口縁端部がやや外反する杯で、調整はすべてe手法によるものである。皿も口縁部が外方にまっすぐにのびるもの(48・49)と、外反するもの(50～52)とがある。灰釉陶器椀(53)は、口径17.1cm、器高5.2cmで、釉薬はツケガケによるものである。土師器甕(55)は、口径17.8cm、残存高15.1cmで、体部上半に粗い縦ハケメを施す。

同時期の土坑SK6428からは、土師器杯・椀・皿・甕、須恵器杯、灰釉陶器皿等が出土した。(56・57)は、口径10cm前後の小型のBタイプの土師器椀、(58～61)はAタイプの土師器杯である。土師器鍋(63)は、口径22.8cm、器高約9cm、体部外面を密にタテハケメ調整、底部をヘラケズリ、口縁部内面から体部内面にかけては横ハケメを施す。灰釉陶器皿(65)には底部に墨書が認められるが判読不能である。

井戸SE6410からは、土師器の杯・皿・甕・高杯・竈、黒色土器、須恵器の杯蓋・壺・甕、灰釉陶器の椀・皿・小瓶の他、横櫛、斎串、曲物底板、用途不明木製品等様々な遺物が出土している。土師器杯は、Aタイプ(66～75・83)とBタイプ(76～82・89)にわかれ、調整はすべてe手法によるものである。なお、(75)には外面底に「大」とも読める墨書がみられる。(89)には放射状暗文、螺旋状暗文がみられた。皿についても同様にAタイプ(86～88)、Bタイプ(84・85)にわかれる。黒色土器(94・95)は、内面だけが黒い黒色土器A類で、体部外面にヘラケズリ、内面全体にミガキを施す。(95)には底部見込み部分に螺旋状暗文がある。甕は体部が球形に近いもの(90～92)と細長いもの(93)がある。いずれも体部外面を縦ハケメ、底部はヘラケズリを施し、口縁端部はいずれも上方に立ち上がる。竈(97)は口径24cm、器高28cmで、体部外面

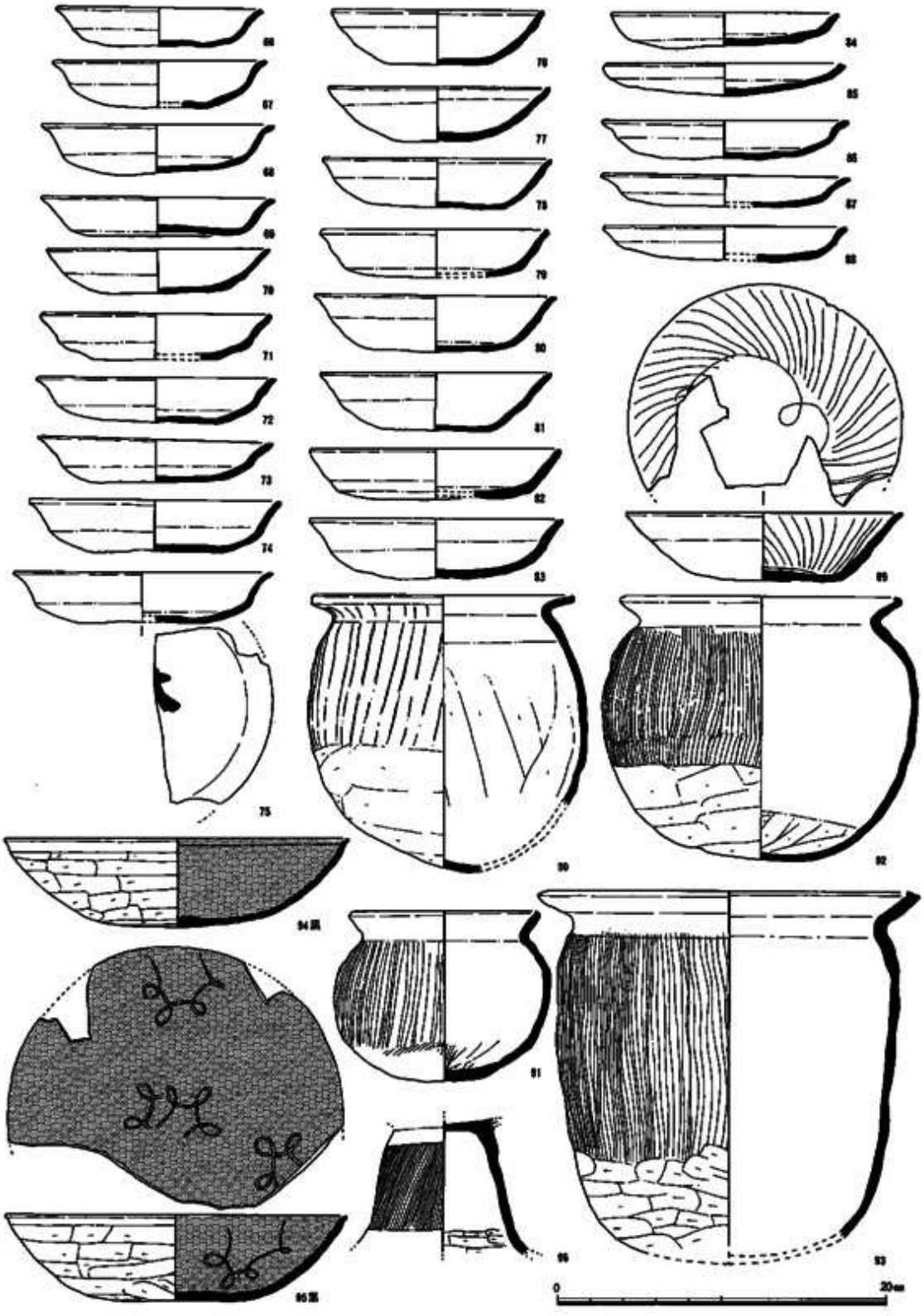


第４図　第90次調査　出土遺物実測図　ＳＫ6424：18～35、ＳＫ6425：36～42（１：４）

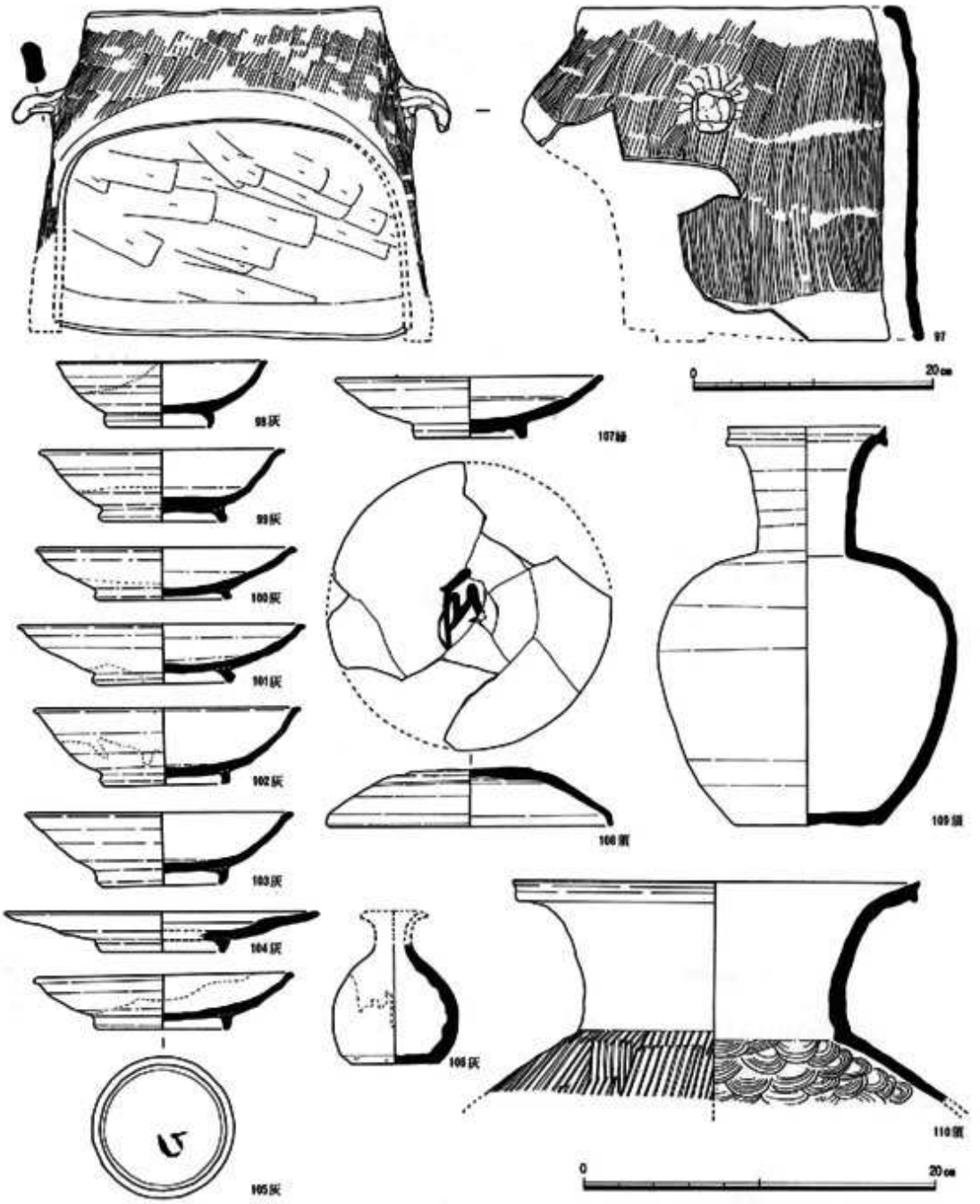


第5図　第90次調査　出土遺物実測図　ＳＫ6418：43～55、ＳＫ6428：56～65（１：４）

を密に縦ハケメ調整を、内面全体にはヘラケズリを施す。灰釉陶器椀・段皿(98～105)は、黒笹90号窯期に相当するものばかりである。(105)は、外面底部に判読不能の墨書が描かれているものもある。灰釉陶器小瓶(106)は残存高6.8cmで口縁部は欠落している。須恵器杯蓋(108)は天井部中央に「厨」と読める墨書がある。長頸壺(109)は井戸の底に近い深さ4.0mの涌水地点で検出されたため体部外面に黒く鉄分が付着している。口径9.8cm、残存高22.8cmである。甕(110)は、口縁部と体部上半の一部を残すのみで、外面と内面にタタキがみられる。横櫛(111～113)は、深さ4.0m前後で出土した。今回出土した３点のうち、(111)は最も残りがよく幅9.3cm、高さ3.9cm、厚さ7.5mmである。曲物底板は、(114)が推定口径17.4cm、(120)が推定口径23.4cmである。斎串は大きなもの(116)と小さなもの(121)の２点出土した。(116)は長さ15.7cm、幅1.2cmで確実な切り込みは上部に４カ所のほか、下部にも数カ所の切り込みらしきものがある。用途不明木製品には(115・117・119)がある。中でも(119)は、両側面に約３cmの等間隔で切り込みがあり、



第６図　第90次調査　出土遺物実測図　ＳＥ6410：66～96（１：４）

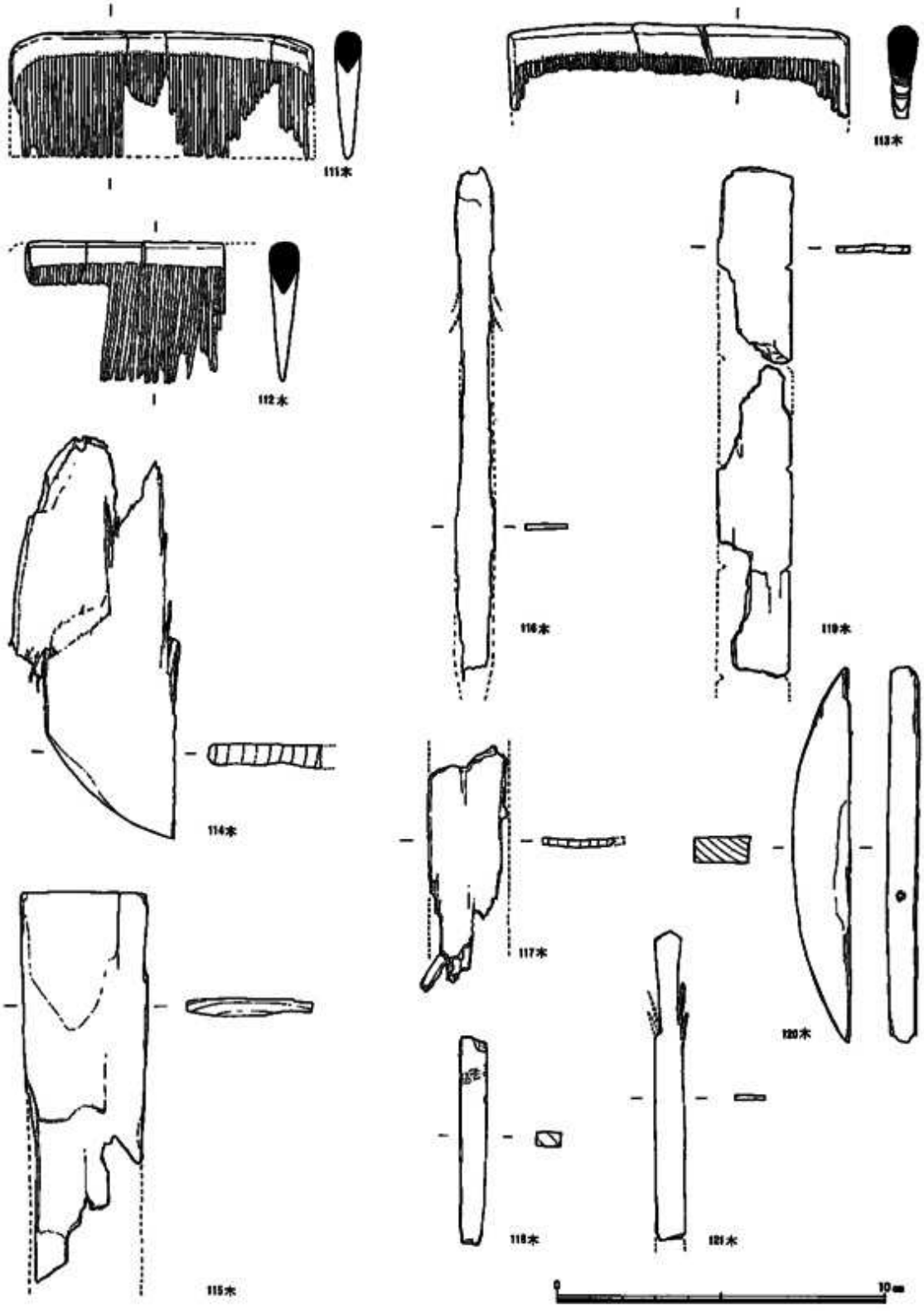


第7図　第90次調査　出土遺物実測図　ＳＥ6410：97（１：６）、98～110（１：４）

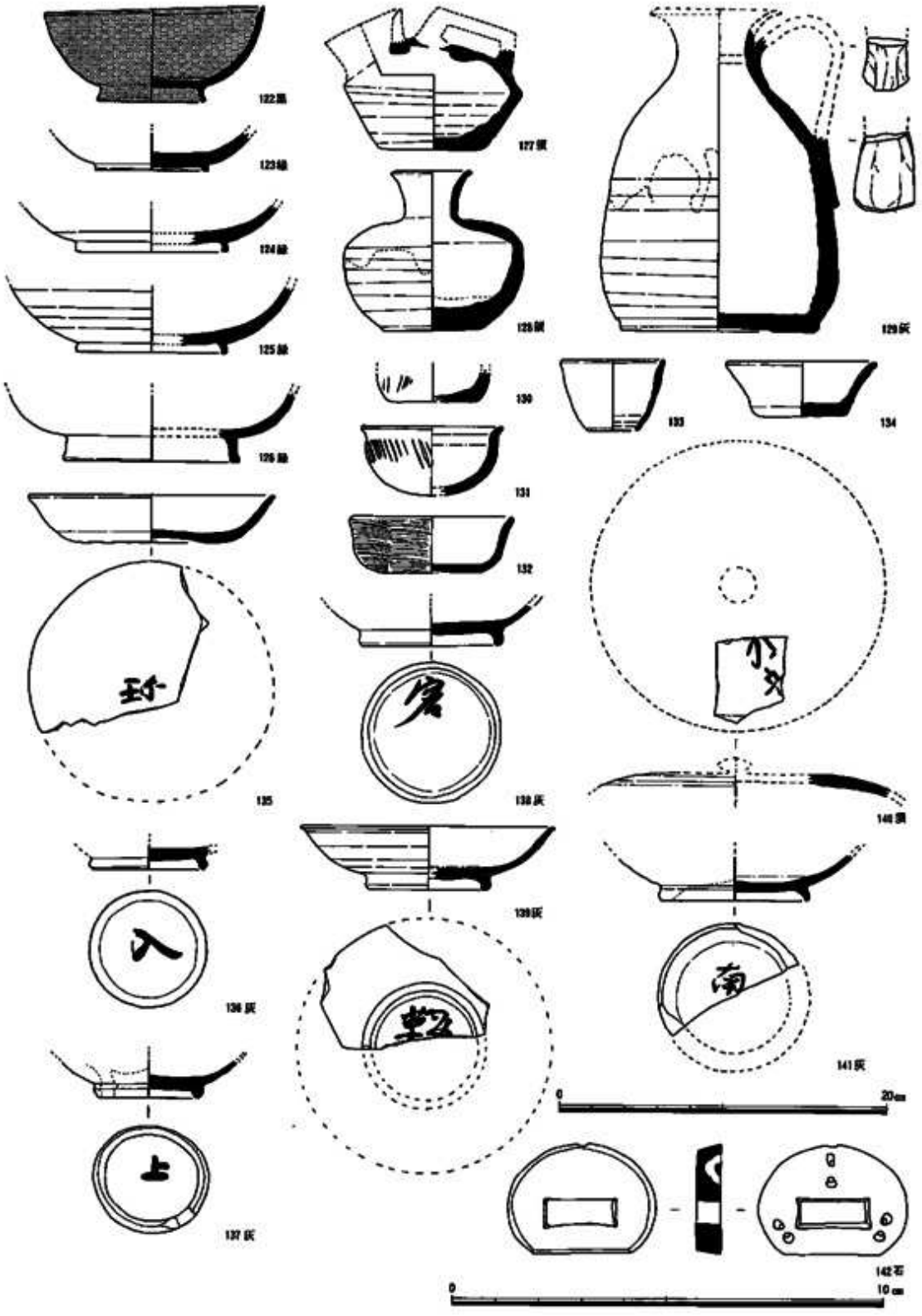
物差しとも考えられるものである。

その他、特殊遺物に緑釉陶器(123～126)、ミニチュア土器(130～134)、墨書土器(130～141)、石帯(142)、鳥形硯の頭部片(143)、羽毛状線刻入り陶器片(144・145)、鳥形鈕付平瓶の把手片(146)がある。

ミニチュア土器には土師器甕(131)・杯(132)・甑(133)・鉢(134)がある。(131)は、口径8.9cmで、



第８図　第90次調査　出土遺物実測図　ＳＥ6410：111～121（１：２）



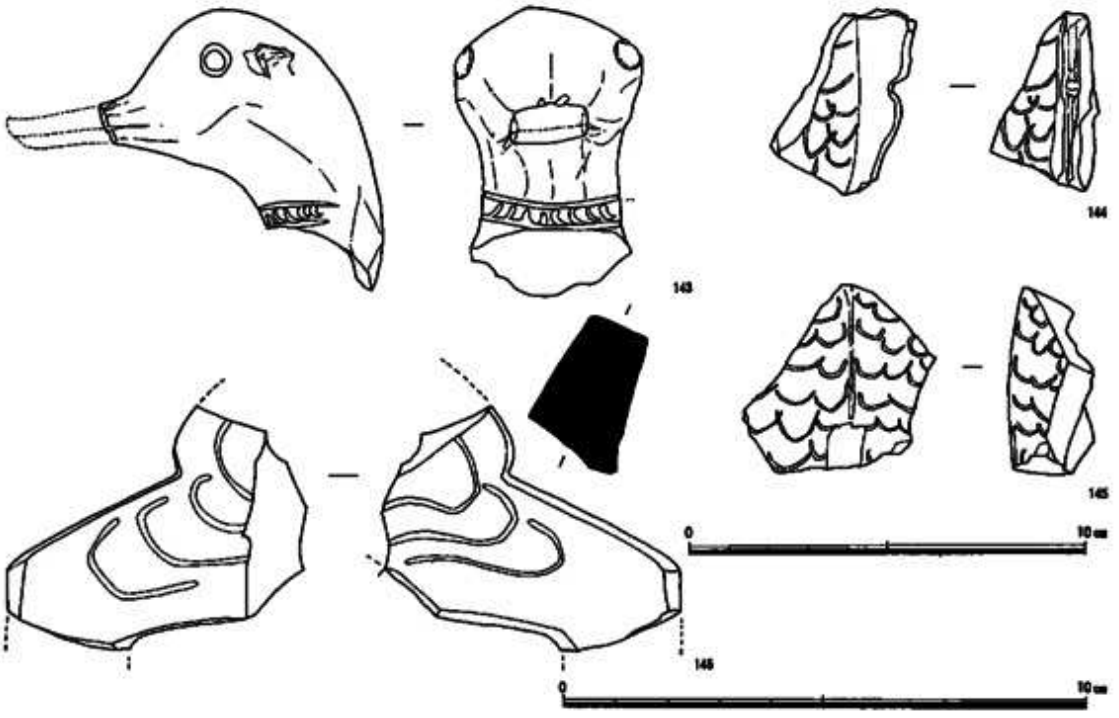
第９図　第90次調査　出土遺物実測図　その他の出土遺物　122～141（１：４）、42（２：３）

体部外面に粗い縦ハケメ、内面底部に強い指オサエを施す。杯(132)は、体部外面全体に丁寧なミガキ調整を施し、色調は赤褐色である。甑(133)は、器面全体にナデ調整を施し、口径6.4cm、器高4.3cmである。鉢(134)は、器面全体にナデを施し、口径9.2cm、器高3.4cmである。

墨書土器のうち(135)は、土師器皿の高台底に「珎」と読める。(136・137)は、灰釉陶器の高台で「入」・「上」と読め、(138)は「客」か。(139・141)は、それぞれ「鞍」・「南」と読める。(140)は、須恵器杯蓋の上面に「水部」と読める。水部司に関わる墨書は、第37－4次調査(昭和56年度)、第75次調査(昭和62年度)で出土しており、今回の資料で3例目である。石帯(142)は、3.3cm×2.5cm の大きさの丸鞆で、かがり穴をはっきりと確認できる。丸鞆は今回の出土で斎宮では8例目にあたる。鳥形硯(143)の出土は、斎宮跡では2例目の出土である。頭部のみの出土で、残念ながらくちばしの部分と胴部を欠いている。羽毛状線刻入り陶器片(144・145)も平城京出土の鳥形硯蓋と類似しているので、これらも鳥形硯の一部と考えられる。

(11) まとめ

今回の第一の調査目的は、第51次調査や第61次調査で検出された計画的配置のみられる大型の掘立柱建物群に続く建物の確認にあった。調査の結果、当初からの想定どおりＳＢ6420、及びＳＢ6460を検出することができた。両棟とも、これまでに検出されている建物と同じ規模、棟方向を示す。今回検出された建物の東西間の間隔は16m、ＳＢ6420とＳＢ4077との南北方向



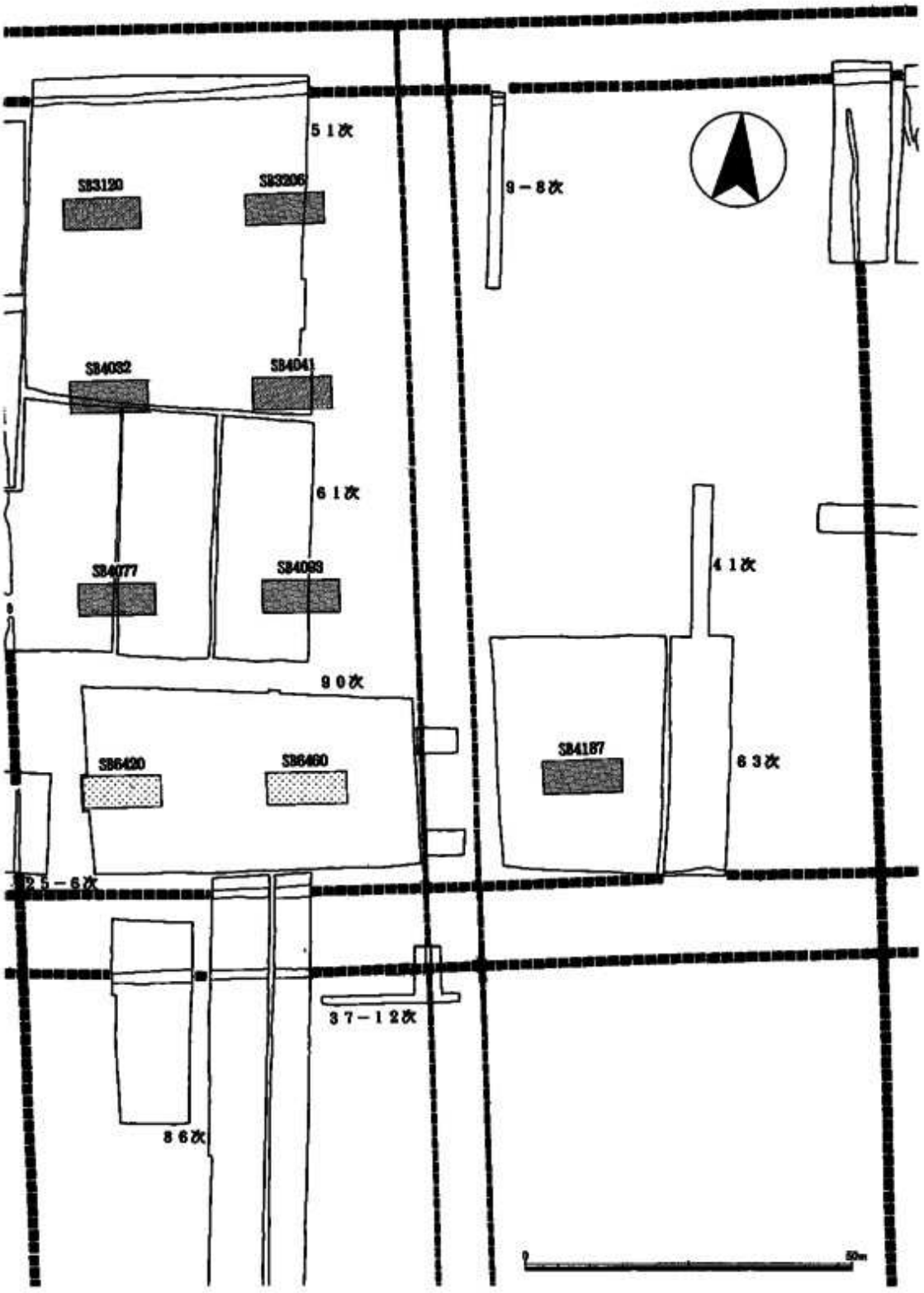
第10図　第90次調査　出土遺物実測図　その他の出土遺物　143～145（1：2）、146（2：3）

の間隔は30m、ＳＢ6460とＳＢ4093との南北方向の間隔29.8mと建物間の距離も一定であることを考えると、これまでに検出した建物の続きとみて間違いない。また、今回の調査区のすぐ東側では昭和60年度に第63次調査を実施しており、再検討した結果、現在想定している南北道路を挟んで対称的な位置に同規模の建物ＳＢ4187を検出しており、更に東側に５間×２間の大型建物群が並び立つ可能性もでてきた。今回の調査においても以前の調査と同様に５間×２間の建物の周囲には建て替えと思われる建物を数多く検出した。ＳＢ6460の周囲では、平安時代後期の建物を検出しており、少なくとも平安時代初期～平安時代後期まで建物の建て替えが続くのに比べ、ＳＢ6420の周辺では、平安時代前Ⅱ期までの建物しか検出できず、それ以後は空閑地になったと思われる。

次に第二の調査目的として、第84次調査(平成元年度)において検出された平安時代初期の溝ＳＤ5870の検出にあった。この溝は方格地割りの１ブロックの中央を南北に縦断する道路の側溝と考えられている。当初は、調査区の東側でその溝を検出できると想定していたので、東半区の調査を実施する前に調査区の東側に約6.0m×4.0mの規模で北トレンチと南トレンチを設定して調査を実施した。その結果、ここではＳＤ5870に該当するような溝は検出できなかった。しかし、東半区の調査でＳＤ5870に相当する可能性のある溝ＳＤ6471を検出することができた。この溝は、中世から近世にかけて攪乱をうけているので確証はないが、溝底近くの埋土が南北道路の側溝と同じく黒褐色土であったことや中世～近世の遺物に混じって、比較的多くの平安時代前半代の遺物が見つかっていることから考えると、今回検出したＳＤ6471は、ＳＤ5870の延長に相当する溝である可能性は高いと考えられよう。

今回の調査は、遺物においても貴重な発見があった。鳥形硯とＳＥ6410から出土した木製品である。鳥形硯は、平城京や大阪府野々上遺跡、愛知県黒笹４号窯等で出土しているが全国的にみてもたいへん貴重で、斎宮跡では２例目の出土である。出土した鳥形硯は頭部の破片のみの出土であった。

最後に木製品については、今回の出土品の中に用途不明の木製品が何点かあるが、残念ながら文字の書かれているものは、一点もなかった。しかし、今後井戸の完掘は斎宮跡の調査にとって極めて重要な意味をもつものであることが再認識されることとなった。　　(御村充生)



第11図　第90次調査　5間×2間建物群配置図（1：1,000）

Ⅲ. 第91次調査

6ＡＢＨ－Ｆ（中垣内地区）

第91次調査は、斎宮歴史博物館の南方約200mの、かつて古里遺跡と呼称された地域にあたる。調査期間は平成３年７月17日から同12月５日までである。調査区は国土座標にあわせて南北方向に52m、東西方向に12m、面積624㎡を設定した。

古里・中垣内地区周辺は、昭和45年以来数次にわたって調査が続けられており、奈良時代・鎌倉時代を中心とした遺構が検出されてきている。こうした史跡西部の傾向に対して東部に平安期の遺構分布密度が濃いこととは対照性を示している。

今回の調査区周辺では、南側で昭和46年度に第２次調査（古里遺跡Ａ地区）が、北側で昭和49年度に第７次調査（古里遺跡Ｅ地区）が実施されている。第２次調査では３棟の掘立柱建物が、第７次調査では２間×２間の総柱建物１棟を含む６棟の掘立柱建物や、第３次調査区（古里Ｂ区）につづく北西ー南東方向にカーブする鎌倉時代の溝、これに切られる奈良時代の溝の他、奈良時代の緑釉陶器と思われる変色した鉄鉢形の施釉陶器が出土した井戸が検出されている。また、県道改良に伴う第76－15次調査（昭和62年度）では、史跡の東部へつづく古道の側溝と思われる溝ＳＤ170がみつかっている他、室町時代の土師器鍋や皿の破片を多量に含んだＳＫ6370･6374･6376･6377などの土坑や、一石五輪塔がみつかっている。

今回の調査は、直線的に延びてくるＳＤ170が本調査区まで続くのかどうかを確認するとともに、第７次調査で東半分が検出されている井戸を完掘して奈良時代の良好な資料を得、あわせて、任意に設定されていた第２・第７次調査区を重複させることで、これらにも国土座標を取り付けることなどを目的とした。

明黄褐色の砂礫の混じった地山面で遺構は検出し、基本的には地表面から造成盛土、旧耕作土である黒色土、地山面となり、一部にかつての床土にあたる明褐色土がその上に堆積している。地表面との差は北で0.3m、南で1.3mで、地山面や旧耕作土上面のレベルでみると、本調査区内は0.4mほど南にゆるやかに傾斜しており、現況が旧竹神社跡地から東南東に傾斜しているのとは異なっている。

調査の結果、今回検出した遺構は、奈良時代～室町時代の掘立柱建物12棟、土坑２基、井戸３基で、当初想定された古道の側溝ＳＤ170は当調査区へはおよばなかった。遺構は調査区北部に密度が高く、南半ではまばらになる。また、遺物としては井戸から多量の土器が出土した他、羊形硯・石製品・土製品が出土している。

（１）奈良時代の遺構

掘立柱建物２棟、井戸１基がある。ＳＢ6481は調査区の北西の隅にある３間×２間の建物で

第12図　第91次調査区位置図　（1：2,000）

ある。西側では径60cmほどの円形の柱掘形が並ぶが、東側では他の柱穴との重複で不明瞭になっている。土師器の甕片が出土しているが、詳細な時期はわからない。ＳＢ6495は、調査区中央の３間×３間の建物で、柱間が1.3mと他の建物に比べ極端に狭い。柱掘形は長径50～60cmの楕円形で、土師器の杯・甕片が出土している。奈良時代中期のものとみられる。

井戸ＳＥ6480は、第７次調査で東半分が調査されている。遺構面下約4.5mで底に達する。上面の直径約6.3mで、礫層を掘りぬいた底では径約1.2mになり、若干の地下水が涌きだしたが、有機質の遺物は出土しなかった。遺物は、第７次調査で出土した緑釉陶器の鉄鉢と同一個体の破片が出土したのをはじめ、遺構面下1.0～2.0mで多量の土器が出土した。奈良時代中期のものである。

（２）平安時代の遺構

掘立柱建物２棟、井戸１基がある。ＳＢ6483は調査区の北東隅に検出した３間×２間の建物で、第７次調査で確認されているものである。径40～60cmの円形の柱掘形で、土師器片が出土しており、平安時代でも後半のものであろう。ＳＢ6485も、調査区の北東隅の３間×２間のもので、第７次調査で確認されている。今回の調査区内で検出した柱穴は径40～50cmの円又は楕円形で、第７次調査区側に当たる東側の桁行筋の柱穴が長方形あるいは長楕円形になるのとは若干異なる。土師器片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

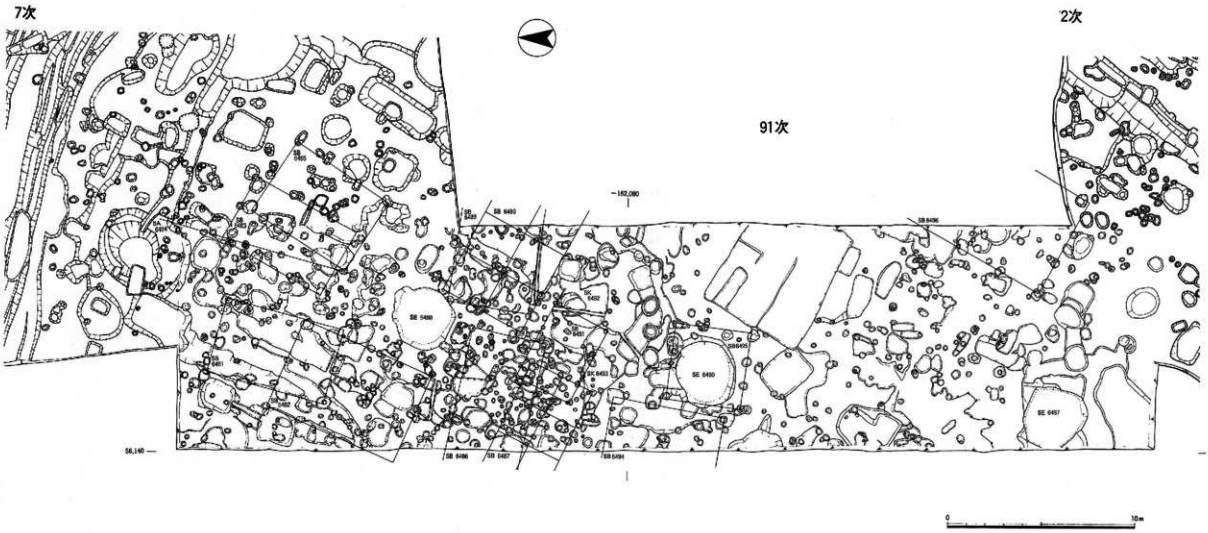
ＳＥ6490は調査区のほぼ中央部にある。直径は約3.5mほどで、遺構面から深さ約4.6mで底になる。上層で平安時代末期を中心とした土師器Ⅲ・甕や土錘が出土している。

（３）鎌倉時代の遺構

調査区中央のＳＫ6492がある。東西4.1m、南北3.0m、深さ約20cmの不定形で土師器Ⅲ・鍋、山茶椀が出土し、藤澤編年のⅢ－7段階以降、鎌倉時代後半にあたる。

	遺構の種別		
	ＳＢ	ＳＫ	ＳＥ
奈良時代	6481・6495	――	6480
平安時代	6483・6485	――	6490
鎌倉時代	――	6492	――
室町時代	6482・6486(？) 6487・6489 6491・6496	6493	6497
不明	6488・6494	――	――

第３表　第91次調査　時期別遺構分類表



第13図　第91次調査　遺構実測図（1：200）

（4）室町時代の遺構

今回の調査区で最も多くの遺構が検出され、掘立柱建物６棟、土坑１基、井戸１基がある。ＳＢ6482はＳＢ6481と重複する４間×２間の掘立柱建物で、径35cmほどの円形の柱穴が並ぶ。遺物には土師器皿・鍋片、白天目茶椀、山皿片がある。ＳＢ6486は調査区の西にのびていく東西棟で、梁行２間、桁行では３間分がみつかっている。柱穴は径30cm強である。土師器片の他、土錘・砥石が出土している。ＳＢ6487は総柱建物で、梁行２間、桁行２間分があり、これも調査区の西側にのびていくと思われる。土師器皿・鍋片や陶器片が出土している。ＳＢ6489は調査区の東側へのびていく総柱建物である。梁行２間、桁行２間分があり、ＳＢ6487とは棟方向を同じくしている。土師器皿・鍋片や陶器片が出土している。ＳＢ6491は柱間が約1.5m、柱穴の直径が20～30cmと非常に小規模な東西棟で、南側桁行筋の柱穴には根石を置いている。ＳＢ6496は調査区の東南隅に位置し、一部が第２次調査区にのびており、梁行３間に桁行３間分がある。柱穴は直径40cm前後で、土師器皿・鍋片や、瀬戸の灰釉四耳壺の破片などの陶器類も出土している。ＳＫ6493は調査区中央にあり、ＳＢ6487･6491とＳＫ6492を切っており、土師器皿・鍋片や陶器片が出土している。ＳＥ6497は調査区南の直径3.5mほどの井戸で、今回完掘はしなかった。井戸の上層から瀬戸産の施釉陶器や山茶椀、常滑産陶器、土師器皿・鍋片が多量に出土している。室町時代でも後半に属する。

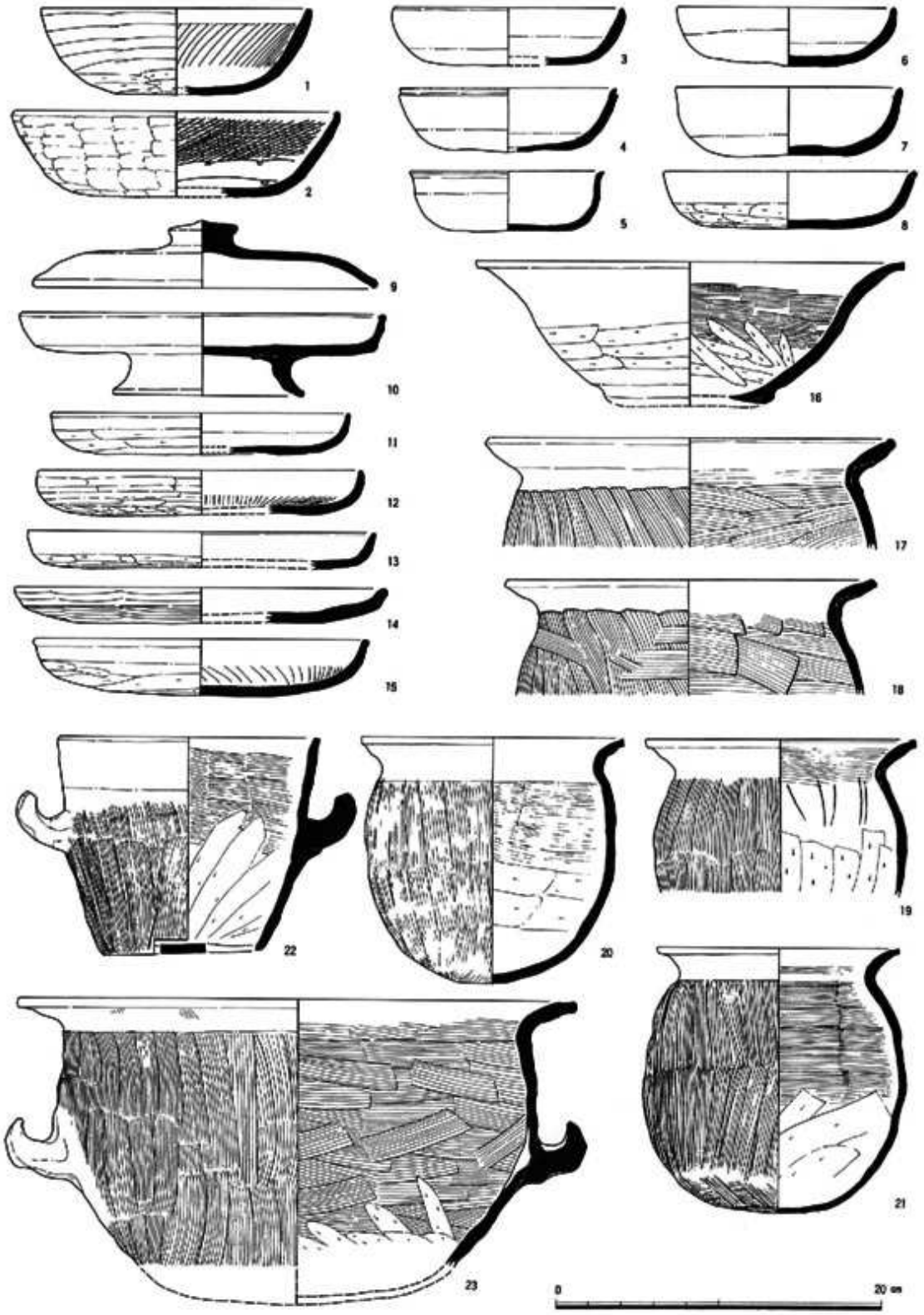
以上の他に出土遺物が微細なため時期決定ができない遺構がある。ＳＢ6494は調査区のほぼ中央の３間×？間の掘立柱建物で、柱掘形は一辺70～80cmの方形で、埋土も漆黒色で他のものとは異なる。奈良～平安時代に属するものであろう。ＳＢ6488はＳＢ6489と重複するが前後関係は不明である。棟方向がＳＢ6486に近いため、室町時代に属する可能性がある。

（5）遺物

第91次調査での出土遺物は整理箱にして約85箱ほどである。

遺物のまとまりとしては、第７次調査分をふくめて最も出土量の多いＳＥ6480の概況についてのべる。出土遺物の種類には、土師器には杯・蓋・皿・鉢・甕・甑・鍋・竈片が、須恵器には杯・鉢・長頸壺・鉄鉢があり、緑釉陶器とみられる施釉陶器の鉄鉢もある。遺物は、東半分がすでに掘削されているため遺構面から深さを決めて取り上げ、斎宮跡標識遺構のＳＫ1970期のものが大勢をしめるようだが、時期的に若干さかのぼりそうな資料も多く、明確に時期を分離できなかった。

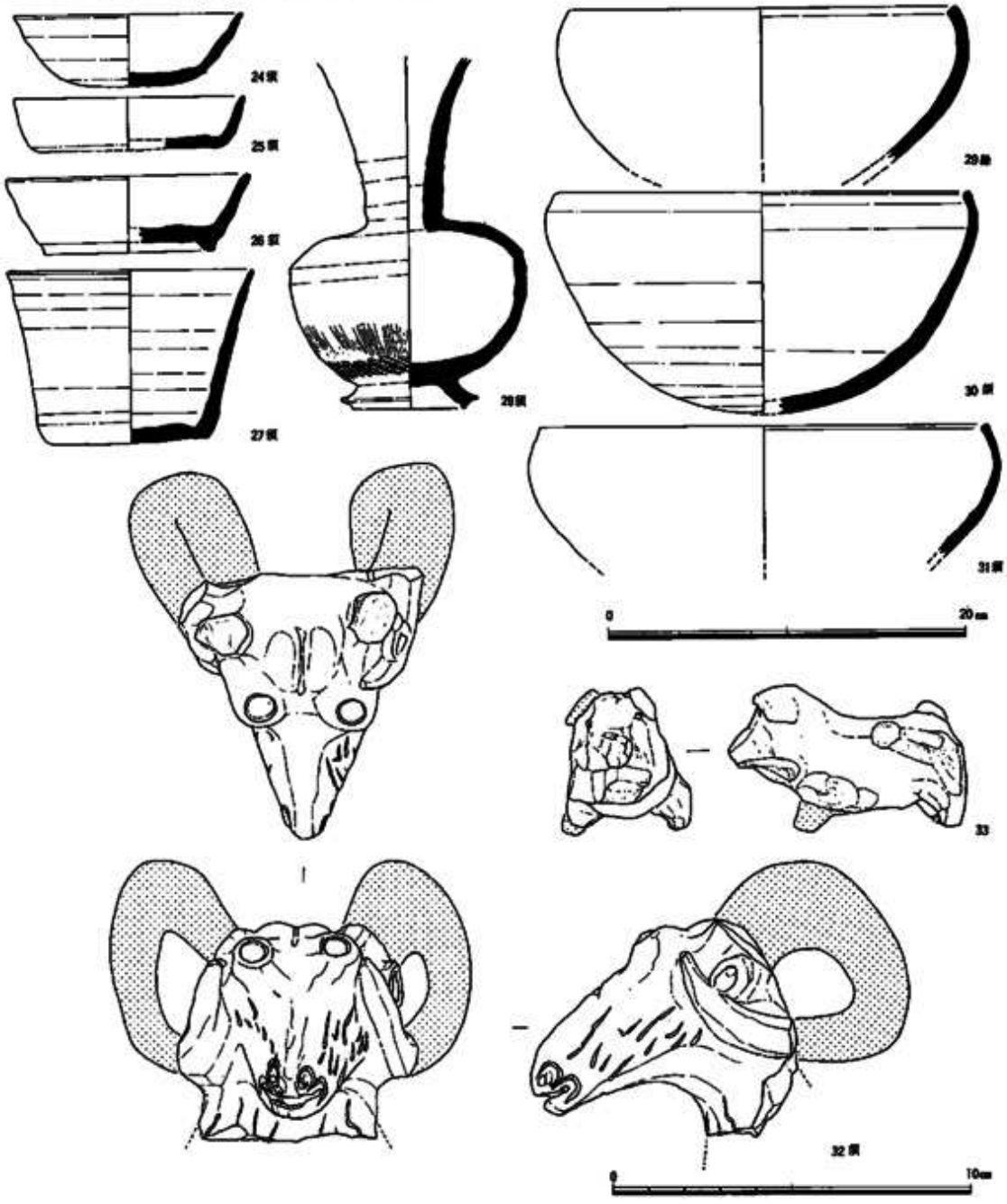
第７次調査の際の主要な遺物もあわせて掲載したが、特に鉄鉢形の土器が多いことが注目できる。(29)は緑釉とみられる施釉陶器である。器表面の釉薬は二次的に火をうけたのか黒褐色に変色しており、剥落も著しい。器壁外面下部の調整はていねいにヘラケズリ調整されている。(30･31)は須恵器である。(30)は底部外面は同心円状にていねいにケズリ調整される。(31)は他よ



第14図　第91次調査　出土遺物実測図　ＳＥ6480：１～23（１：４）

り口縁端部の内湾がつよく器壁が薄い。

(32)は須恵器製の羊形硯である。頭部のみの出土で、両角も欠損している。本例の他には平城京左京四条四坊九坪と同右京八条一坊からの2例がある。眼を半球状の盛りあがりで表現したり、頭部のこぶや大きく後ろから巻き込む角の表現など、これらは共通した意匠をもつものの、口元の形状や鼻の湾曲の具合、ひげの表現など細部での差異もみとめられる。本例は口や鼻をヘラや棒状工具の沈線で描き、また胸元には細い蛇行沈線で羊毛の表現をもつ。色調は左



第15図　第91次調査　出土遺物実測図　ＳＥ6480：24～31(１：４)、包含層：32・33(１：２)

京四条四坊九坪出土品が灰白色気味なのに対し暗灰色で、顔右半分に火がかりの模様がつくなど、出土例の乏しい資料ながら同時に製作されたものではないらしい。

(33)は、室町時代の犬形土製品である。室町時代の土坑ＳＫ6493の上面で出土しており、県下８例目である。前脚・尾と顔の一部が欠失している。

（６）まとめ

今回の調査で検出が期待された古道の側溝ＳＤ170は本調査区へ続かなかったことで、やはり古道は奈良時代には第３次調査区からさらに第68次調査区へ続く溝ＳＤ4500に続き、鎌倉時代では第７次調査区のカーブする溝を側溝とし、どちらも本調査区から竹神社跡地を迂回するかたちで祓川沖積地への切り通しに続くことがほぼ確定したといえるだろう。現在竹神社跡地は周囲からやや高まった山林になっており、具体的な発掘調査はおよんでいない。しかし、古里地区の北部を北東にむかってのびる奈良時代のＳＤ4500は、その両側で建物の規模・向きや配置の様相が異なり、土地利用の面での規制となっていたとの指摘もあり、また幅約3.5ｍに対し深さ0.1～0.2ｍと極めて浅く、底も平坦で、道路跡の可能性もある。古里地区において、こうした規制となりうる道路を迂回させているという点からみると、今後竹神社跡地周辺は奈良時代前後の斎宮の研究にとって重要な鍵となる可能性が考えられる。

今回出土した羊形硯は、形象硯の中でも極めて特殊なものである。今後の資料の増加もあるだろうが、現在全国で３例の発見にとどまり、やはりこの地区で従来出土している蹄脚硯や今回出土の鉄鉢形の緑釉陶器などともあわせて、出土遺物のうえでは特別な官衙的色彩を感じさせる。しかし、今回の調査区では、範囲が狭小で即断はできないが、第２次調査区もふくめて官衙的な遺構は皆無で、同じ古里地区にあって第４次調査区(昭和47年度)などとは対照的といえる。この点でもＳＤ170の北と南での差異が考えられる。

また、調査区北半に集中した室町時代の建物群は、いずれも規模が小さく、この時期一般的な総柱建物になるのは２棟のみであった。当該期の建物の周囲には重複関係が煩雑で今回遺構としては確認できなかったが、本調査区北側から第７次調査区のＳＤ170を切る鎌倉時代の溝の南を巡る長方形の溝状の落ち込みが見られる。これを区画溝とするならば、第２次調査区の直角に折れる溝群とともに、一帯に屋敷地的な区画が複数存在したことが想定できる。実際、東西棟とはいえ、総柱建物のＳＢ6487やＳＢ6489、ＳＢ6491はおおむねこの溝状のおちこみと方向を揃えており、他の建物も概してこの位置を踏襲している。中世の屋敷地区画は斎宮跡においては第87次調査で発見された他、県下各地でも見つかっている。しかし、今回の例は調査区北半の区画で東西約18ｍであり、第２次調査区でみられるものもほぼ同規模で、他の例と比べて非常に小規模である。建物の貧弱さとあわせて所謂「屋敷」地とは別のイメージでこうした区画がとらえられる必要があるかもしれない。　　（大川勝宏）

Ⅳ.　第92次調査

6ＡＧＮ－Ａ（鍛冶山地区）

本年度３回目の計画調査を８月５日から明和町斎宮字鍛冶山2734－2番地で実施した。現況は、畑地で調査区は南北18m、東西12m、の約220㎡である。当調査区の東側では、昭和53年度に第21－1次調査、昭和57年度に第46次調査、平成２年度に第88次調査が実施されており、東西方向の区画溝、建物を取り囲む柵列(掘立柱塀)、大型の柱掘形をもつ倉庫群等を検出している。今回の調査では、第46次調査で検出した柵列の西への延長部分を確認することと、第88次調査で奈良時代の古道の側溝が鍛冶山地区まで延びることが判明したことから、その溝の再確認を主たる目的とした。遺構検出面(地山)の絶対高は北端で9.1m、南端で9.25mと南から北に向かってゆるやかに傾斜している。

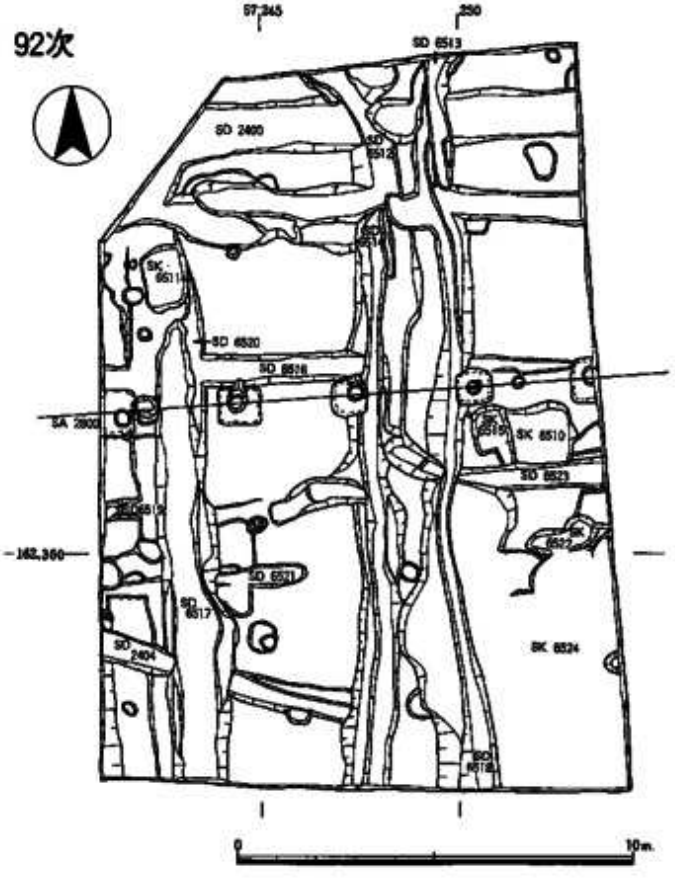
（１）奈良時代前期の遺構

溝ＳＤ2404は調査区の南部に位置する。この溝は史跡西部にあたる古里南部地区や塚山地区で検出されているＳＤ170の延長上の溝と想定しているものである。この溝は第41次調査(昭和56年度)で初めて検出され、第88次調査(平成２年度)においても検出している。埋土は黒褐色土で、幅約0.8m、深さ0.2mである。東側で平安時代前Ｉ期の土坑に削平されている。遺物はまったく出土しなかった。

（２）平安時代初期の遺構

この時期の遺構には、柵列１条、溝２条がある。

柵列ＳＡ2800は、調査区の北部で検出した。このＳＡ2800は、第46次調査(昭和57年度)で東西５間以上、南北５間以上、第88次調査(平成２年度)には、更に南北方向へ７間分延長することが確認されており、今回の調査では、更に西への延長部



第16図　第92次調査　遺構実測図（１：200）

分で延べ9間分を検出した。柱掘形は、一片約1.0mの方形を呈し、深さは約0.5mである。埋土は黒褐色土で、径0.2mほどの柱痕跡を検出し、一部抜き取り痕跡がみられるものもあった。

溝ＳＤ2400は調査区の北部で東西方向に検出した。幅約1.4m、深さ0.3mである。この溝は昭和56年度のトレンチ調査で確認された溝で、東西方向に延びる道路の南側溝にあたる。底部は幅約1.0mの整然とした掘形である。ＳＤ6513は、調査区北部中央から南北方向に延びる溝で、途中で平安時代前Ｉ期の溝ＳＤ6518に削平される。幅約0.5m、深さ0.3mである。

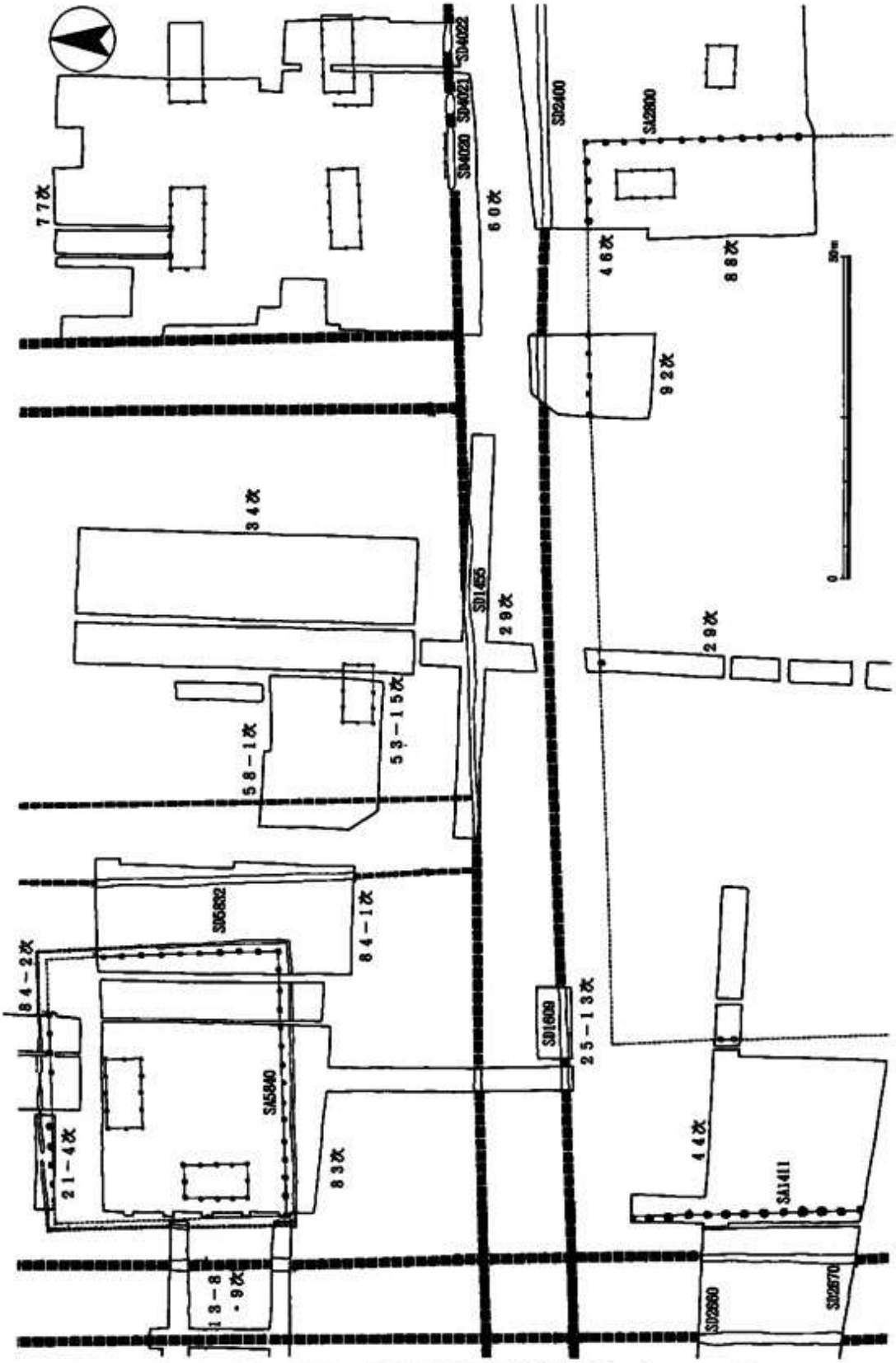
（３）平安時代前Ｉ期の遺構

この時期の遺構には、土坑３基、溝３条がある。

土坑ＳＫ6510・6515・6524は、調査区の北東部に位置する。遺構検出の段階では、一体の土坑と判断していたが、埋土の切り合い関係により分離した。ＳＫ6510は一辺約1.6m、深さ0.2mで土師器杯・皿・甕・杯蓋・竈、須恵器杯蓋・甕・鉢・高杯等が出土した。西と南で同時期の遺構ＳＫ6515とＳＤ6523に削平される。ＳＫ6515は、ＳＫ6510と切り合う土坑で長径1.4m、短径0.8mである。遺物は土師器杯・皿・甕等が出土した。ＳＫ6524は、長径6m、短径5m、深さ約0.6mで底は整然とした平面である。底近くで多量の炭が出土している。出土した遺物の中には、平安時代前Ｉ期よりも古い形態のものも若干含まれているので、この土坑の前段階に形

		遺構の種別		
		ＳＡ	ＳＫ	ＳＤ
奈良時代後期		――	――	2404
平安時代	初期	2800	――	2400・6513
	前Ｉ期	――	6510・6515・6524	6517・6518・6523
	前期	――	6511	6516
	後期	――	――	6512
鎌倉時代		――	――	6519
不明		――	6514・6520・6521 6522	――

第４表　第92次調査　時期別遺構分類



第17図　第92次調査　銀冶山地区周辺遺構模式図　（1：1,000）

成された遺構に伴う遺物と考えられる。出土遺物には土師器杯・皿・甕・高杯・鍋、須恵器高杯・杯蓋・甕等がある。

ＳＤ6517は調査区の西部を南北方向に延びる溝で、区画溝ＳＤ6520と重複する。ＳＤ6520の掘り返しと考えられる。遺物は土師器杯・皿・甕・高杯、須恵器甕等が出土した。ＳＤ6518は調査区のほぼ中央を南北に延びる溝で、北側で深さ約0.4m、南側で約0.7m、溝底は北から南に向かって傾斜している。ＳＤ6523は調査区東部中央に位置し、埋土の切り合い関係から同時期の溝ＳＤ6518より古いことが判明している。

そのほか、平安時代前期としか判断できなかったものに土坑ＳＫ6511、溝ＳＤ6516がある。どちらも遺物は、土師器小片を出土したのみである。

（４）平安時代後期の遺構

この時期の遺構は溝ＳＤ6512のみである。この溝は調査区のほぼ中央を南北に延びる溝で、平安時代初期の溝ＳＤ6514、平安時代前Ｉ期の溝ＳＤ6518、時期不明の溝ＳＤ6514の上面で検出した。埋土は暗茶褐色土で、土師器小片・小皿が出土したのみである。

（５）鎌倉時代の遺構

この時期の遺構は溝ＳＤ6519のみである。土師器小片、山茶椀等が出土した。

（６）時期不明の遺構

溝ＳＤ6514・6520・6521・6522がある。そのなかでもＳＤ6520は、南北方向に延びる区画溝の西側溝と考えられる。この溝は埋土の切り合い関係により平安時代初期の柵列ＳＡ2800より新しいと考えられる。出土した遺物は土師器細片のみで、時期決定の材料となる遺物は出土していない。

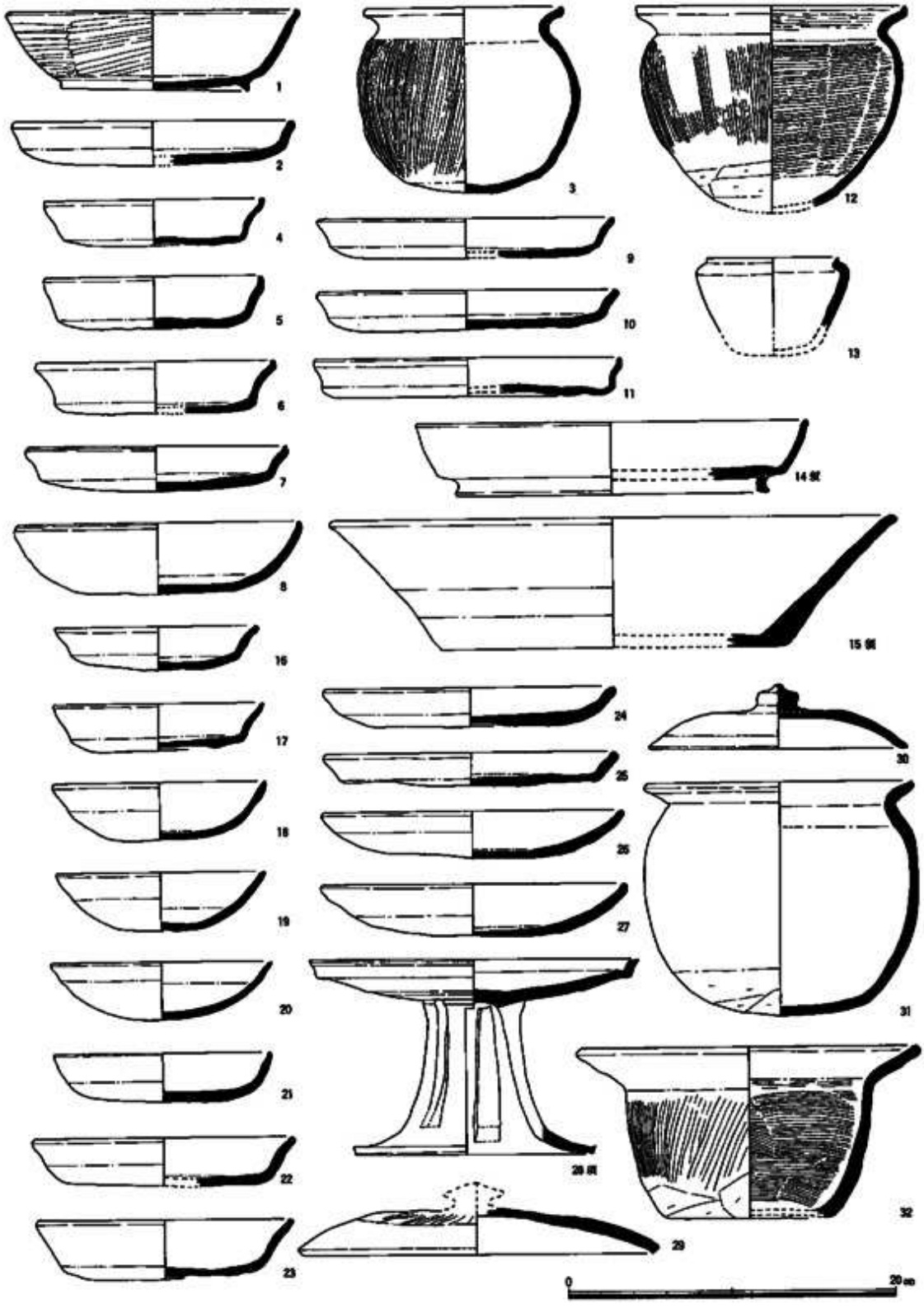
（７）遺物

平安時代初期の溝ＳＤ2400、平安時代前Ｉ期の土坑ＳＫ6510・6524から良好な資料が出土したので、それについて概述する。

土師器高台付椀（１）・杯（２）・甕（３）はＳＤ2400からの出土である。（１）は、口径18.1cm、器高5.0cm、体部外面全体を緻密なミガキ、内面をナデ調整を施す。杯（２）は全体にナデを施し、口径17.4cm、器高2.7cmを測る。（３）は体部外面に縦ハケメを施す。

ＳＫ6510からは土師器杯（４～７）・椀（８）・皿（９～11）・甕(12)・ミニチュア土器壺(13)、須恵器杯(14)・鉢(15)等がある。杯（１～７）、皿（９～11)はすべてＡタイプ、ｅ手法によるものである。(12)は口径16.2cm、器高約12.8cm、体部内外面ともにハケメ調整を施し、底部外面はヘラケズリを施す。(13)は、口径4.0cmの土師器ミニチュア土器壺である。(14)は口径23.9cm、器高4.5cmと大型である。(15)は口径34.8cm、器高8.1cmで体部は内外面共にナデ調整をする。

ＳＫ6524からは土師器の杯・椀(16～23)・皿(24～27)・杯蓋(29・30)・甕(31)・鍋(32)、須



第18図　第92次調査　出土遺物実測図　ＳＤ2400：１～３、ＳＫ6510：４～15
ＳＫ6524：16～32（１：４）

恵器高杯(28)が出土している。(16・17・22・23)はAタイプ、(18～20)はBタイプで、すべてe手法によるものである。杯蓋は口径21.5cmの大きいもの(29)と口径15.6cmと小さいもの(30)がある。ともに磨耗がひどく調整については不明瞭である。(31)は口径16.0cm、器高14.4cmで、調整は、体部外面のハケメ調整の痕跡と外面底部のヘラケズリのみを確認できた。(32)は、口縁部を強く外反させるもので、口径20.4cm、器高10.6cmである。(28)は、脚部に三方すかしがあり、口径20.4cm、器高12.0cmである。

(8)まとめ

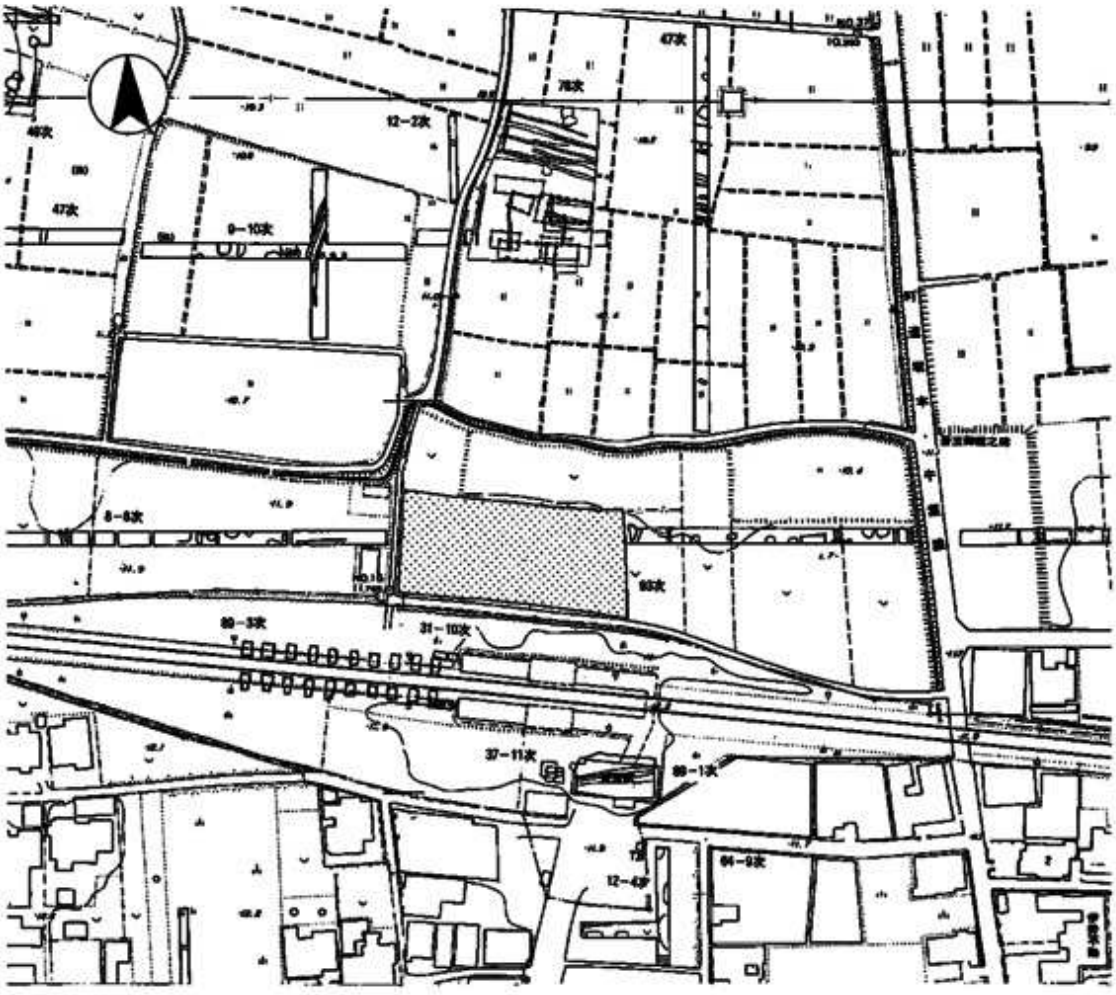
今回の調査の第一の目的は柵列SD2800の西方向の延長部分を確認することであった。この柵列は第46次調査では、東西5間以上、南北5間以上であることが判明しており、昨年度実施した第88次調査では更に南へ7間分検出され、南へ12間(35.5m)以上であることが確認された。この柵列SA2800は、第88次調査(平成元年度)で検出したSA5840よりも規模の大きい区画である可能性が考えられていた。今回の調査の結果では、さらに9間分が検出され、西へ14間(約41.4m)以上延びることを確認してその可能性が強まった。そこで柵列の延長部分についての再検討の結果、南側については土取りや未調査地が多いこともあって不明である。西側については、第29次調査でその延長部分で柵列に相当する柱穴を確認することができた。もしここまで柵列が延びるとすると西側へ27間(80m)以上延びることになり、相当大きな区画になる。第17図のとおり第44次調査区まで続くことが考えられる。さらに、従来から言われている区画は少なくともこの柵列が存在していた時期には、一辺約120mの区画がこの鍛冶山地区では変則的な形状であったと考えられ、従来からいわれている区画の様相を、この鍛冶山地区では考え直す必要がある。また、今回の調査区は、区画溝の交差点付近にあたり、調査前から注目していたが、東西方向の溝SD2400は南北方向の溝を横断する形で検出され、初めて区画溝の交差点での様子の一部が明らかとなった。今後、柵列の西側への延長の追求とともに、柵列に囲まれた地域の歴史的意味の究明と、周辺の発掘調査の進展が待たれる。

(御村充生)

V. 第93次調査

6ADN（内山地区）

本年度3回目の計画調査は、近鉄斎宮駅のすぐ北側に面した斎宮字内山3045番地他で実施した。現況は北側の水田に向かって緩やかに傾斜する畑地で、調査区は南北26m、東西56mで面積は約1,500㎡である。周辺では昭和49年度に史跡指定に先立つ範囲確認のためのトレンチ調査(第8－8次調査)が実施されており、当調査区内では棟方向をそろえた桁行き5間の掘立柱建物2棟が検出されていた。また、北側の水田では宇宮ノ前の第78次調査(昭和63年度)で奈良時代の古道側溝ＳＤ170の延長にあたるとみられるＳＤ5266の他、平安時代前期の比較的大型の建物が検出されている。他にも第47次のトレンチ調査(昭和57年度)でこの水田部分を調査し、奈良時代の溝などを検出している。南側では斎宮駅の改修に伴う第31－10次(昭和55年度)、第



第19図　第93次調査　調査区位置図　（1：2,000）

37－11次調査(昭和56年度)や本年度の第89－1次、第89－3次調査が行われている。しかしながら周辺では面的広がりを持った調査例に乏しく、史跡の中央部付近にあって、従来から実態があまり判明していなかった地域でもある。

現在、史跡全体の環境整備計画の中で、公共交通機関からの玄関口として、この斎宮駅北地区の整備が望まれてきている。今回の調査は、第8－8次調査(Mトレンチ)で検出されている2棟の掘立柱建物を中心とした地域を調査し、今後の史跡整備のための基礎的な資料の収集を目的としている。

調査の結果、奈良時代から鎌倉時代にかけての竪穴住居1棟、掘立柱建物10棟、土壙8基、井戸3基、中世墓3基、溝3条等を検出した。

		遺構の種別				
		SB	SK	SE	SX	SD
奈良時代後期		6553	――	――	――	――
平安時代	初期	6542（?） 6543	6549	――	――	――
	前I期	――	6546・6547 6548・6550 6551・6552	――	――	――
	中期	6531（?） 6554	――	――	――	――
	後I期	6544	――	6530	――	――
	後II期	――	――	――	――	6555
	末期	――	6545	――	――	――
鎌倉時代	前半	――	――	――	――	6556
	後半	――	――	6535・6536 6538	6533・6534 6537	――
不明		6532・6539 6540・6541 6557	――	――	――	――

第5表　第93次調査　時期別遺構分類表

93次

第20図　第93次調査　遺構実測図　（1：200）

（1）奈良時代後期の遺構

竪穴住居ＳＢ6553が調査区東端で検出されている。東西両壁が後世の撹乱溝で削られているが、一辺約3.2mの方形であるとみられる。東南隅付近で若干の焼土が見られたがカマドは不明である。全面に貼り床が施されており、柱穴とみられる数個のピットがともなう。遺物には、土師器皿・甕片や須恵器片等が出土している。

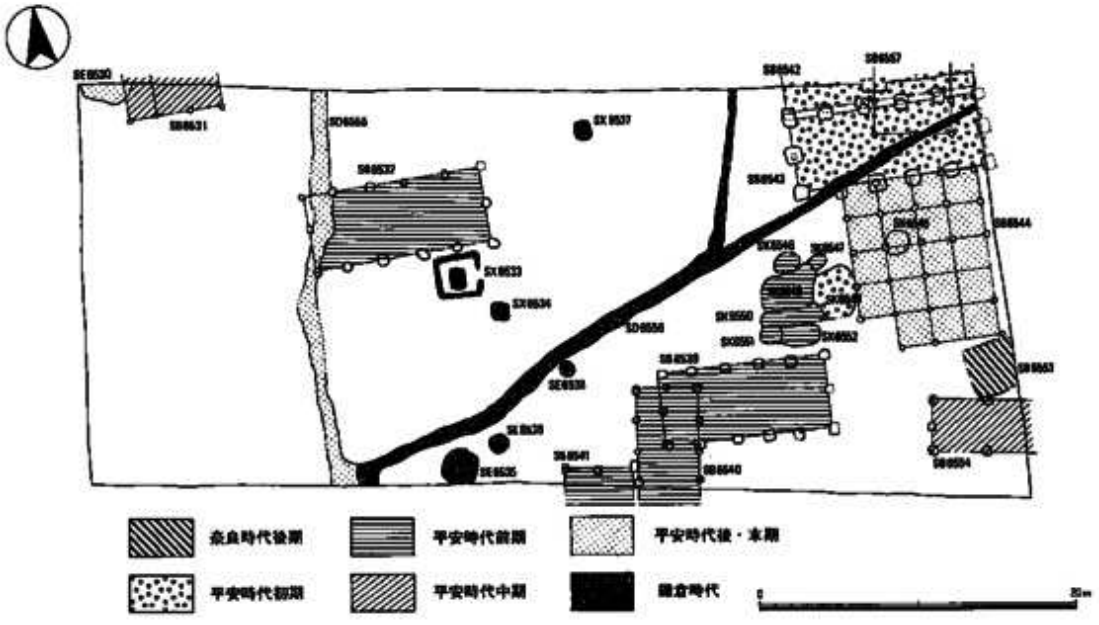
（2）平安時代初期の遺構

掘立柱建物２棟、土坑１基が検出されている。

ＳＢ6543は、第８次調査で検出されていた掘立柱建物のうちの一つで、５間×２間の規模になることが確定した。柱掘形は方形で、一辺1.1mに達するものもあり、斎宮跡にあっても比較的大型のものである。ただし南側の桁行きの柱掘形に比べ北側のそれはやや小規模である。ＳＢ6542はＳＢ6543のすぐ北側にあり、桁行５間の建物であると推定される。遺物からは明確に時期が決定できないが、ＳＢ6543が重複していることから、平安時代初期以前のものであることがわかる。土坑ＳＫ6549は、調査区東半に集中する土坑群の一つで、3.2m×2.7m、深さ約60cmほどになる。遺物には土師器の杯・皿・鉢・高杯・甕や製塩土器、須恵器の杯・椀・甕・杯蓋片が出土している。

（3）平安時代前期の遺構

平安時代前Ｉ期に属すると考えられるものには、初期のＳＫ6589に近接する６基の土坑がある。重複が著しく、これら遺構番号を付けたものの他に上面でも土坑状の落ち込みがみられ、



第21図　第93次調査　時期別遺構配置図　（１：500）

一時期集中的に頻繁な掘削が行われたことが窺える。ＳＫ6548は不定型で3.4m×3.0mの土坑で、把手付甕(48)が底部付近で倒立して出土した。遺物の出土量はＳＫ6549とならんで多く、他に土師器杯・皿・椀・蓋・甕片や製塩土器、灰釉陶器の段皿が出土している。ＳＫ6550･6552はＳＫ6548･6549に重複する、長径で４m程の長楕円形の土坑で、底は平坦になり、土師器杯・皿・甕・甑や須恵器類の他、黒色土器の椀片が出土している。ＳＫ6546･6547･6551はさらにその周囲の径１.0m強の土坑で、土師器類、黒色土器、須恵器類が出土している。これら平安時代前Ｉ期の土坑の前後関係では、ＳＫ6548が最も古く→ＳＫ6550→ＳＫ6552の順であることが確認でき、その周囲にＳＫ6546･6547･6551が掘削された状況が認められる。

ＳＢ6532は第８次調査のトレンチで確認されていた東西棟で、５間×２間の規模であることがわかった。平安時代初期に属するとみられるＳＢ6543とは、桁行筋を揃えており、Ｅ４°Ｎと共通するが柱掘形はやや小振りになる。遺物からみて平安時代の前半に属するものと考えられる。ＳＢ6540･6541は調査区中央部南隅にある。南北棟で、梁行は２間になる。ＳＢ6540は桁行３間分が検出されている。柱掘形は50cm～60cmの方形で、この２棟はいずれもＮ２°Ｅと棟方向を同じくしており、いずれも微細な出土遺物から平安時代前半のものと見られるが、相互の前後関係は不明である。ＳＢ6539はその東の５間×２間の東西棟で、一辺70cm以上の方形の柱掘形を持つ。柱穴の重複関係からＳＢ6540より古いが、平安時代前半に含まれるものと思われる。棟方向はＥ４°Ｎで、ＳＢ6532･6543と一致する。

（４）平安時代中期の遺構

ＳＢ6554は調査区東南隅にある。検出された柱穴は今回の調査区では深く、遺構面からでも深さ50cmを越える。柱間寸法は西側の梁行でみると1.7mで、桁行は南北方向の攪乱溝により柱穴が欠失していると考えると、３間以上の規模で調査区東へ延びていくことになる。

ＳＢ6531は調査区の北西隅にあり、南側の２間分だけが検出されている。柱間寸法は2.1mで、西側に幅1.8mで庇がつくものと考えられる。ほぼ同時期のＳＢ6554とは棟方向を大きく違える。

（５）平安時代後期の遺構

ＳＥ6530は調査区北西隅に位置する。直径約3.3mで南半だけを検出し、地表下約1.7mまで掘削した。平安時代後Ｉ期に属する。ＳＢ6544は調査区東にある。柱穴は直径30cm～40cmの円形で、５間×３間の身舎の西側が張り出す建物である。この柱穴の一つには土師器椀の完形品が入っていた。平安時代後Ｉ期のものである。

ＳＤ6555は調査区の西半を南から北に流れる溝である。土師器やロクロ土師器類、山茶椀の他、混入品だが打製石斧(124)が出土している。平安時代後Ⅱ期のものとみられる。

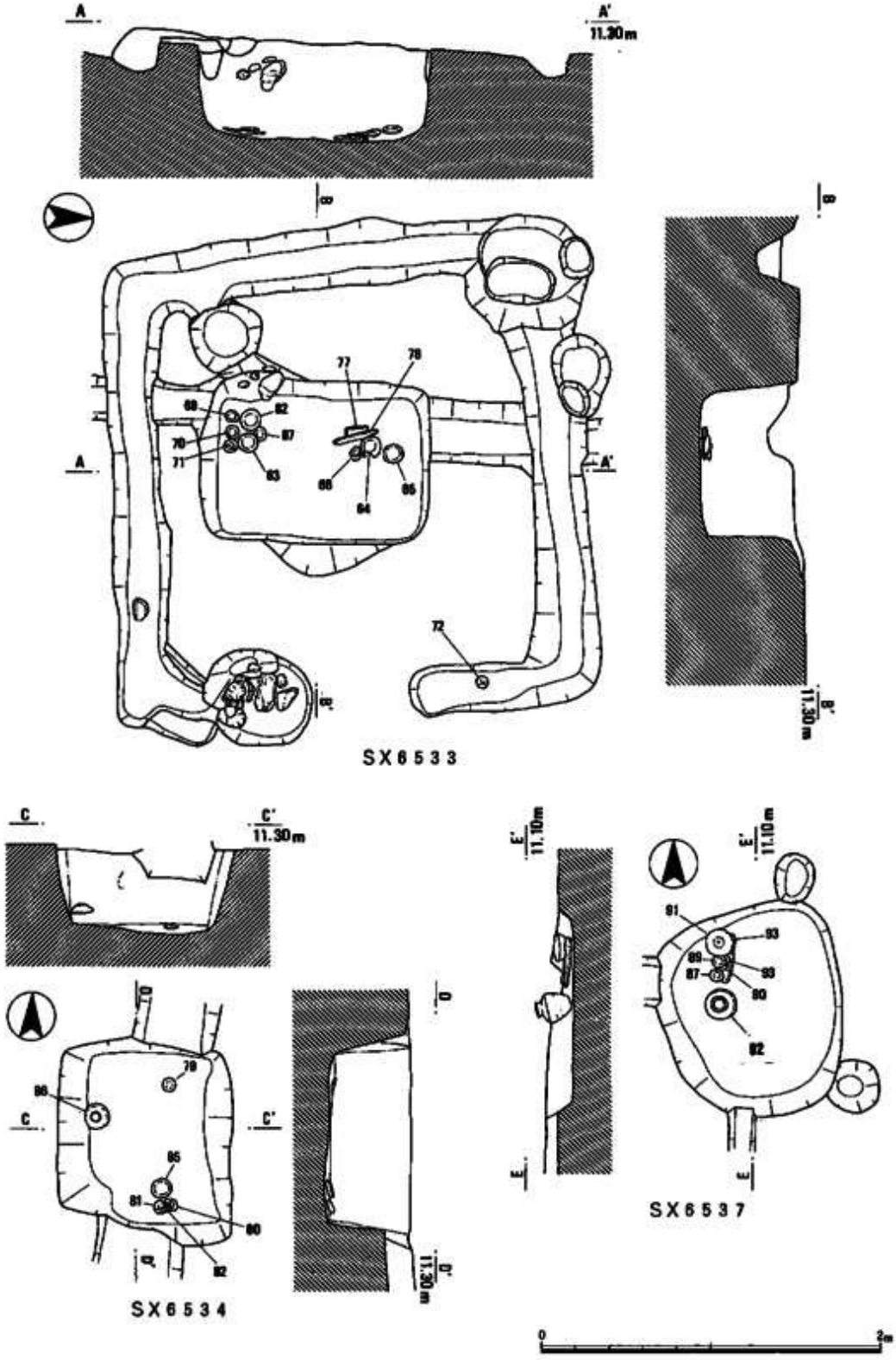
（６）平安時代末期の遺構

土坑ＳＫ6545がある。直径約1.5mの隅丸方形で、深さ約20cmを残し、すり鉢状の底部になる。粗製の土師器大盤(102)や杯、皿片、ロクロ土師器が出土している。混入はあるが、平安時代末期のものとみられる。

（７）鎌倉時代の遺構

ＳＤ6555につながるＳＤ6556は南西から北東に流れる溝で、一時期両者は共存していたとみられる。途中で北へＳＤ6557が分流する。土師器類の他、藤澤編年のⅡ－４型式に相当する山茶椀が出土している。鎌倉時代前半に位置づけられよう。ＳＥ6535は調査区の南端にある。直径2.3mのもので、深さ約２ｍまで掘削した。土師器皿・鍋類、山皿や瀬戸産の三筋壺が出土している。ＳＥ6536･6538はそれぞれ直径１ｍ強の井戸で、約1.8m下まで掘削した。土師器皿・台付皿・鍋片や藤澤編年でⅢ－６～７型式の山茶椀が出土していることから、これらの井戸は鎌倉時代後半に属するとみられる。

中世墓ＳＸ6533は1.3m×1.0m、遺構検出面から60cmほどの深さに方形の墓壙を穿ち、その周囲に東側の一画だけを残して幅約20cmの溝でほぼ2.9m四方の区画を作る。この溝の内側に塚が作られていたものとみられる。墓壙内には２ケ所にわけて副葬品が埋納されていた。北側の一群には使用の著しい石製硯(77)や鉄製短刀(78)、土師器皿３枚が、南側の一群には土師器皿６枚がかためて置かれていた。土師器皿には大小の２形式がある。また、墓壙内の埋土中にも土師器皿や山茶椀が包含されていた。ＳＸ6534はＳＸ6533の東南に位置し、1.2m×1.0mの方形の墓壙を穿つ。周囲には区画の溝は見られず、ＳＸ6533との位置関係から削平されたのではなく、当初から区画を持たなかったものと考えられる。遺構面からの深さは約56cmほどで、墓壙の規模・形状はＳＸ6533とよく似ている。しかし供伴する遺物は少なく、藤澤編年のⅢ－７型式の山茶椀(86)と土師器皿７枚が出土したのみである。ここでも皿には大小のものがみられる。ＳＸ6537は調査区北側の他の中世墓とは離れた位置にある。約1.3m×約1.1mの楕円形で、深さは約16cmである。遺物は最も内容が豊富で、常滑産の壺(92)、青磁椀(91)、鉄製短刀(93)に土師器の小皿４枚が出土した。ＳＸ6537も周囲に区画の溝を持たないものの、墓壙の検出レベルが他の２つの中世墓と大差ないにもかかわらず、遺構面からは浅かったことを考えると、すでに削平されている可能性もある。これら中世墓の時期については、ＳＸ6533出土の山茶椀が13世紀中葉、鎌倉時代の中頃に比定できる。また、ＳＸ6534がＳＸ6533に対して従属するような位置・内容を持つことや、土師器の皿があまり時期差を示さないことから、この両者は近接した時間幅の中でＳＸ6533→ＳＸ6534の順に作られたものであろう。ＳＸ6537は出土した青磁椀が龍泉窯産の12世紀～13世紀に位置づけられるものである。また、常滑産の壺も13世紀中葉以降のものであることから、ＳＸ6533やＳＸ6534よりはやや後出のものであると考えられ、鎌倉時代でも後半のものと位置づけできよう。



第22図　第93次調査　中世墓実測図　（1：40）

(8) その他の遺構

時期の判断できなかった遺構にＳＢ6557がある。調査区北東隅で検出された梁行２間の建物で、調査区北側にのびていく。柱穴は直径約40cmと小さく、棟方向もＮ４°Ｅである。遺物は細片で時期を明確にできないが、柱穴のひとつに鎌倉時代前半の溝ＳＤ6556が重複していることから、それ以前のものと考えられる。

この他に遺構番号は付していないが、調査区内で鍵の手状に分布する小ピット群の存在が注目される。ＳＤ6555にそって南北に並ぶピット群は調査区北４分の１ほどで東に折れ、そのまま65mほど続く。また、コーナーから南へ16mほどのところで西にむかって折れていく一群も観察される。これらは直径20cm～50cm程度のものが大半を占め、柵などのように深さ・規模が一定で直線的に続くものではない。また、ピット底部の形状も一定せず、木根痕と明確に判断できるものも多く含まれている。埋土は黒色土や黒褐色土で安定しており、近年の撹乱によるものではない。これらに伴う遺物は微細な土師器片・中世の無釉陶器片のみで、明確に決定できないものの、時期的には中世～近世初頭を下らないものと考えて大過ないだろう。具体的な上部構造としてはピットの集中状況や大きさからみて、「垣根」状の区画を目的とした遺構とみておきたい。

(9) 遺物

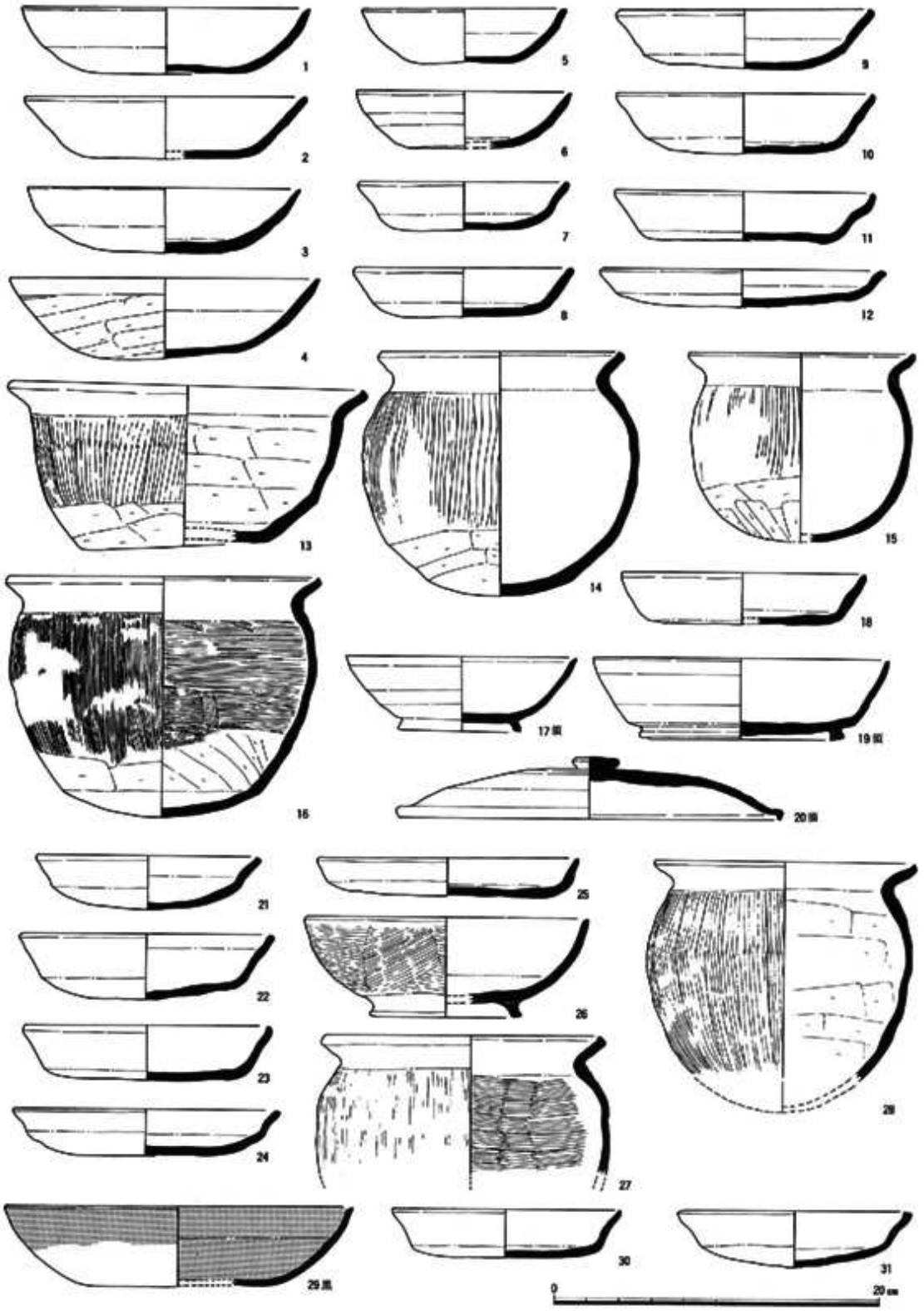
今回の調査では整理箱にして約100箱の遺物が出土している。時期別にみると弥生時代から室町時代のものまでみられるが、平安時代前半と鎌倉時代のものが大半を占める。

平安時代前半の遺物はほとんどが調査区東半に集中する土坑群のもので、初期(ＳＫ6549)と前Ｉ期(ＳＫ6546･6547･6550～6552)とがある。

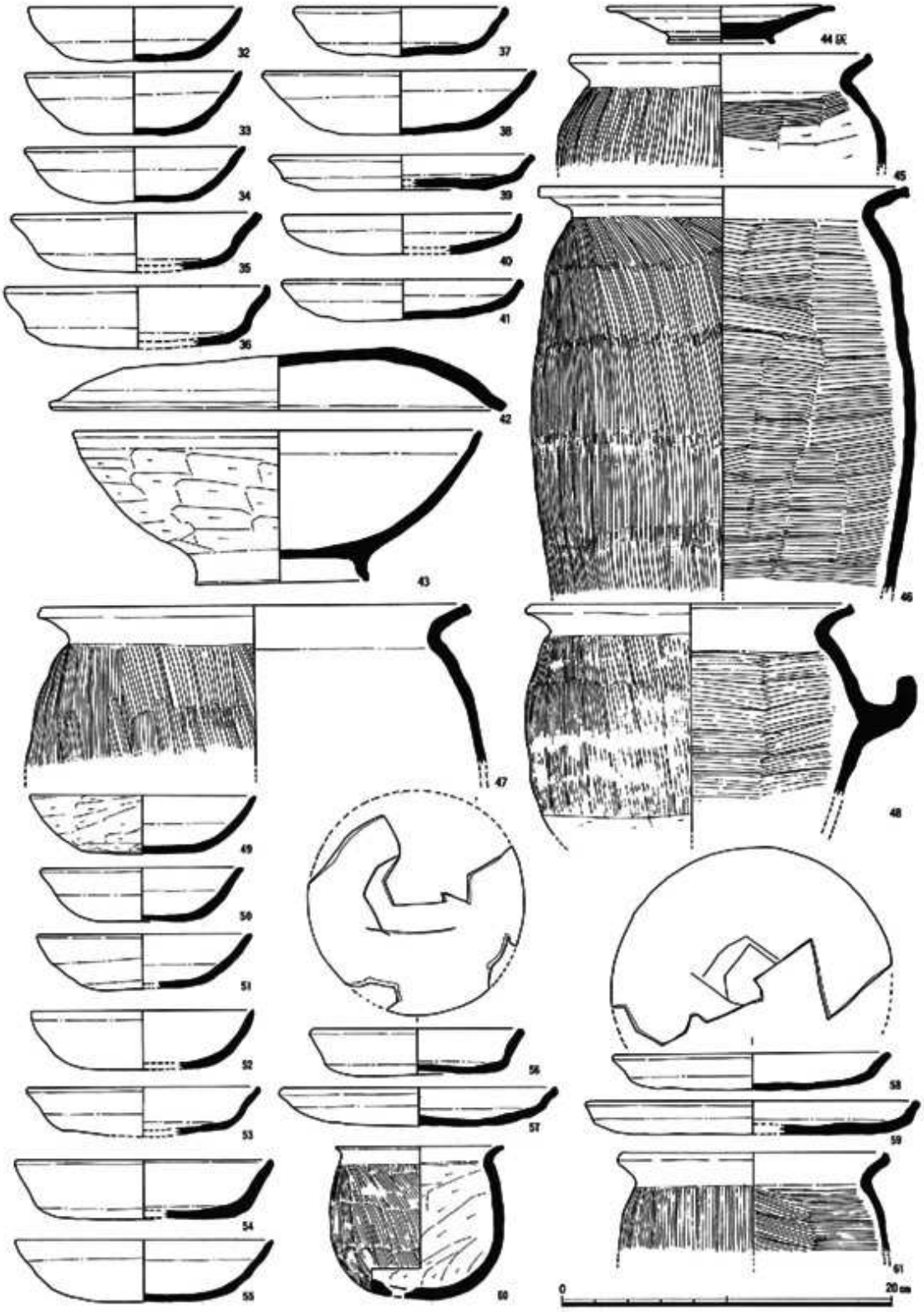
ＳＫ6549は前Ｉ期の遺物が若干混入しているが、底部付近は平安時代初期の比較的良好な資料である。小型の甕(14～16)が目立つ。土師器杯は口縁部をヨコナデし、底部付近をナデるものが中心だが、底部外面をヘラケズリするもの(４)もある。(17)は須恵器の高台付椀で、外面にはロクロナデ痕がのこり、やや茶褐色がかった色調である。(20)は須恵器杯蓋だが、内面は硯に転用され、墨痕が残る。

前Ｉ期の遺物を出土する遺構では、ＳＫ6548が最も遺物量が多い。灰釉陶器の段皿(44)はほぼ逆台形状になる高台をもち、全面に緑褐色の釉薬をかけ、猿投編年で黒笹14号窯式に相当するものである。(42)は土師器の蓋で、ゆがみが大きく器表面は磨耗のため不明瞭だが外面はヘラケズリ調整がなされている。(43)の台付椀も外面はヘラケズリ調整がなされている。(48)は把手付甕で、表面に多量のススが付着し、底部のみを欠損する。

ＳＫ6550からは見込みにヘラ描き線刻で多角形を描く土師器皿(56･58)が出土している。同じ土坑の小型甕(60)には、底部に外面から焼成後に穿孔が施される。



第23図　第93次調査　出土遺物実測図　ＳＫ6549：１～20、ＳＫ6552：21～28、ＳＫ6551：29～31　（１：４）



第24図　第93次調査　出土遺物実測図　ＳＫ6548：32～48、ＳＫ6550：49～61　（１：４）

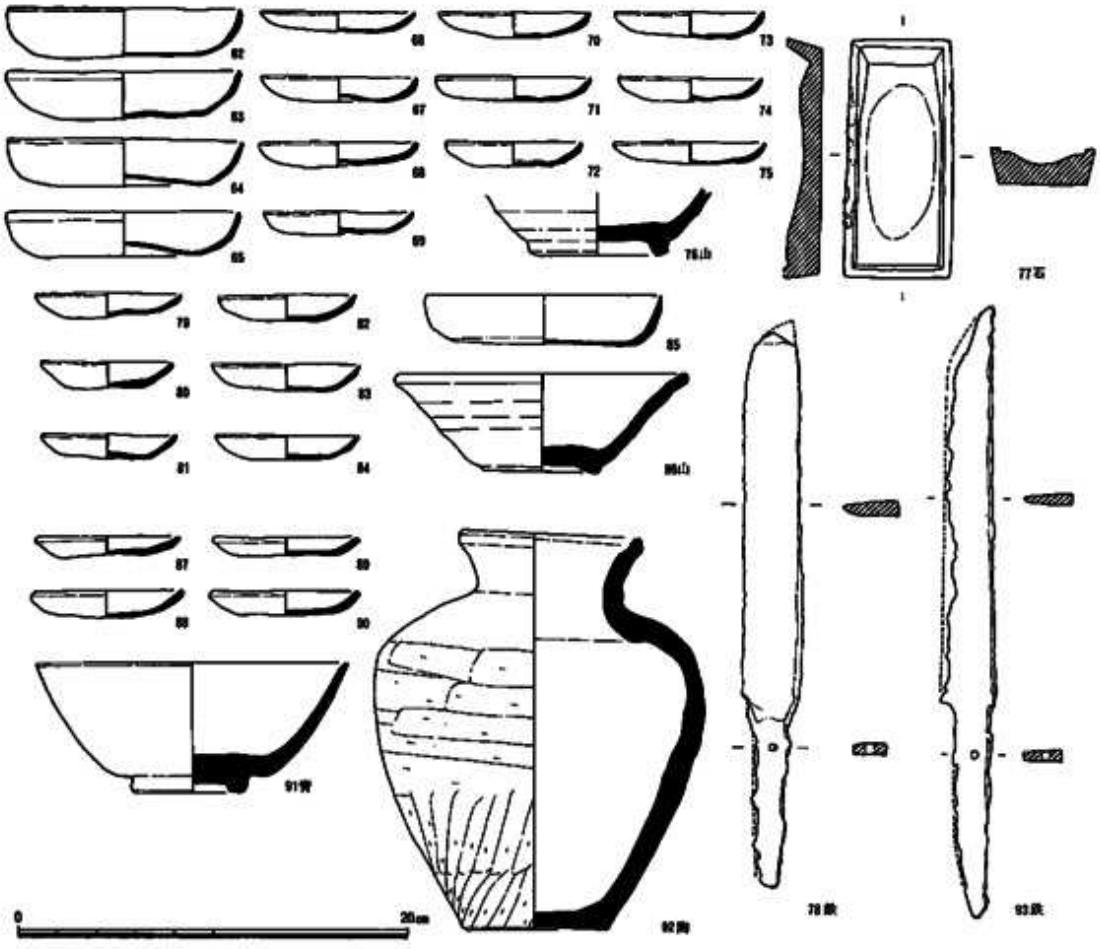
鎌倉時代の遺物は、中世墓と井戸からの出土が多い。

ＳＸ6533とＳＸ6534から出土した土師器皿には先述のとおり大小２型式がある他、大型のものにも底部が平らなもの(62･63)と、内側にへこむもの(64･65)がある。いずれも淡黄灰色を呈する。

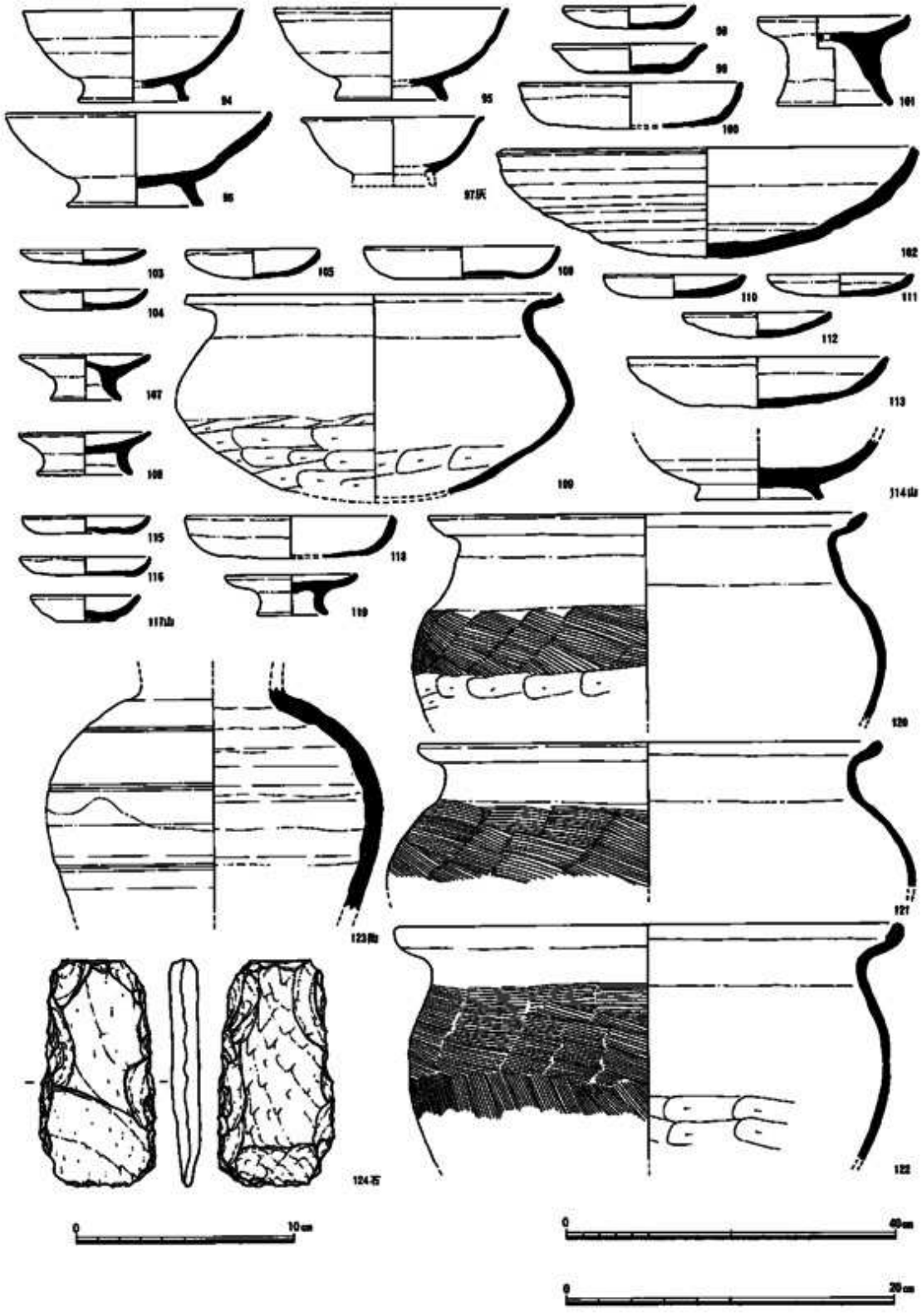
ＳＸ6534の山茶椀(86)は13世紀中葉に位置づけられ、内面に黒色の炭化物が多量に付着していた。

ＳＸ6537の青磁椀(91)は龍泉窯産のもので、口径15.9cm、高さ6.7cmで、見込みに方形の印刻があるが不鮮明で文字は読めない。高台底部外面には釉が及ばない。常滑産の壺(92)は三筋壺の系譜をひく小型のもので、口縁端部をやや内側に屈曲する。外面はケズリ調整され、体部上面には自然釉がかかる。４枚出土した土師器の小皿は口径が７cm強であることは他の中世墓出土品と類似するが、赤褐色～黄褐色がかった色調で焼成に差異がある。

鎌倉時代の遺物を出土した井戸にはＳＥ6535･6536･6538がある。当該期の遺物では土師器皿・



第25図　第93次調査　出土遺物実測図　ＳＸ6533：62～78、ＳＸ6534：79～86、ＳＸ6537：87～93　（１：４）



第26図　第93次調査　出土遺物実測図　ＳＥ6530：94～97、ＳＫ6545：98～102、ＳＥ6536：103～114
ＳＥ6535：115～123(１：４)、ＳＤ6555：124(１：３)

鍋・ 高台付杯や山茶椀などがある。鍋についてみてみると、ＳＥ6535のもの(120～122)は頸部が明瞭に立ち上がり、口縁部との境は強く屈曲する。口径は30cmをこえる大型の部類に入る。ＳＥ6536の(109)は口縁端部の折り返し部分は鋭く立ち上がるが、口縁部と胴部の間は緩やかにカーブし、若干の頸部を残している。底部外面はケズリ調整、胴部はナデ調整される。

この他注目される遺物には平安時代末期の土師器大盤(102)がある。直径50.4cmを測り、粘土紐を輪積みにしたままわずかにナデ調整され、口縁端部に面を作る。底部も無調整で、胎土にも多量の砂粒を含む粗製品である。底部外面に磨耗がないことから蓋ともみられるが、口縁端部を外側に面取りしている点からここでは盤としておく。緑釉陶器は微細な破片のみながら出土点数は47片と、当該する遺構は乏しいものの比較的多くの出土をみた。またＳＤ6555から出土した打製石斧(124)は長さ10.4cm、幅5.3cm、厚さ1.3cmの緑泥片岩製で、弥生時代のものと思われる。

(10) まとめ

第93次調査は、今後継続的に予定する斎宮駅周辺調査の第１回目であり、当該地域の総合的な考察は今後の調査の進展に拠らねばならないが、当地域について若干の言及は可能である。

まず今回の調査で最も重要な遺構として５間×２間の掘立柱建物があげられよう。ＳＢ6532･6543はやや規模が異なるもののそれぞれＥ４°Ｎに棟方向を揃えており、これは史跡東部の方格地割りの軸方向(Ｅ４°Ｎ)と一致するものである。現在史跡東部には溝とそれに挟まれた道路によって分けられた一辺約120m(400尺)の20ブロックの方格地割りが想定されており、さらに第82次調査(平成元年度)ではこの区画の最も北側の溝ＳＤ291がさらに西に延長して、地割りが想定される範囲がさらに西に広がる可能性が出てきている。この点では第93次調査地区はこの広がる部分に含まれており、平安時代初期あるいは前半に比定されるＳＢ6532･6543などが方格地割りと棟方向をそろえることは、少なくとも区画による規制がここまで及んでいたことになる。なお現在想定する20の方形区画が斎宮駅の北側地域に及ぶかどうかについては、一辺120mのプランを本調査区一帯にも延びると想定すると、今回検出したＳＤ6555あたりで南北の区画溝が検出されることになる。しかし、調査によってこの部分には多数の南北溝は検出されているが、これらは小規模で地割りの軸線に対しすべて東に振れているため、後世の削平の可能性もあるものの、今回は新たな区画の存在を確認することはできなかった。

総柱建物ＳＢ6545は、県内でも亀山市能屋垣内遺跡や大薮遺跡の例のような屋敷的な建物とみられる。周辺の同時期の総柱建物としては、第49次調査(昭和58年度)や第59次調査(昭和60年度)でも見られ、平安時代後期～鎌倉時代前半の総柱建物の多くは南東隅に土拡を持つことが知られているが、今回の５間×３間の建物は斎宮跡の当該期の中では大型のもので、プランも従来のものとは異なっている。屋敷地としては第37－４次調査(昭和56年度)、第59次調査や第

87次調査(平成2年度)で平安時代後期～鎌倉時代の溝による方形の区画とその内部の建物群が見つかっている。こうしたことは史跡中央部付近は平安時代後期には官衙的な色彩がうすれていったことを示すものである。こうした「屋敷地」に関連して、時期について整合性は確認できなかったものの、「垣根」状のピット群の問題がある。斎宮においてこれまで方格地割などについては言及されてきているが、その内部を区画する施設についてはほとんどわからず、斎宮の特殊性とみられてきた。従来ともすれば木根痕として注意されなかったものも今後区画施設となる可能性を今回の例は明確に示したものと考える。

斎宮跡での中世墓の検出例は従来史跡西部の古里地区や塚山地区等に多かったが、今回新たに史跡中央部の例を増したことになる。ＳＸ6533の類似例と考えられるものに度会郡玉城町蚊山遺跡で検出された鎌倉時代の中世墓がある。全体の規模はＳＸ6533よりも大きいが、出土品も土師器皿類、鉄製短刀、青磁椀と類似性を示す。この中世墓が発見されたこともまた、当地域がもはや斎宮寮としての機能を完全に失っていたことを示すとともに、今回検出した３つの中世墓の規模や副葬品は、被葬者がこの近辺にあっていかなる階層であったかという検討課題を残したと言えるだろう。今後、継続した調査によっての斎宮駅北側一帯の実態が解明されることを期待したい。

（大川勝宏）

VI. 第94次調査

6AEM(御館地区)

第94次調査は、史跡中部の御館地区、斎王の森南東約180mの水田地帯に南北方向のトレンチを設定して実施した。トレンチは、幅4m、長さ約60mで、調査面積は220㎡である。

これまでに、斎王の森の南側水田部分では、昭和57年度の第42－2次調査で区画溝が検出されており、また、第47次調査では計8か所、総延長417mのトレンチ調査が実施されている。そのうち南西約160mの2か所のトレンチ調査では、奈良時代の竪穴住居、溝、土坑、平安時代後半の掘立柱建物、溝などが検出されているが、いずれも部分的に後世の粘土採掘による攪乱を受けていた。しかし、斎王の森より南東側の水田部分ではこれまで調査は実施されておらず、この付近が、以前より粘土採掘による攪乱を受けていることが指摘されているものの、遺構の残存状況としては、全く不明であった。今回の調査では、宮域の中・東部に広がる方格地割の北から2本目の区画溝、及びその他の遺構の残存状況を把握することを目的としている。

(1)遺構

調査区の全体にわたり、粘土採掘による攪乱が著しく、検出した遺構はSD6570のみで、その他明確な遺構といえるものは、確認することができなかった。特に調査区北端、南端の攪乱は著しく、地表面より0.6～1.0mの深さに達していた。SD6570を検出した付近は、耕作土を除去すると20cm前後で遺構面に達し、攪乱を比較的受けていなかったが、遺構自体の密度は低かった。SD6570は深さ数cmのごく浅い東西溝で、西側は旧送電線鉄塔の基礎により破壊されていた。遺物は出土しておらず、時期については不明である。

(2)遺物

出土遺物は平安時代～鎌倉時代にかけてのものである。中心となるのは平安時代後II期の遺物で、特に調査区南端でまとまって出土している。土師器椀・台付皿・甕、ロクロ土師器小皿がある。他に、緑釉陶器3点、須恵器、灰釉陶器、山茶椀、製塩土器、白磁、砥石がある。

(3)まとめ

今回の調査では、区画溝、及びその他の遺構の残存状況を確認することが目的であったが、攪乱が著しかったため、それら大半の遺構は既に破壊されていた。しかし、出土遺物には平安時代後II期の遺物が圧倒的に占めており、攪乱により原位置を保っていないとはいえ、この付近に当該時期を中心とする遺構が存在したものと推定される。今後の本地域での遺構残存状況の見通しについては、近鉄線から斎王の森へ通ずる町道西側の水田地帯では、遺構の残存する部分も確認されているので、今回の調査区はたまたま攪乱部分であったということを考えれば、今後さらに周囲でも、遺構の残存状況を確認する調査が必要と思われる。　　(森田幸伸)

調査区位置図（1：2,000）

遺物実測図（1：4）

94次

第27図　第94次調査　遺構実測図（1：200）

掘立柱建物一覧表

SB	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	時期	備考
第90次調査（6AFH－A）								
6414	(4)×2	E5°N	－	3.8	2.0	1.9	平安 初期	SB6416より古
6420	5×2	E4°N	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	SB6464より新
6450	5×2	E1°N	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	
6460	5×2	E4°N	12.3	4.9	2.46	2.45	〃	SB6450より古
6465	2×2	E4°N	3.7	3.4	1.85	1.7	〃	
6467	3×2	N6°W	7.2	3.8	2.4	1.9	〃	
6468	3×2	E1°N	6.6	4.4	2.2	2.2	〃	
6416	(3)×2	E2°S	－	3.7	1.7	1.85	平安 前Ⅰ期	
6417	(4)×2	E0°W	－	3.8	1.9	1.9	〃	SB6413より古
6422	3×2	N8°W	6.0	4.0	2.0	2.0	〃	
6455	3×2	E2°N	6.1	3.8	2.0	1.9	〃	
6413	(3)×2	E4°N	－	4.8	2.4	2.4	平安 前Ⅱ期	
6415	(3)×2	E0°W	－	4.3	2.1	2.15	〃	
6439	3×2	N5°W	6.0	4.3	2.0	2.15	〃	
6441	3×2	N0°S	5.7	4.4	1.9	2.2	〃	
6442	3×2	N4°W	5.8	4.0	1.9	2.0	〃	
6443	3×2	N5°W	5.4	3.6	1.8	1.8	〃	
6452	5×2	E0°W	10.0	4.2	2.0	2.1	〃	
6453	5×2	E3°S	11.4	4.7	2.3	2.35	〃	
6457	3×2	E3°S	5.8	4.6	1.9	2.3	〃	
6434	5×2	E5°N	8.4	3.7	1.7	1.85	平安 中期	SB6442より新
6456	5×3	E1°N	9.5	6.3	1.9	2.1	平安 後Ⅰ期	総柱建物
6423	3×2	N2°E	5.8	3.8	1.9	1.9	平安 後Ⅱ期	両面庇 西庇梁行 1.8m 東庇梁行 2.4m
第91次調査（6ABH－F）								
6481	3×2	N17°E	6.3	4.0	2.1	2.0	奈良（?）	
6495	3×3	N9°E	3.9	3.9	1.3	1.3	奈良	柵か？
6483	3×2	N27°E	6.0	4.2	2.0	2.1	平安 後期	第7次調査で検出
6485	3×2	N33°E	6.3	4.2	2.1	2.1	〃	第7次調査で検出
6482	4×2	N24°E	7.4	5.0	1.85	2.5	室町	
6486	(3)×2	E12°S	－	4.0	2.0	2.0	〃	
6487	(2)×2	E27°S	－	3.6	2.1	1.8	〃	総柱建物
6489	(2)×2	E27°S	－	4.8	2.3	2.4	〃	総柱建物
6491	3×2	E27°S	4.5	3.2	1.5	1.6	〃	
6496	(3)×3	N31°E	－	5.4	2.4	1.8	〃	
6488	(3)×3	E9°S	－	4.2	1.5	1.4	不明	
6494	3×(1)	N11°E	6.0	－	2.0	2.7	〃	

SB	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	時期	備考
第93次調査（6ADN）								
6542	(5)×－	E 4°N	12.0	－	2.4	－	平安 初期	SB6543より古
6543	5×2	E 4°N	12.0	4.8	2.4	2.4	〃	
6531	－×2	N 4°W	－	6.0	－	2.1	平安 中期	西面庇　庇梁行1.8m
6554	－×2	E 6°S	－	3.4	1.7	1.7	〃	
6544	5×3	N 6°W	10.5	8.4	2.1	2.1	平安 末期	総柱建物　西側に2.1m張り出し
6532	5×2	E 4°N	11.5	4.8	2.3	2.4	不明	
6539	5×2	E 4°N	10.5	4.6	2.1	2.3	〃	SB6540より古
6540	(3)×2	N 2°E	－	4.0	2.1	2.0	〃	
6541	－×2	N 2°E	－	4.4	－	2.2	〃	
6557	(1)×2	N 4°E	－	4.8	2.1	2.4	〃	SD6556より古

竪穴住居一覧表

SB	規模(m)	長軸方向	深さ(cm)	柱穴	カマド	時期	備考
第90次調査（6AFH－A）							
6421	3.5×3.1	E 4°N	10	－	東壁	奈良 後期	
6446	4.7×4.3	N 4°W	7	－	東壁	〃	
6464	3.6×3.2	N 1°E	8	－	東壁	平安 初期	SB6420より古
第93次調査							
6553	3.2×－	N23°W	20	○	東壁？	奈良 後期	

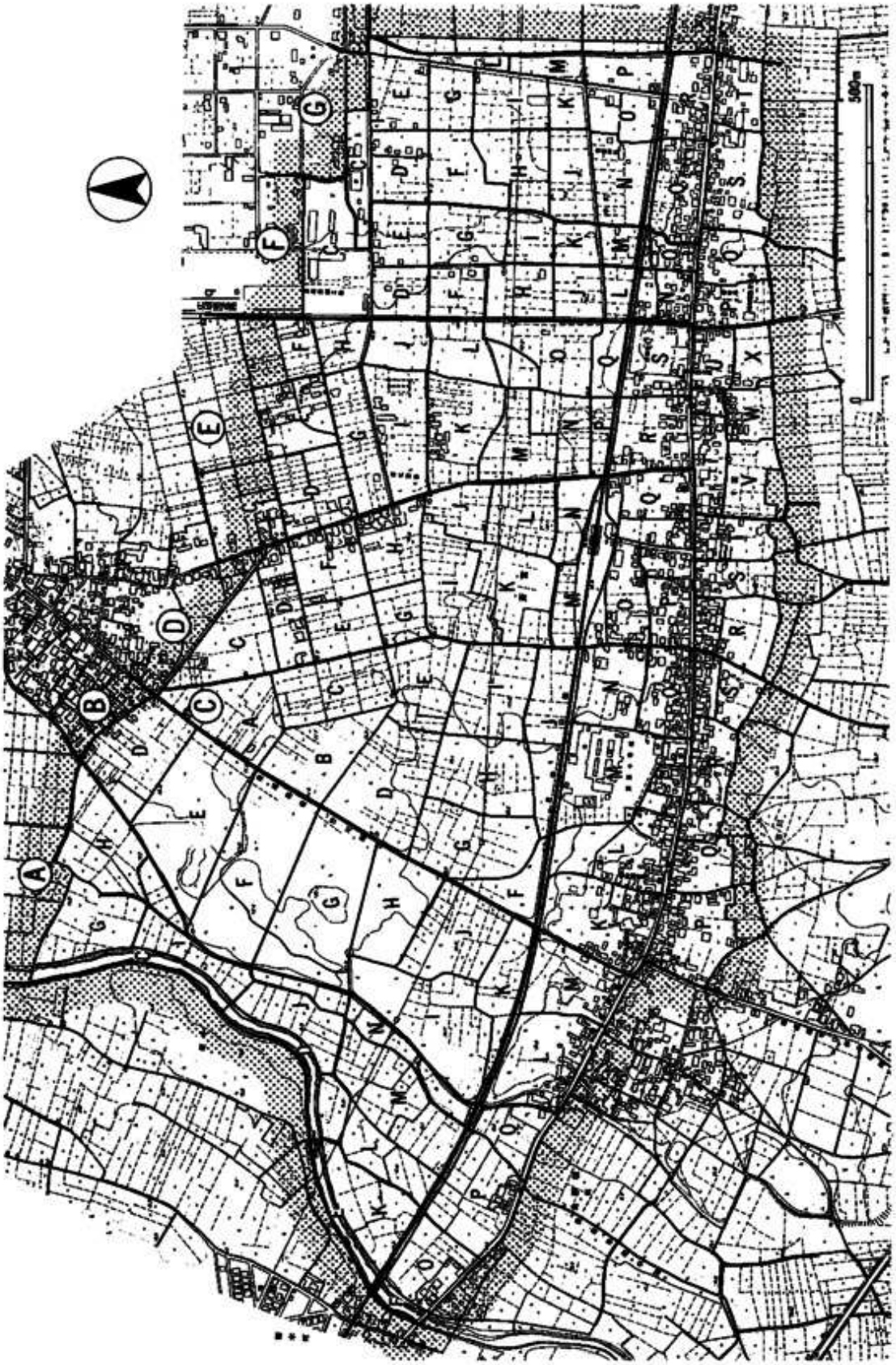
斎宮跡発掘次数一覧表

次	年度	調査地区
1	S45	試掘
2	46	古里A地区
3		＊ B地区
4	47	＊ C地区
5	48	＊ D地区
6－1		Aトレンチ
6－2		Bトレンチ
6－3		Cトレンチ
6－4		Dトレンチ
6－5		Eトレンチ
7	49	古里E地区
8－1		Fトレンチ
8－2		Gトレンチ
8－3		Hトレンチ
8－4		Iトレンチ
8－5		Jトレンチ
8－6		Kトレンチ
8－7		Lトレンチ
8－8		Mトレンチ
8－9		Nトレンチ
8－10		Oトレンチ
8－11		Pトレンチ
9－1	50	Qトレンチ
9－2		Rトレンチ
9－3		Sトレンチ
9－4		Tトレンチ
9－5		Uトレンチ
9－6		Vトレンチ
9－7		Wトレンチ
9－8		Xトレンチ
9－9		Yトレンチ
9－10		Zトレンチ
10		広域圃道路
11－1		西加座2661－1（山中）
11－2		＊ 2681－1（山名）
11－3		東前沖2483－2（前田）
11－4		下　圃2926－9（吉木）
12－1	51	2Aトレンチ
12－2		2Bトレンチ
12－3		2Cトレンチ
12－4		2Dトレンチ
13－1		東加座2436－7（浜口）
13－2		＊ 2436－4（中村）
13－3		古　里3283（村上）
13－4		楽　殿2916～2917（松井）
13－5		御　館2974－1（川本）
13－6	51	中垣内375－1（南）
13－7		東　裏328（小川）
13－8		西加座2771－1（細井）
13－9		＊ 2773（細井）
13－10		東　裏362－1（児島）
13－11		西加座2681－1（浮田）
13－12		＊ 2721－3，2724－2（森川）
13－13		東前沖2506－2（宮下）
14－1	52	2Eトレンチ
14－2		2Fトレンチ
14－3		2Gトレンチ
14－4		2Hトレンチ
14－5		2Iトレンチ
15		斎宮小学校
16－1		竹川町道A
16－2		＊ B
16－3		＊ C
16－4		＊ D
16－5		＊ E
16－6		＊ F
17－1		竹神社社務所
17－2		竹神社防火用水
17－3		西加座2721－6（西沢）
17－4		楽　殿2894－1（中川）
17－5		＊ 2895－1（西口）
17－6		出在家3237－3（吉川）
17－7		＊ 3237－1（里中）
17－8		楽　殿2894－1（西村）
17－9		東海道機
18	53	6AEL－E・I（下圃）
19		6AEN－M・N・O（御館）
20		6AEO－I・J（柳原）
21－1		6AGN－B（鍛冶山、北山）
21－2		6AEI－D（西加座2711－2，2717－4他、山路）
21－3		6AFD－D（西前沖2649－1、大西）
21－4		6AFH－F（西加座2678，2679－3、森下）
21－5		6AGD－K（東前沖、渡部）
21－6		6ACA－T（古里3269－2、中西）
21－7		6AFE－F（東前沖2631－1、鈴木）
21－8		6AEG－A（楽殿2909－3、大西）
21－9		6AED－R（篠林3218－3、宇田）
22－1		6AGU
22－2		6AGU
22－3		6AGW
23	54	6AEL－B（下圃）
24		6AGF－D（西加座）

次	年度	調査地区
25－1	54	6ADP－K（牛葉3029－1、三重土地ホーム）
25－2		6ACA－Y（古里3270、脇田）
25－3		6ADD－F（篠林3139－3、池田）
25－4		6AER－H（牛葉3014、牛葉公民館）
25－5		6AGN－H（鍛冶山2392、丸山）
25－6		6AFH－A（西加座2675－5、谷口）
25－7		6AEK－V（下開2926－10、奥田）
25－8		6AFC－D（西前沖2064－5、山本）
25－9		6ACN－C（広頭3387－1、北出）
25－10		6AEV－A（鈴池339－1、永島）
25－11		6ACF－B（東裏364－1、沢）
25－12		6AEE－Y（楽殿2892－3、山本）
25－13		6AEJ－E（西加座2766－1、山内）
26－1		6AFR　（中西）
26－2		6AEX～6ACQ（鈴池、木葉山、南裏）
26－3		6AEV・W・X（鈴池）
26－4		6ACR　（木葉山、南裏）
27		6ACG－S・T（東裏）
28		6AEO－D（柳原）
29		6AF1、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ
30	55	6ABJ－M・X・W（中垣内）
31－1		6ADO－M（内山3038－13、岩見）
31－2		6ACP－I（南裏227－2、鈴木）
31－3		6ABD－A（古里588－4、北藪）
31－4		6ADQ－T（牛葉3018－2、百五銀行）
31－5		6ACC－G（塚山3338－3、水谷）
31－6		6ABO－X（古里576－1、池田）
31－7		6AGI－L（東加座2427－1、竹内）
31－8		6ACN－G（広頭3388－1・5・8・9、森）
31－8		6AGD－L（北野2487－1、中川）
31－10		6ADM－O（内山3043-3、斎宮駅）
31－11		6ADT－I（木葉山304－2、澄野）
31－12		6ADT－J（木葉山304－7、宇田）
32		6ACE－D・E・F（塚山）
33		6ADE－C・D他（篠林）
34		6ADE－F・G・H（西加座）
35		6APE他（西前沖）
36	56	6ABI－F（中垣内）
37－1		6AFC－M（西前沖2064、日本経木）
37－2		6ADQ－R（牛葉3021－2、野田）
37－3		6AFC－F（西前沖2604－6、神田）
37－4		6AFC－M（西前沖2604、日本経木）
37－5		6AFC－G（西前沖2064－7、中村）
37－6		6ABD－A（古里588－2、北藪）
37－7		6AEC－M（苅干2861－2、斎王公民館）
37－8		6ADR－P（木葉山128－8・13・14、富山）
37－8		6AGK－E（東加座2355－1、竹内）
37－10		6AED－O（楽殿3217－1、渡部）
37－11		6ADN－O（内山3043－3、斎宮駅）
37－12	56	6AFH－J（西加座2681－1・3・4、渋谷）
37－13		6AGK－F（西加座2385－3、2386－3、竹内）
38		6ACD－S（塚山）
39		6ABD－R・S・T（古里）
40		6AGH－L・M（東加座）
41		6AGJ－J他（斎宮地内）
42－1	57	6AEI－D・F（楽殿）
42－2		6AEK－A・B（楽殿）
43－1		6ADC－C（出在家3235－2、永田）
43－2		6ADT－B（木葉山308－1、山本）
43－3		6ACP－T（南裏241－1、辻）
43－4		6ADS－D（牛葉123－3、西山）
43－5		6ADE－D（篠林3220－3、澄野）
43－6		6AGE（東前沖、町道側溝）
43－7		6ABD－F（古里588－6、今西）
43－8		6ADQ－H（牛葉3025－2、大西）
44		6AFL－A・B（鍛冶山2759－1、他）
45		6AEG－P・Q（楽殿2904－2、他）
46		6AGN－C・D（鍛冶山2737－1、他）
47		6ADJ－D・G他（西加座、鈴鹿、宮ノ前、上圃）
48－1	58	6AGM－M（広頭3385、斎宮小）
48－2		6ADP－Q（牛葉3033－1・2、吉田）
48－3		6ABL－M（中垣内434－6、西川）
48－4		6AGL－B（東前沖2480、倉田）
48－5		6AGD～6AFE（東前沖、町道側溝）
48－6		6AGC－A（西前沖3550－1、今西）
48－7		6ADT－H（木葉山307、森西）
48－8		6ACL－E・F・G（東裏334－15、他）
48－9		6AEV－J（鈴池341－1、乾）
48－10		6AGT（牛葉、町道側溝）
48－11		6ADP－E（鍛冶山2351－1,2352－1、柳原）
48－12		6AFC－H（西前沖2604－8・9、清水）
48－13		6ACM－O（東裏、斎宮小）
48－14		6AET（牛葉、町道側溝）
49		6ADI－D・U・V・W・X（上圃3083、他）
50		6ACH－H（東裏294,297、山本）
51		6AFF－D（西加座2663－1・4,2664、森下）
52		6AGF－D（西加座2703、他）
53－1	59	6ACM－P（東裏284、体育館）
53－2		6ACA－M（古里3280－2、中西）
53－3		6ABE（古里573－2、永納）
53－4		6ACL－S（東裏271－1、田所）
53－5		6ACR（木葉山97－5、田中）
53－6		6AGO（鍛冶山、町道側溝）
53－7		6ADD－U（篠林3147－3、野呂）
53－8		6AGE－O（東前沖2470－2、上田）
53－9		6ACS－O（木葉山95－2、浅尾）
53－10		6ACA－R（古里3267－1、西川）
53－11		6ADR－W（木葉山131－7、西村）

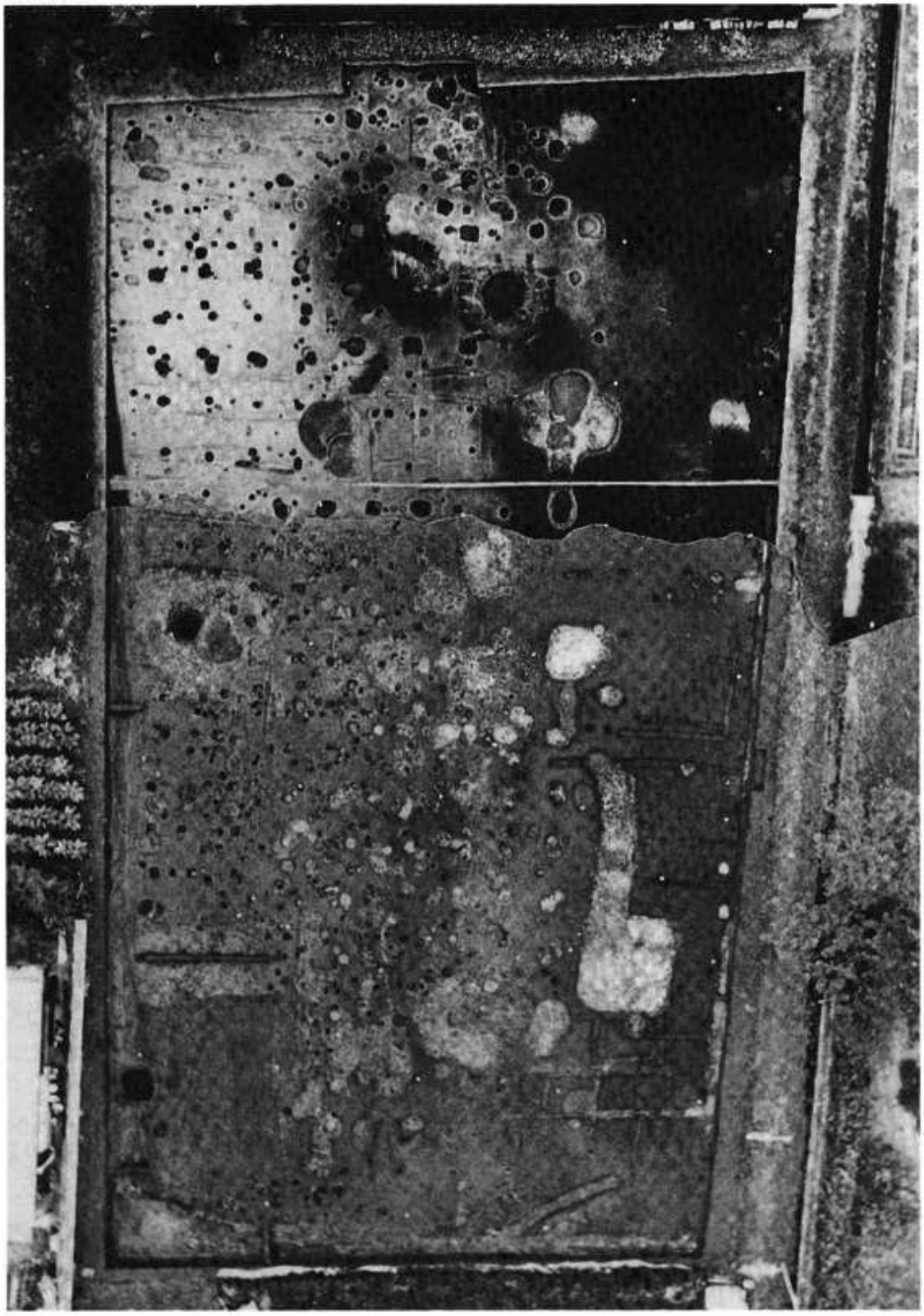
次	年度	調査地区
53－12	59	6ABL－K（中垣内464－2、沢）
53－13		6ADQ－L（牛葉3022、辻）
53－14		6ACM－O（東裏287－3、体育庫）
53－15		6AFK－C・D（西加座2721－1、鈴木）
54		6AFE－N（西前沖2630、他）
55		6AEN－P（樺原、御館2785－1、他）
56		6ACH－S（東裏289－1、他）
57		6AGF－H・I（東加座2441、他）
58－1	60	6AFK－C・D（西加座2721－1、鈴木）
58－2		6AFH－N（西加座2681－8、三村）
58－3		6ACM－N（東裏3385－2、斎宮小）
58－4		6ABL－A（中垣内4731－1、小家）
58－5		6ADQ－Q（牛葉、町道側溝）
58－6		6ADR－V（木葉山131－3、西山）
58－7		6AGS－G（中西611、山路）
58－8		6ABM－A（中垣内430－3他、近鉄）
59		6ACJ－I（広頭3379－1、他）
60		6AGJ－B・D・G（東加座2450－1、他）
61		6AFF－H・I・D（西加座2663－1、他）
62		6AGI－J・K（東加座2425、他）
63		6AFG－M・N（西加座2659－1、他）
64－1	61	6ACO－H（牛葉3395－1、トーカイ）
64－2		6AGL－F（東加座2435－1、大和谷）
64－3		6ADD－A（篠林3136－1、山路）
64－4		6AGR－N（笛川2340、丸山）
64－5		6ACM－R・Q・P（東裏3385－2、斎宮小）
64－6		6ACK　（東裏361－2、竹川自治会）
64－7		6AGI－G（東加座2435－2、大和谷）
64－8		6AGR－J（笛川2341－6、山下）
64－9		6ADQ－M（牛葉、町道側溝）
64－10		6ACF－A（東裏365－1、樋口）
64－11		6ACM－O（東裏3385－2、斎宮小）
64－12		6ADE－B（篠林3162－3、江崎）
65－1		6ACC－M（塚山3331－1）
65－2		6AEG－S（楽殿2908－2、他）
65－3		6AEI－L・M（楽殿2917－4、他）
66		6AGG－C（東加座2437－1、他）
67		6ABF　（古里523、他）
68		6ABF　（古里502、他）
69		6AGM－E～H（東加座2373、他）
70－1	62	6ACC－X（塚山3325－1、江崎）
70－2		6AEE－W（楽殿2875－2、岡田）
70－3		6ADR－I（木葉山129－5、大西）
70－4		6ACN－A・B・E・L（広頭3389－8、林）
70－5		6AEW－A（鈴池333－1、八田）
70－6		6ABL－S（中垣内430－6、奥山）
70－7		6AEE－T（楽殿577、浅尾）
70－8		6AEU・6AEX－A（牛葉、鈴池、三重県）
70－9		6AEP－C・D（御館、樺原、近鉄）
70－10	62	6AFD－B・D（西前沖2649－4、大西）
70－11		6AGO－H（鍛冶山2363－2、川合）
70－12		6ADD－F・G（篠林3158、長谷川）
70－13		6AEC－N・G（苅干、佐藤）
70－14		6ABL－R（中垣内459、北岡）
70－15		6AFD－A（西前沖2644－1、山本）
70－16		6ACB－A他（町道塚山線拡幅）
71		6ABE　（古里501、他）
72－1		6ABE　（古里500、他）
72－2		6ABF　（古里523、他）
72－3		6ABF　（古里551－2、他）
72－4		6ABF　（古里528－1、他）
73		6AFF－B・C・E・G（西加座2663－5、他）
74－1		6ABF　（古里523、他）
74－2		6ABF　（古里522、他）
74－3		6ABE・F（古里524、他）
74－4		6ABE　（古里548－1、他）
74－5		6ABE　（古里543、他）
75		6AGF－C（西加座2702、他）
76－1	63	6ADB－A～D（町道塚山線拡幅）
76－2		6ADE－F・G（篠林3158、長谷川）
76－3		6ABE　（古里554、明和町）
76－4		6ACK　（東裏354－13、山際）
76－5		6AEE－W（楽殿577、岡田）
76－6		6ACB－A（塚山3276－1、今西）
76－7		6ACM－M（広頭3385－2、斎宮小）
76－8		6AFM－G（鍛冶山2736－3、近鉄）
76－9		6ACQ　（南裏144－1、田所）
76－10		6ABD－U（古里579、池田建設）
76－11		6ABE　（古里554、明和町）
76－12		6AEE　（楽殿、町道下水管）
76－13		6ADD－K（篠林3143、中西）
76－14		6AEE－S（楽殿2878－3、山路）
76－15		6ABF～6ABH（中垣内、県道拡幅）
76－16		6AEK－B（下園2936－2、明和町）
76－17		6AEV－A（鈴池339－5、永島）
77		6AGJ－D（東加座2453、他）
78		6ADL　（宮ノ前3054、他）
79		6AGG－A・B（東加座2440、他）
80		6AFG－F～I（西加座2696、他）
81－1	H1	6AEC～F（町道塚山線拡幅）
81－2		6ABJ、6ABK（古里、県道拡幅）
81－3		6ADS－M（木葉山137、中川）
81－4		6AED－L（楽殿2881－2、山本）
81－5		6AFQ－C（中西597－2、木戸口）
81－6		6ADD－F（篠林313、池田）
81－7		6ABL－U（中垣内430－7、川本）
81－8		6ABJ　（古里、明和町）
81－9		6ACF　（中垣内、三重県）

次	年度	調　査　地　区	次	年度	調　査　地　区
81－10	1	6ADR－V（木葉山297、明和町）	85－5	2	6AED－U（楽殿2885－2、西山）
81－11		6ACM－N（広頭3385－2、明和町）	85－6		6AFH－B（西加座、明和町）
81－12		6AED－A（篠林3225、中川）	85－7		6ACB－C（塚山3276－3他、加藤）
81－13		6ACB　（塚山3276－19他、明和町）	85－8		6ABI－N（中垣内427－1、小林）
81－14		6AED－F（楽殿2844－2、澄野）	86		6AFH－F・G・H（西加座2679－1他）
81－15		6AED－U（楽殿2885－2、西山）	87		6ACE－N・Q・R（塚山3356他）
81－16		6AG　（北野3655－1、他）	88		6AGN－C・D（鍛冶山2411－1他）
82－1		6ADI－F～J（上園3095、他）	89－1	3	6ADM－O（内山3043－5、近鉄斎宮駅）
82－2		6ADI－K・L（上園3100、他）	89－2		6AGI－M（東加座2432－2他、北村）
83		6AFJ－C～F（西加座2770－3、他）	89－3		6ADM－N・O（内山3060－4、近鉄斎宮駅）
84－1		6AFJ－G（西加座2764－3）	90		6AFH－A・B（西加座2680他）
84－2		6AFH－G・H（西加座2679－1、他）	91		6ABH－F（中垣内393、他）
85－1	2	6ABD～6ACD（古里、三重県）	92		6AGN－A（鍛冶山2734－3）
85－2		6ACA－P（古里3279、松本）	93		6ADN（内山3045－12、他）
85－3		6ACJ－B・D（東裏、明和町）	94		6AEM（御館2942）
85－4		6ABE　（竹川573－1、永納）			

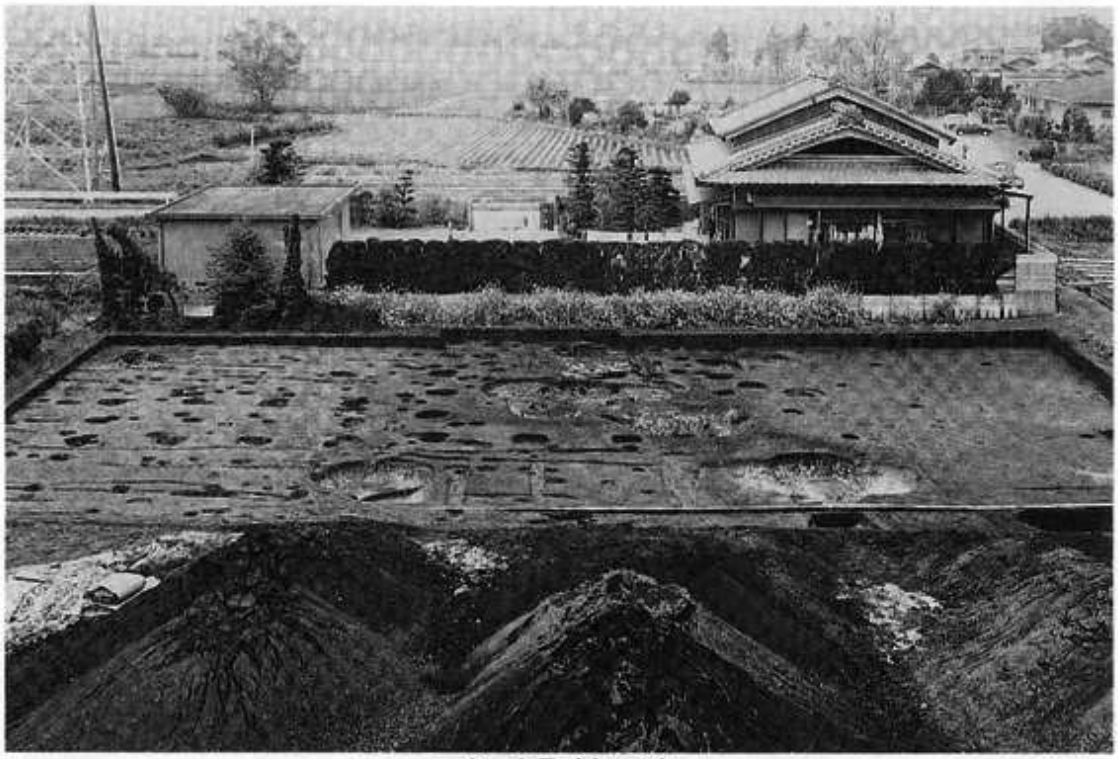


第28図　斎宮跡地区表示

图　　版

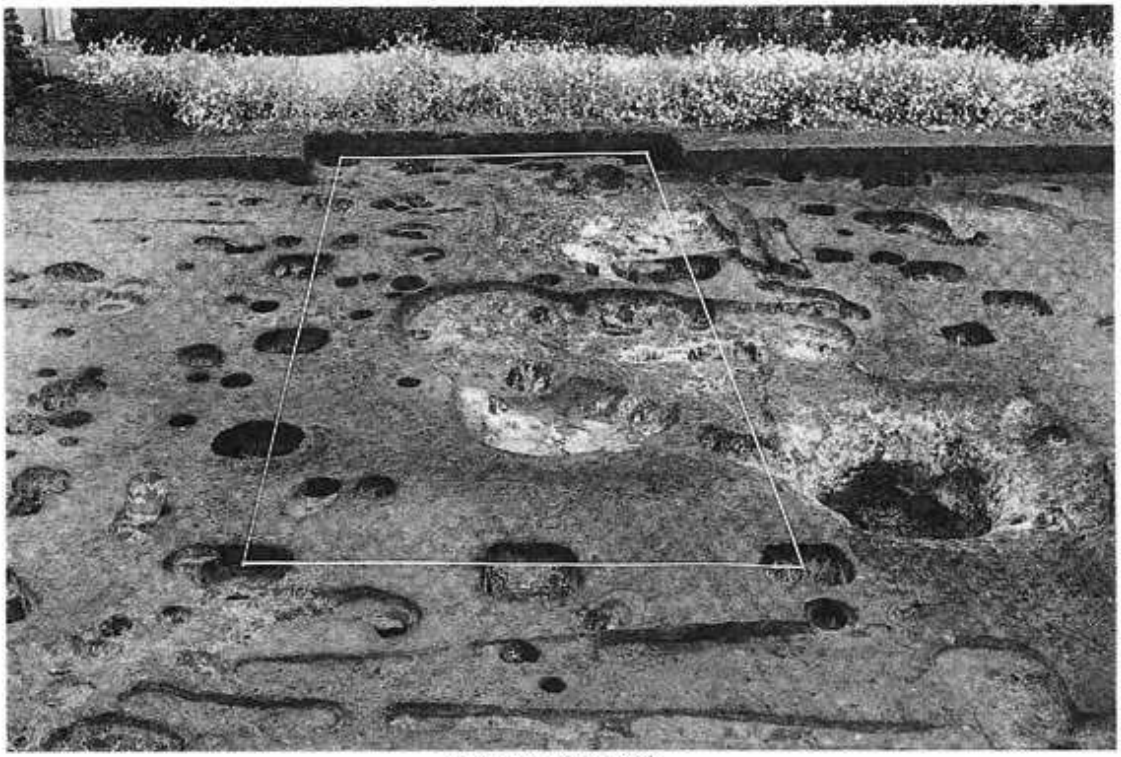


調査区全景（真上から）

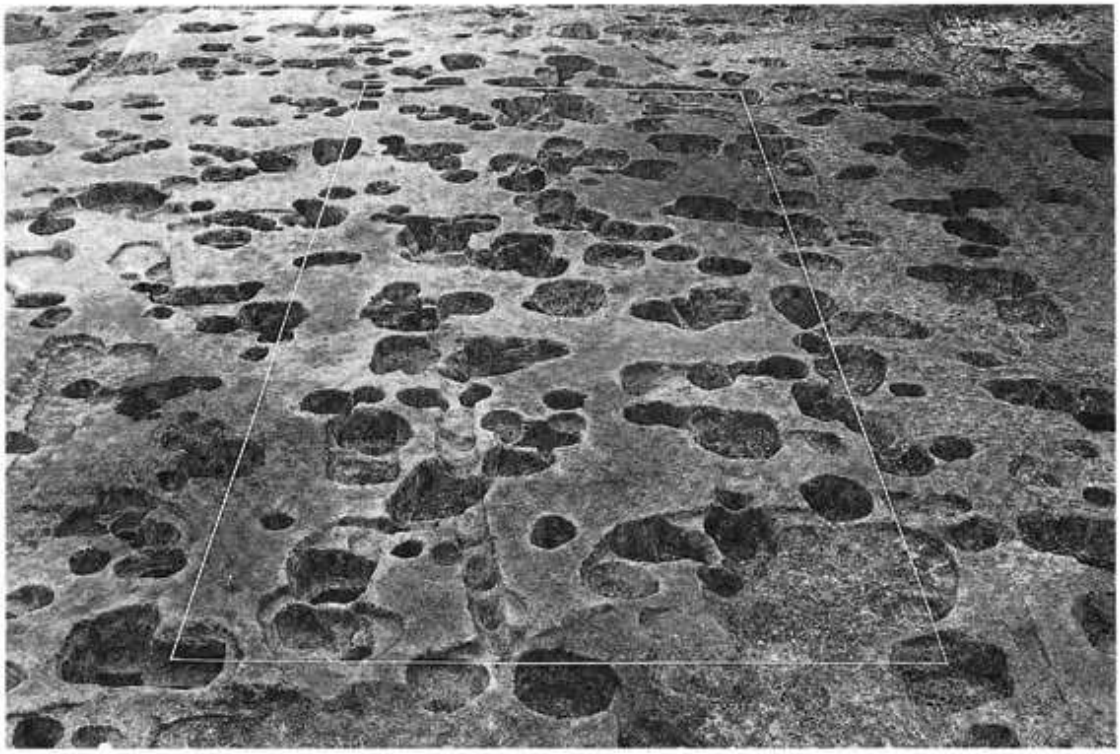


西半区全景（東から）

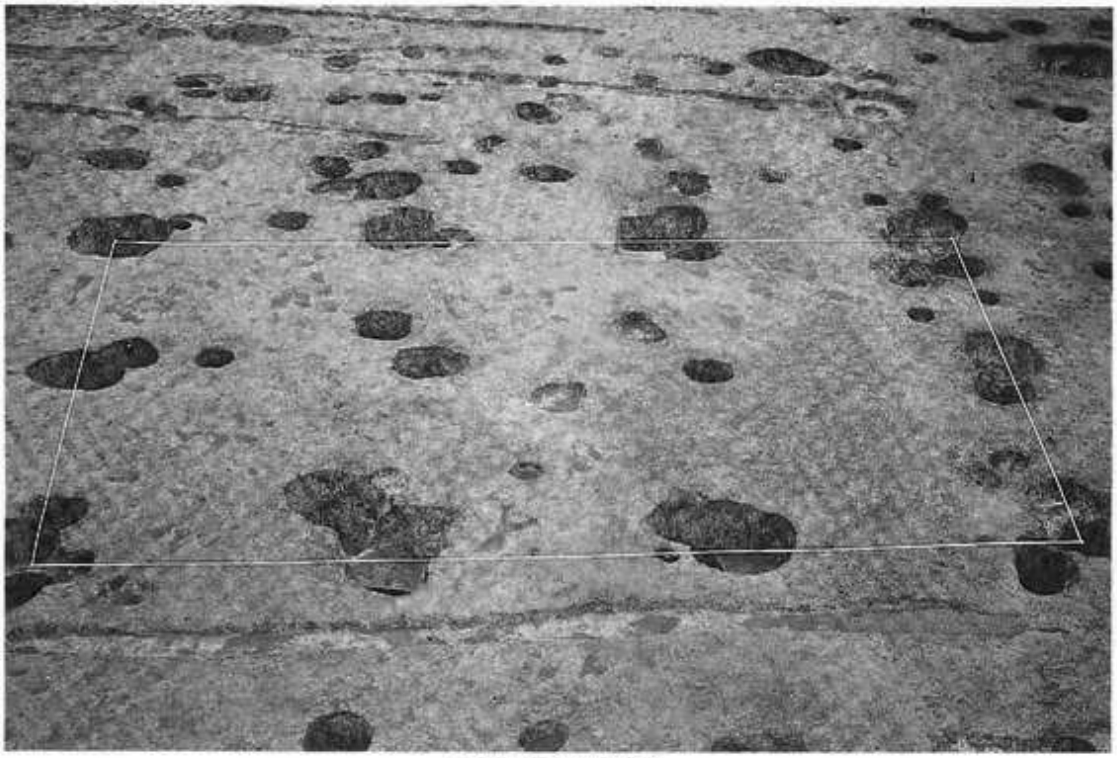
東半区調査後（東から）



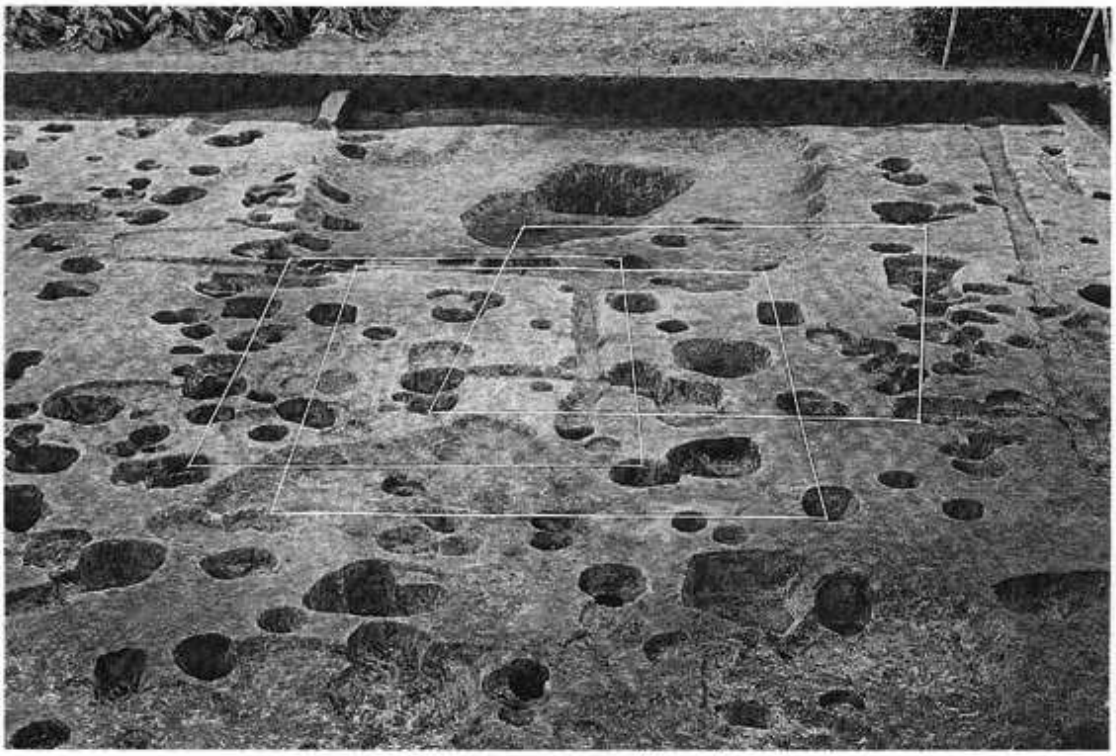
SB6420（東から）



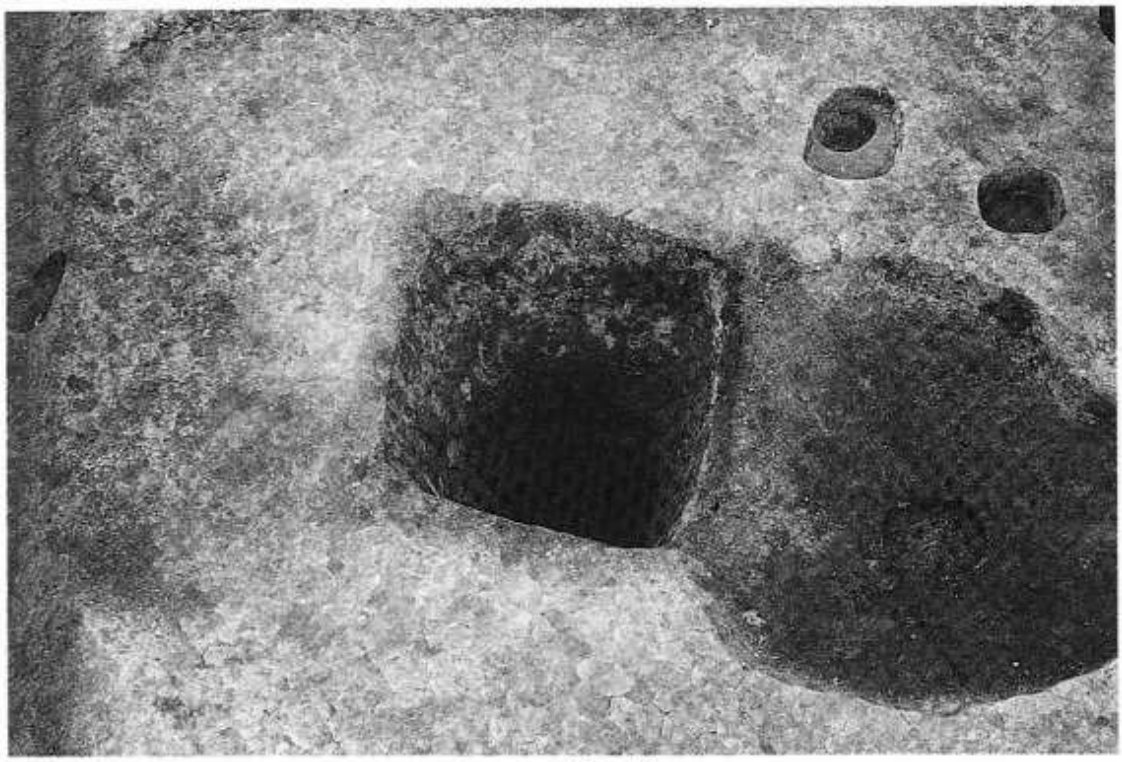
SB6460（東から）



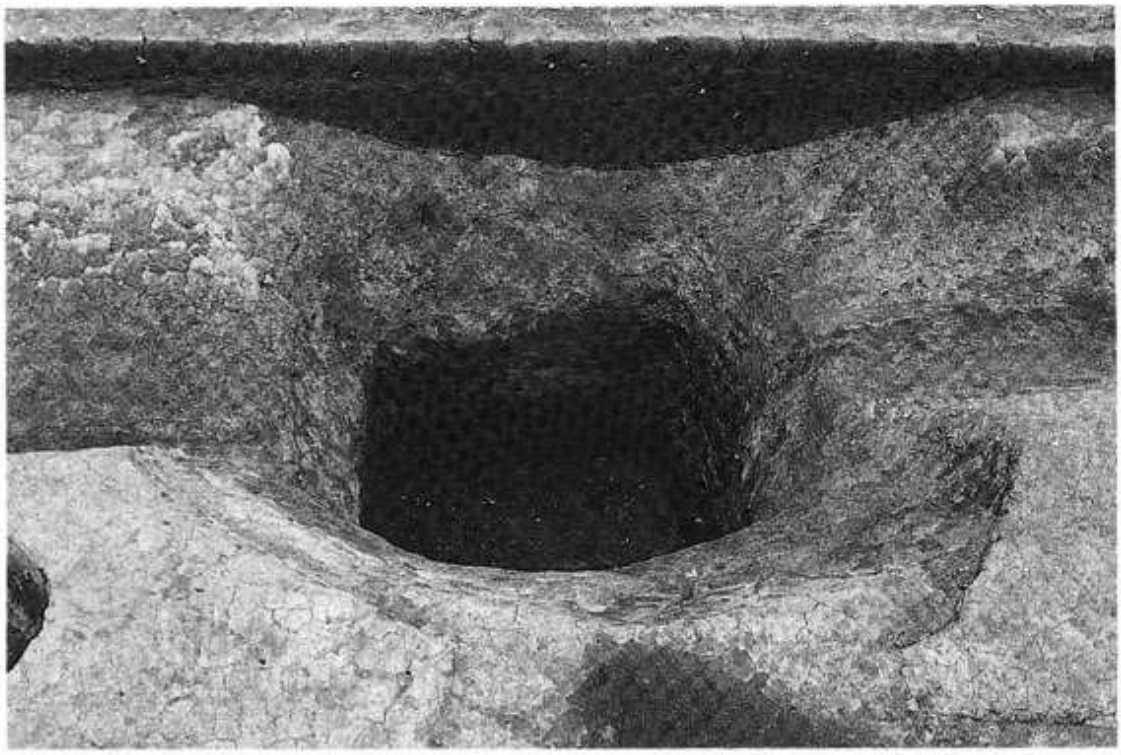
SB6422（東から）



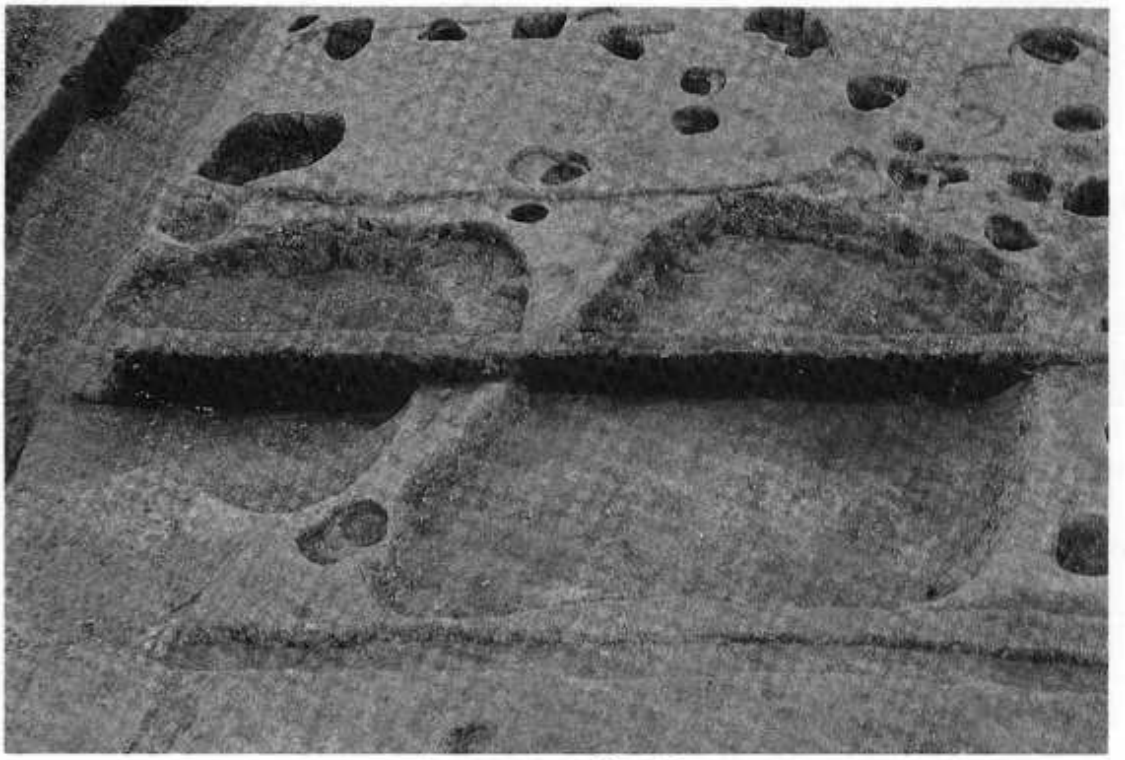
SB6439・6441・6443（北から）



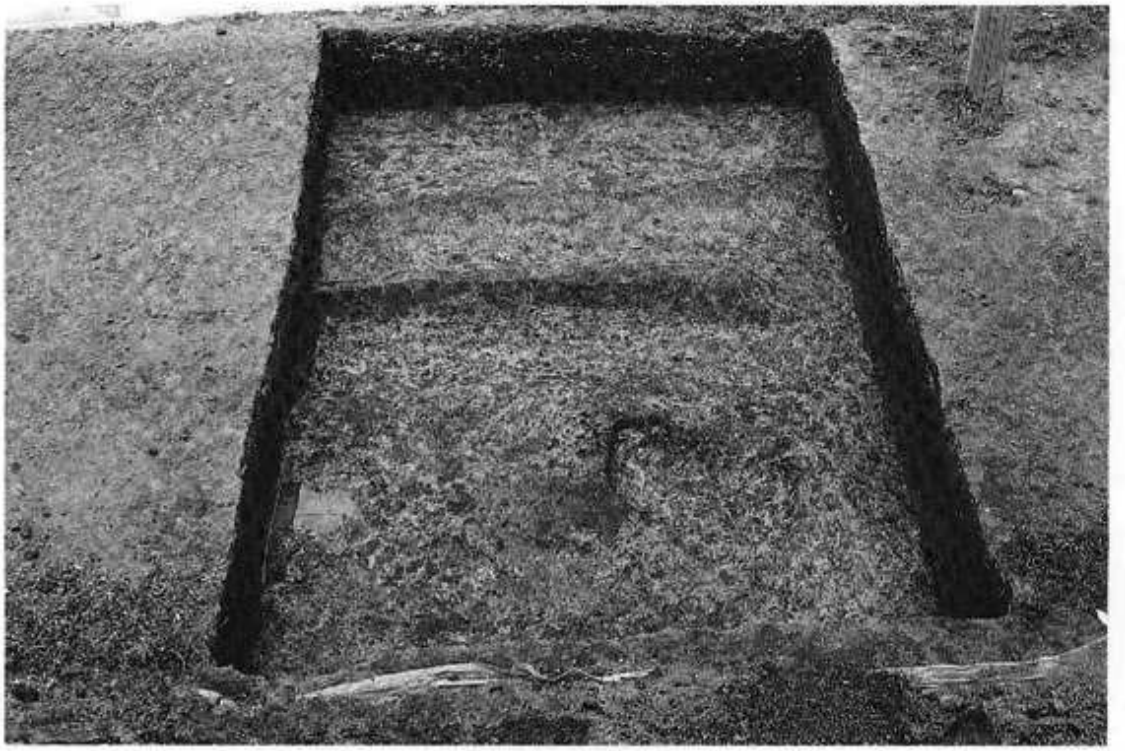
ＳＥ6440（東から）



ＳＥ6466（北から）

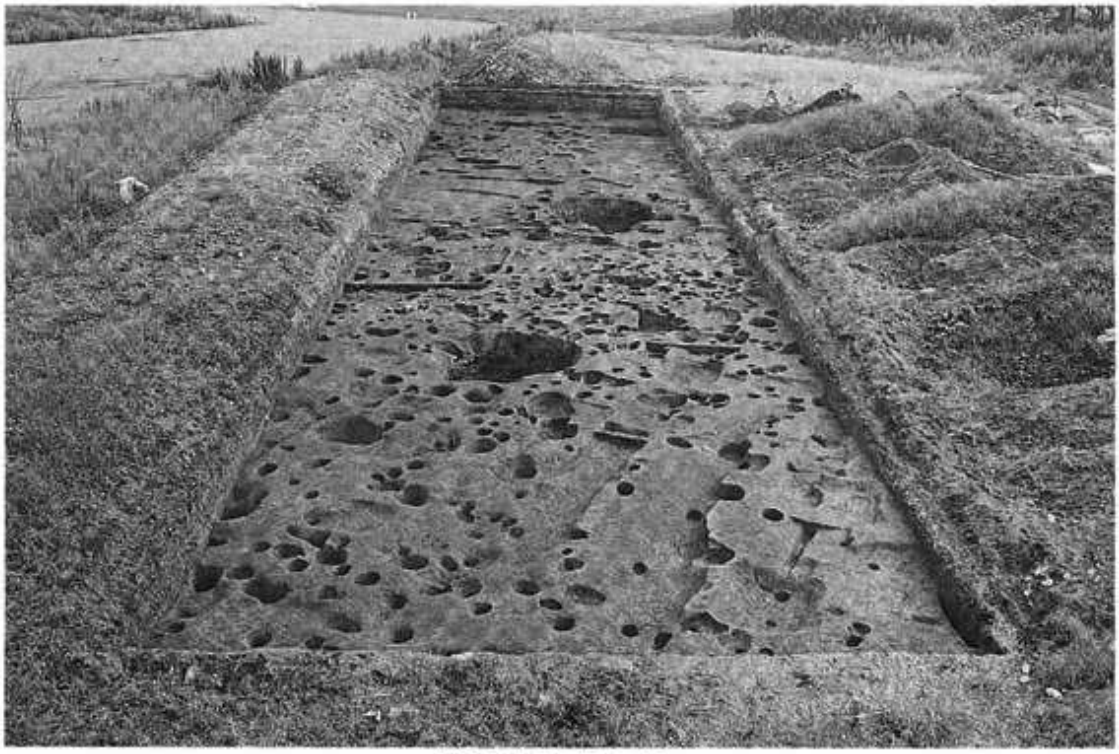


SK6458・6459（東から）

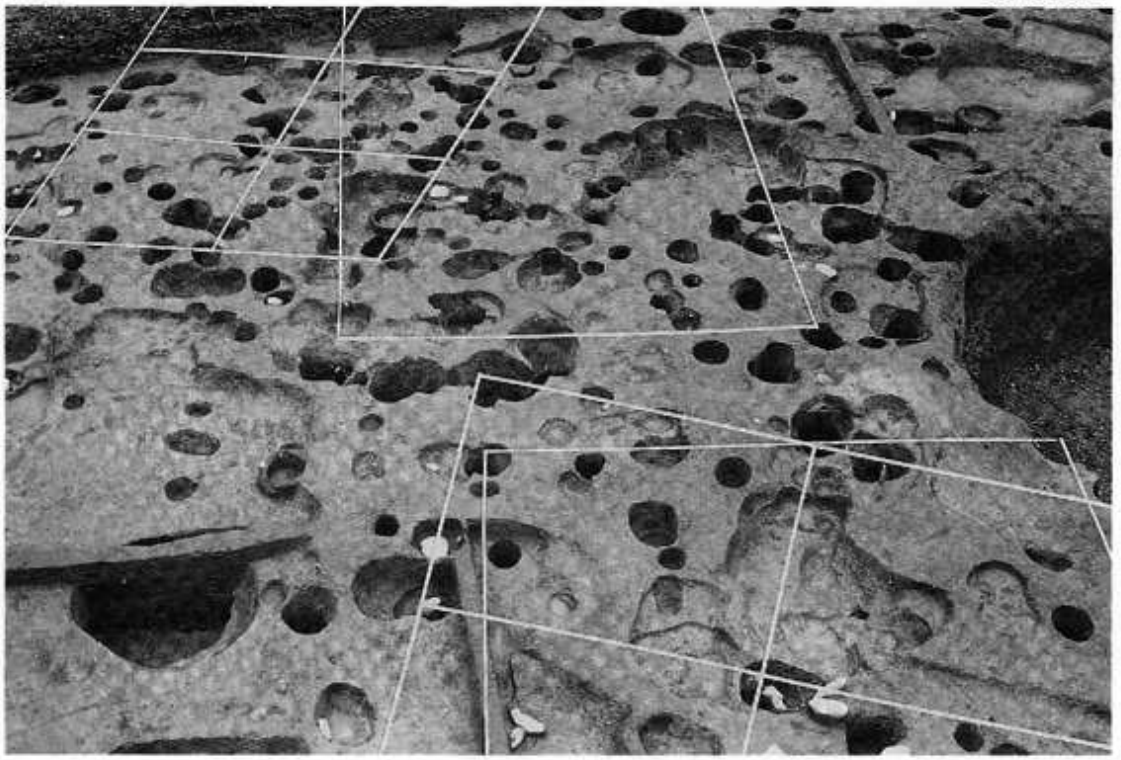


南トレンチ（西から）

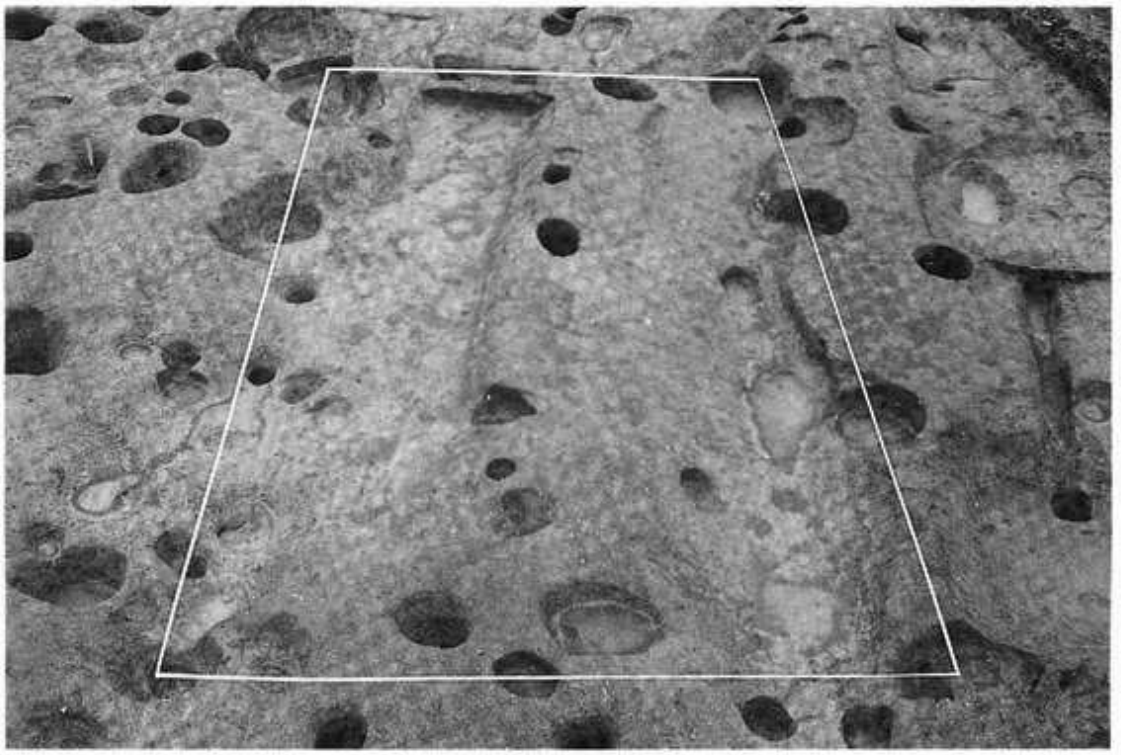
調査区遠景（北から）



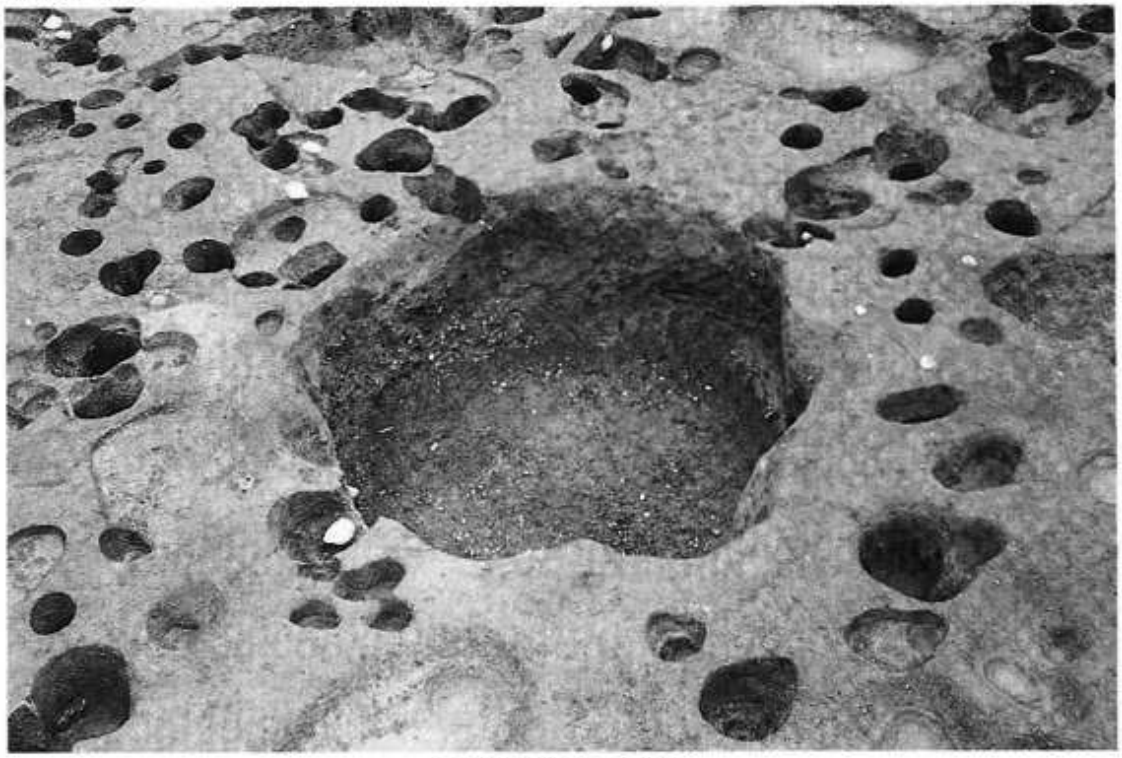
調査区全景（北から）



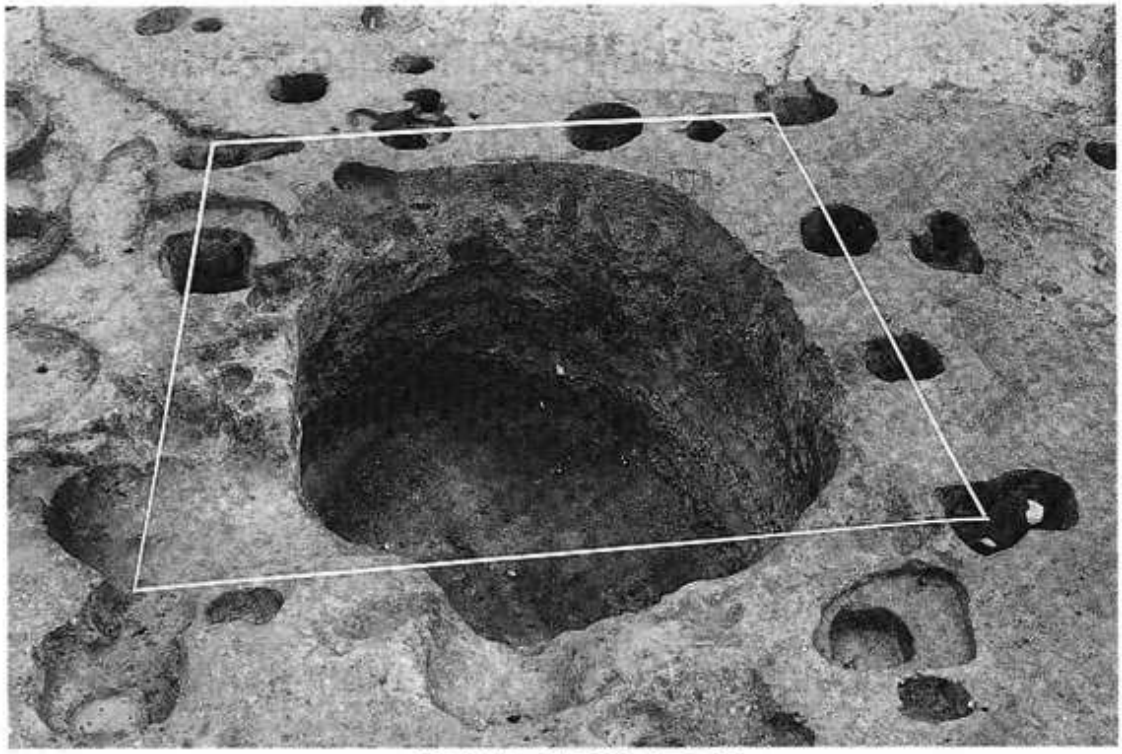
調査区中央部建物群（東から）



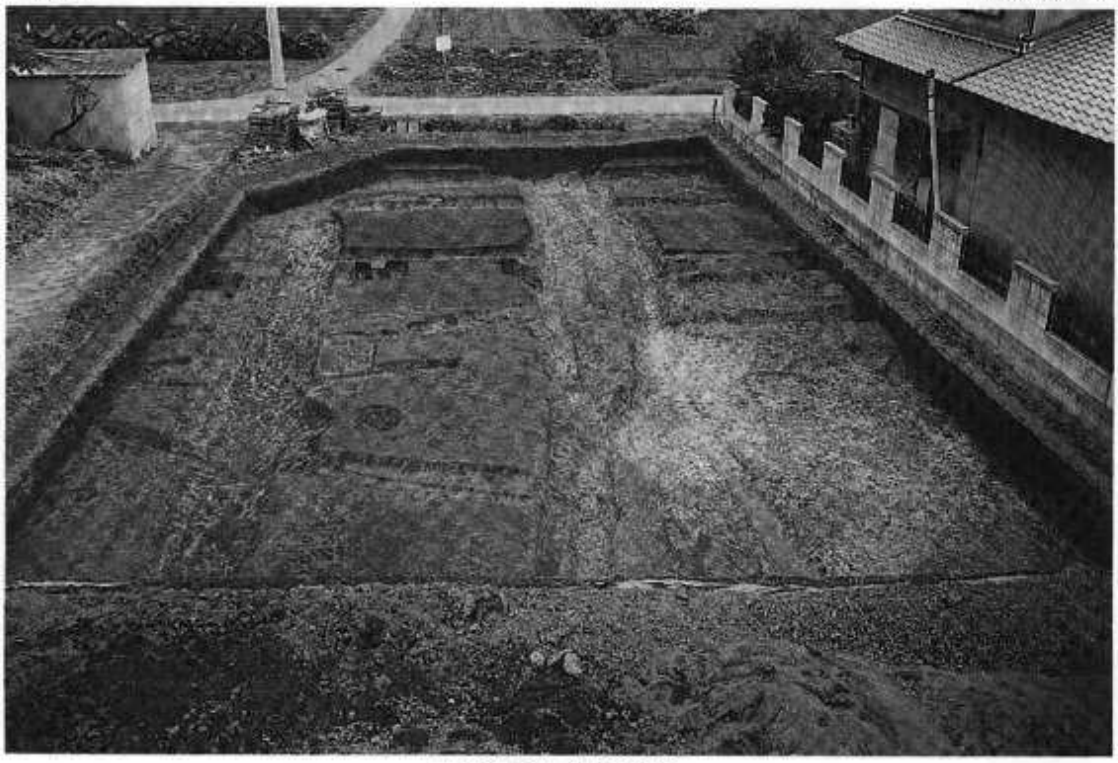
SB6481（北から）



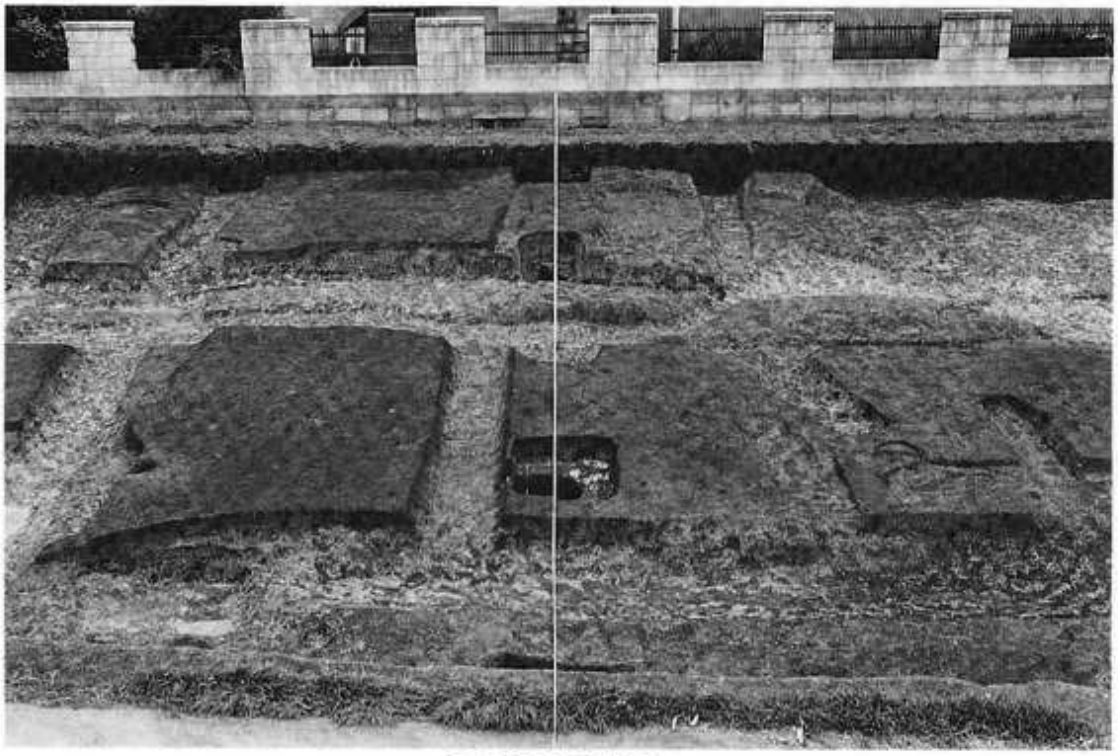
SE6480（北東から）



SE6490・SB6495（西から）

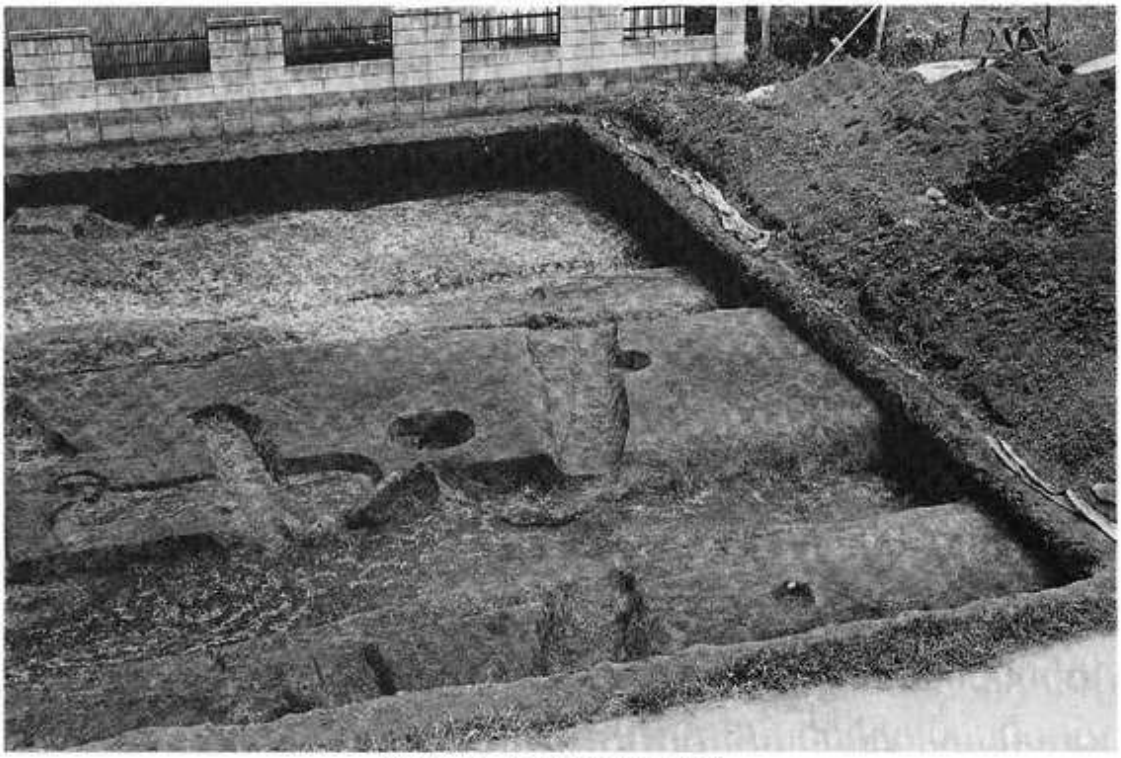


調査区全景（南から）



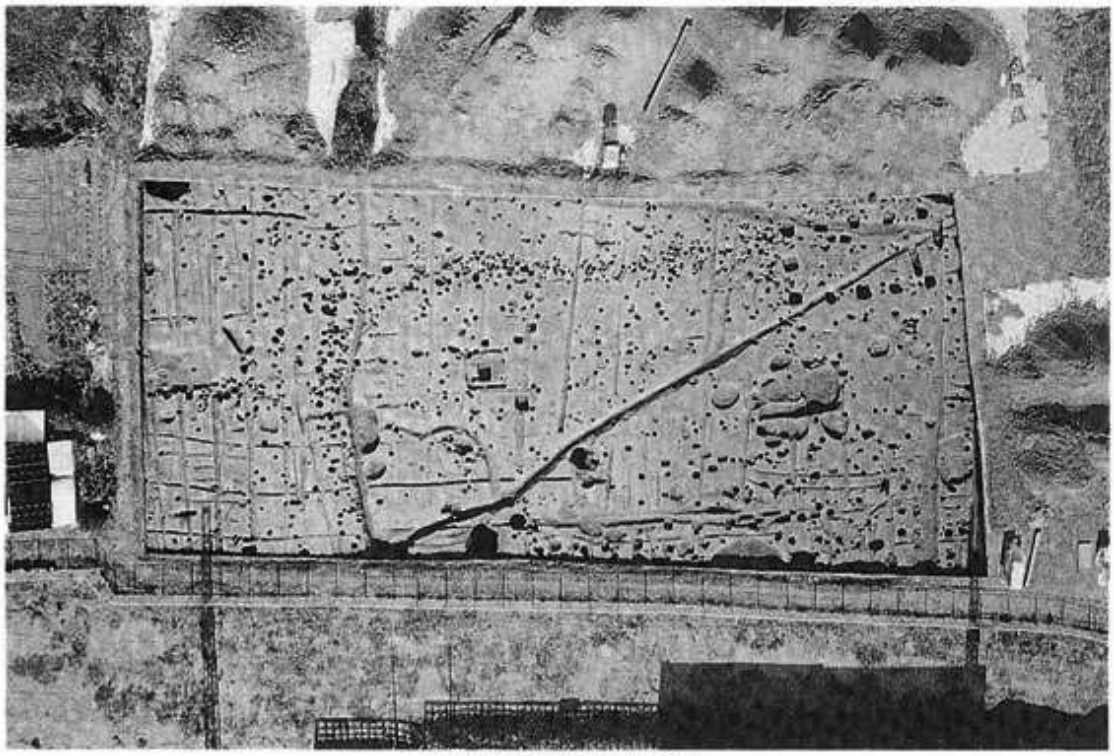
ＳＡ2800（西から）

SD2400（西から）

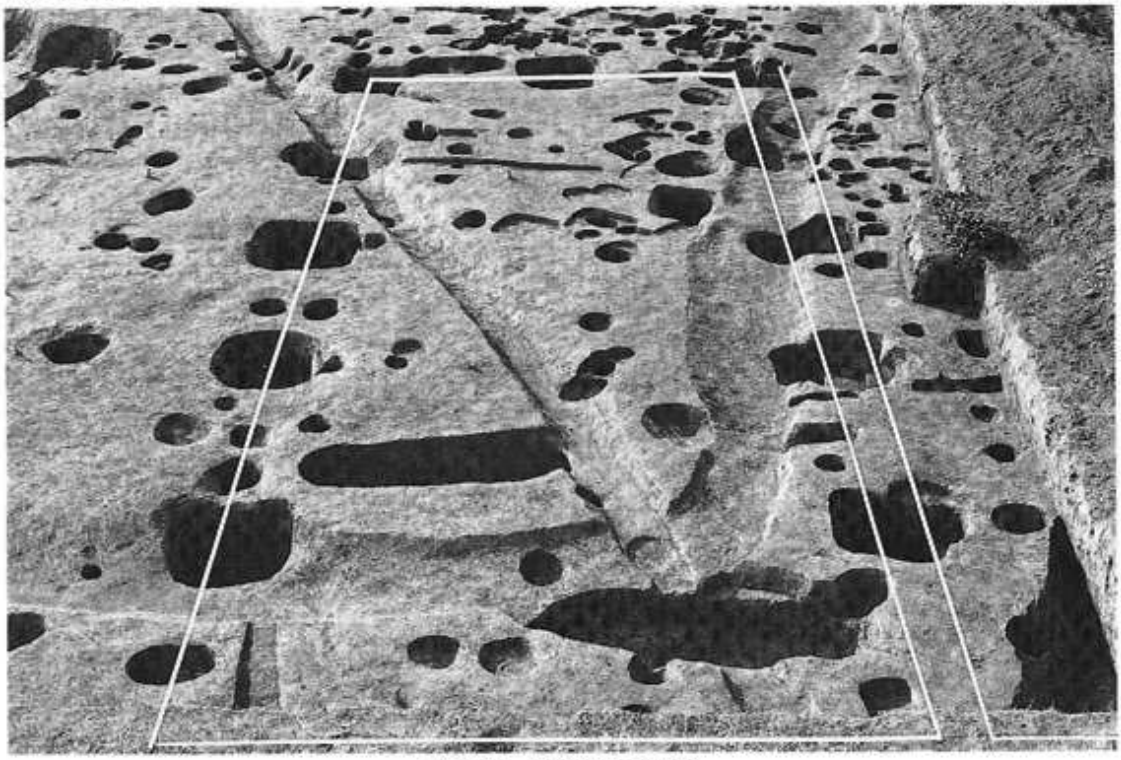


SD2404・SK6524（西から）

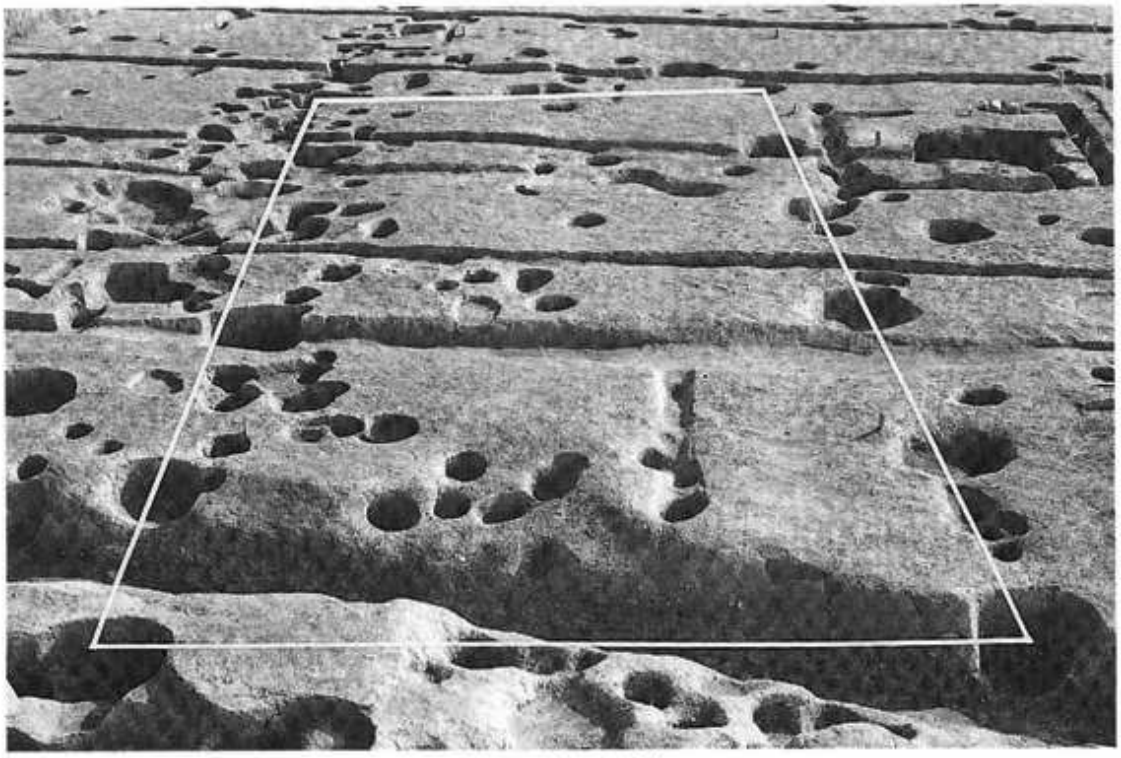
調査区全景（東から）



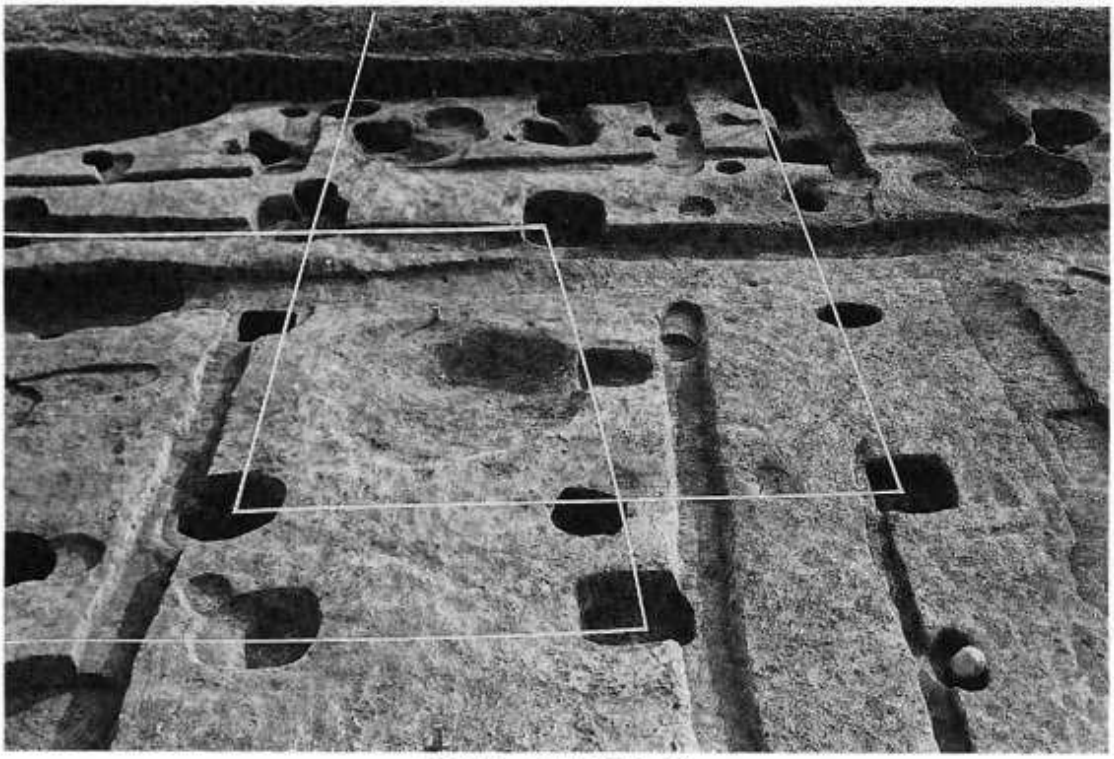
調査区全景（真上から）



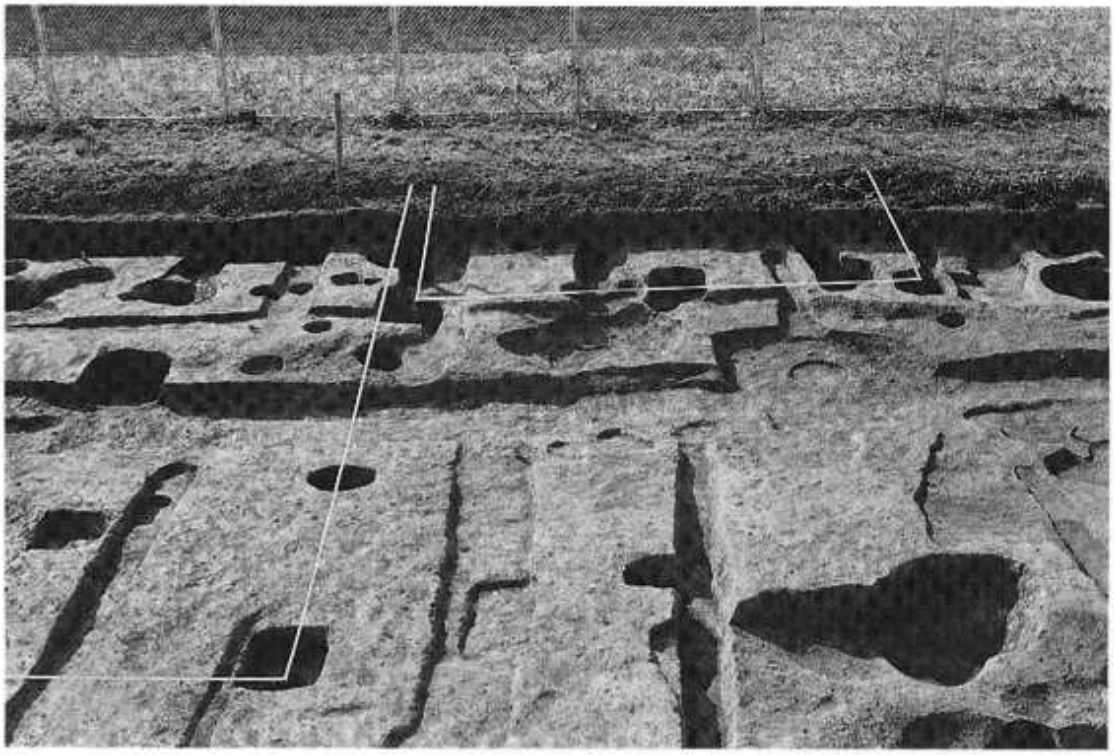
SB6592・6593（東から）



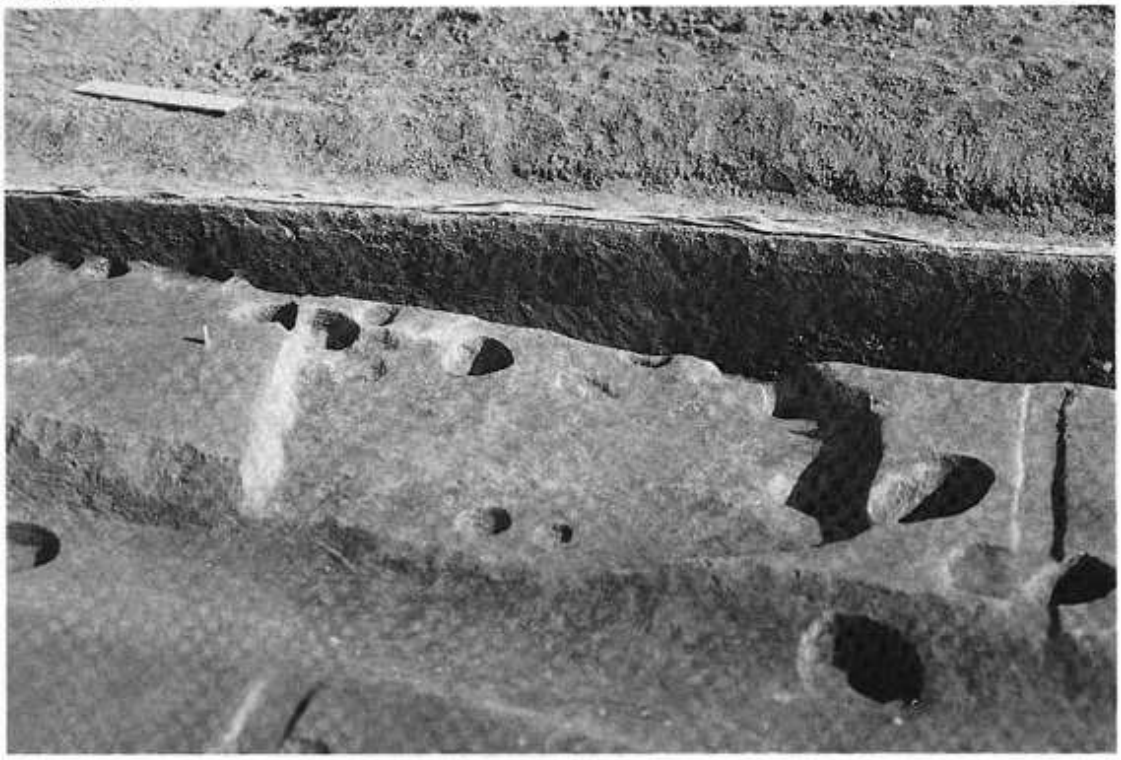
SB6532（西から）



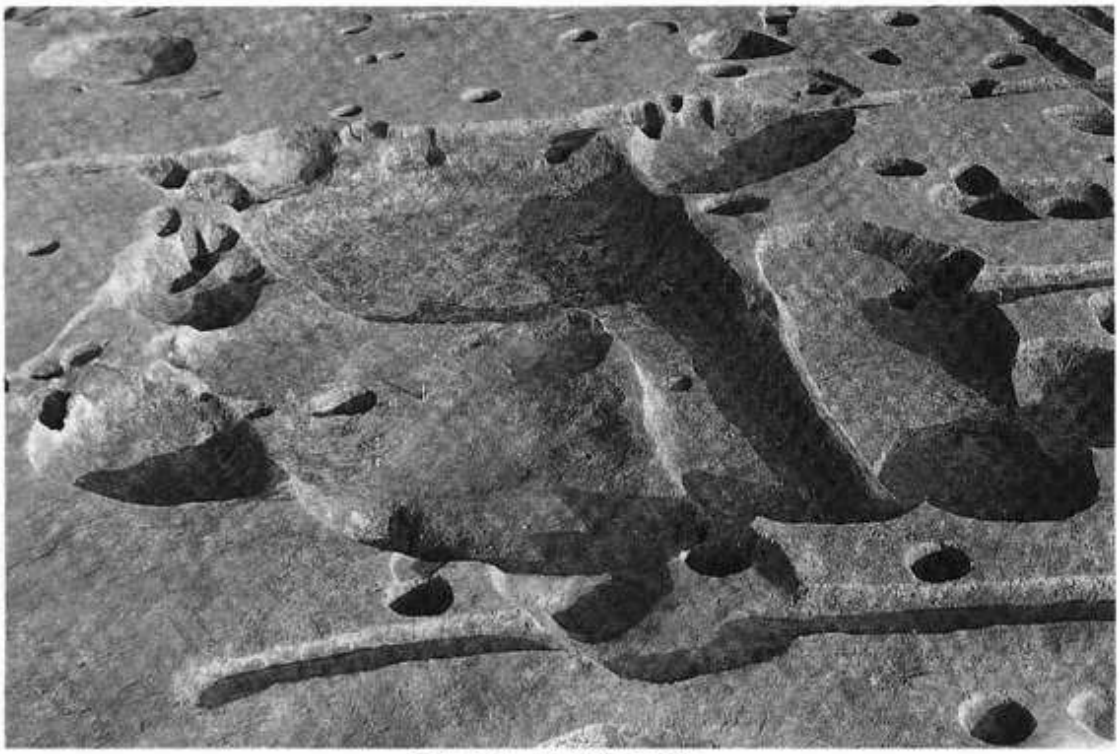
SB6539・6540（北から）



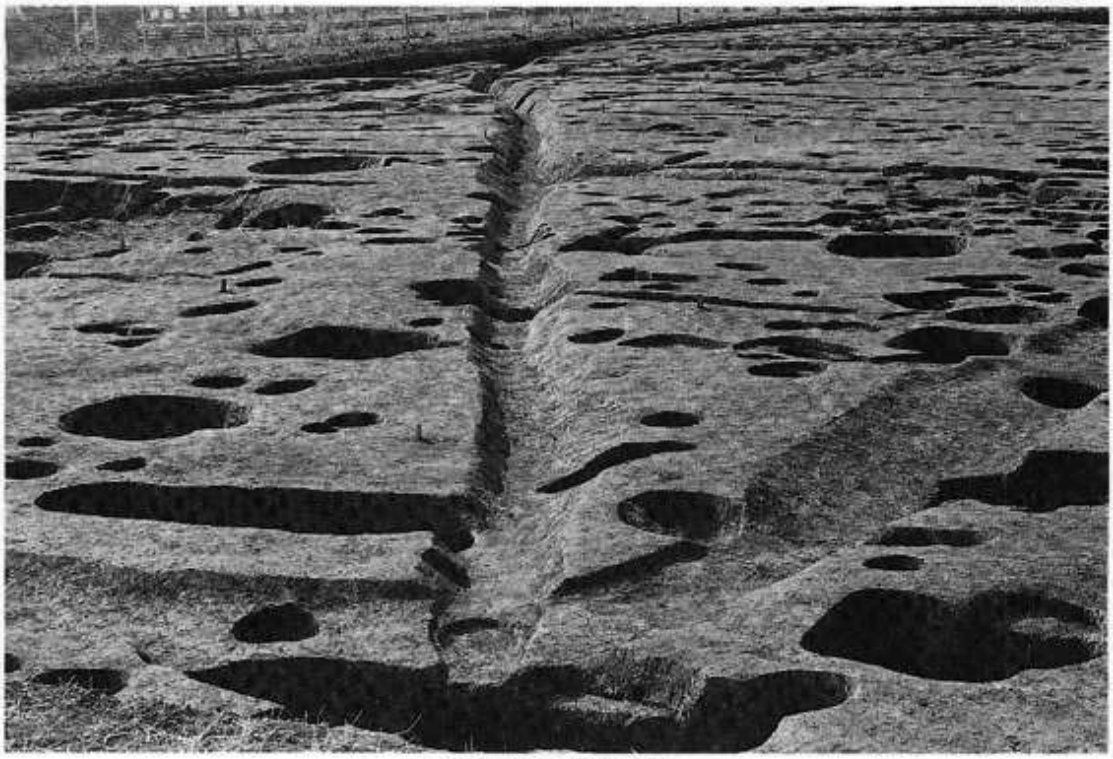
SB6540・6541（北から）



SB6553（西から）



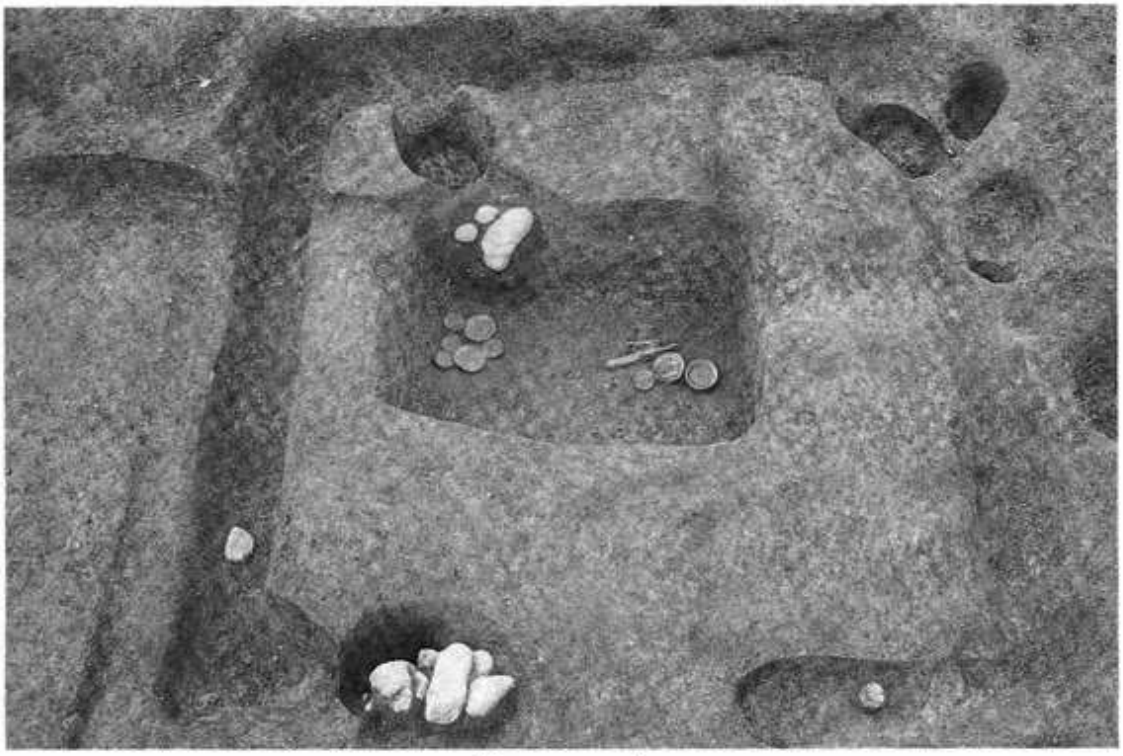
SK6546～6552（西から）



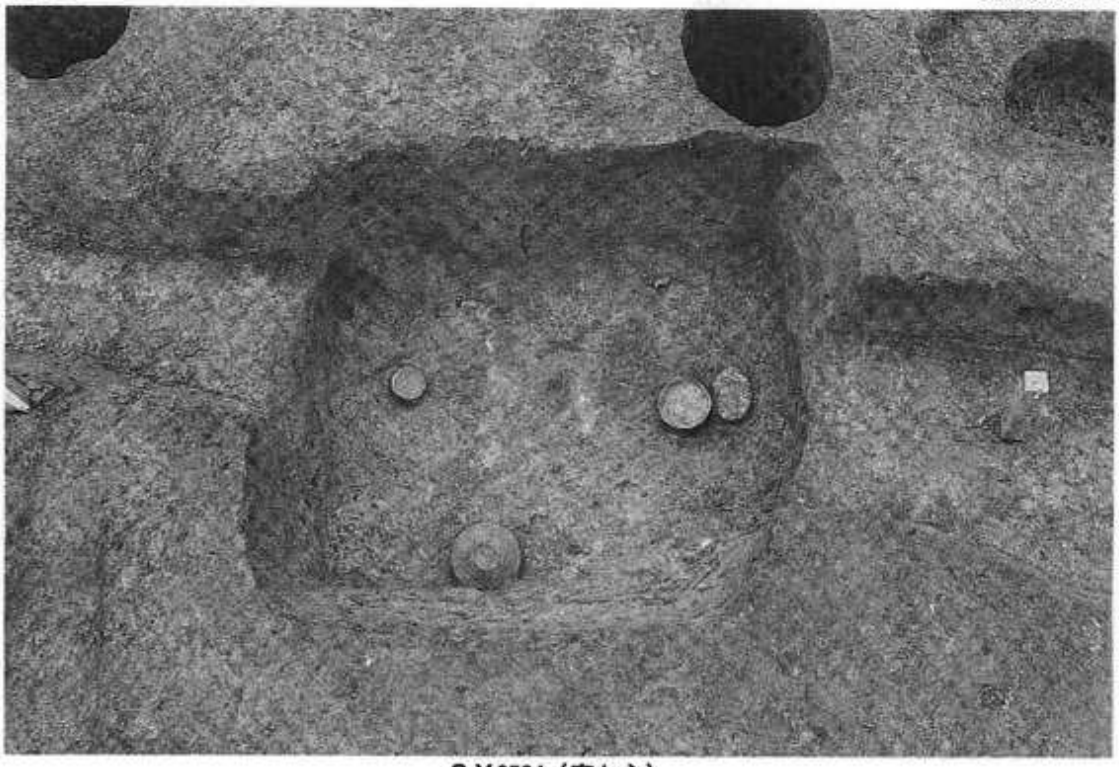
SD6556（北東から）

SE6535（北東から）

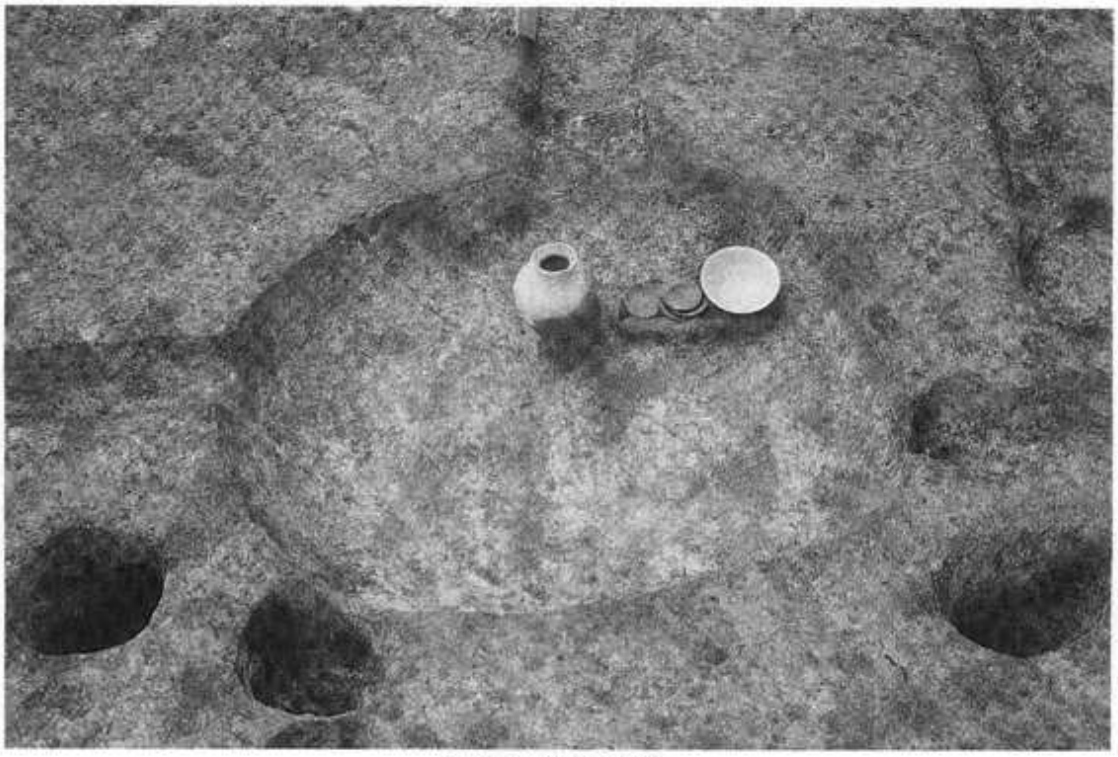
SX6533（東から）



同　　上

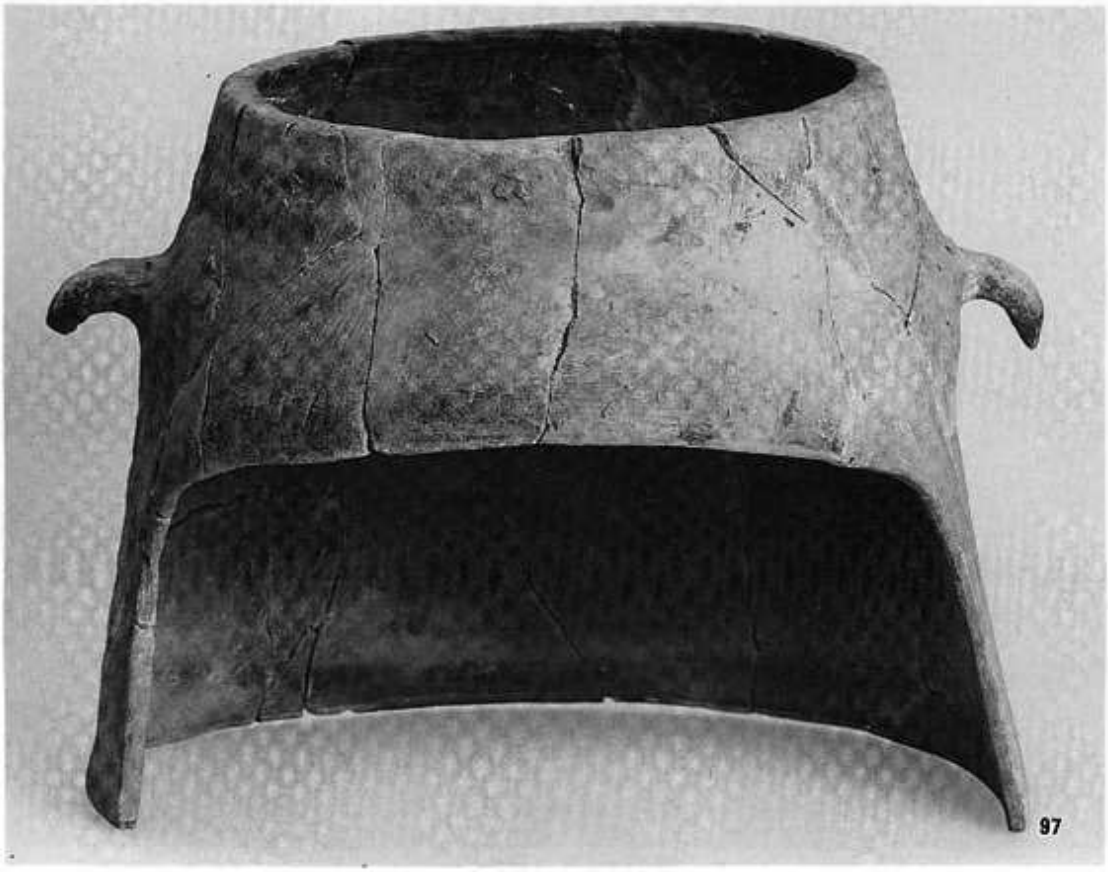


SX6534（東から）



SX6537（東から）

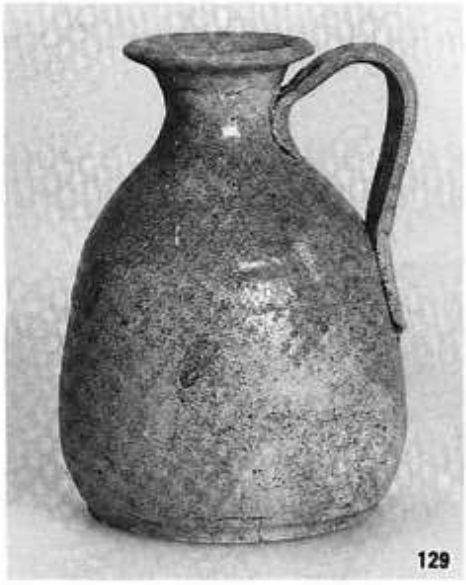
調査区全景（北から）

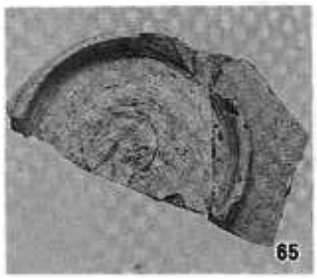


第90次調査　出土遺物

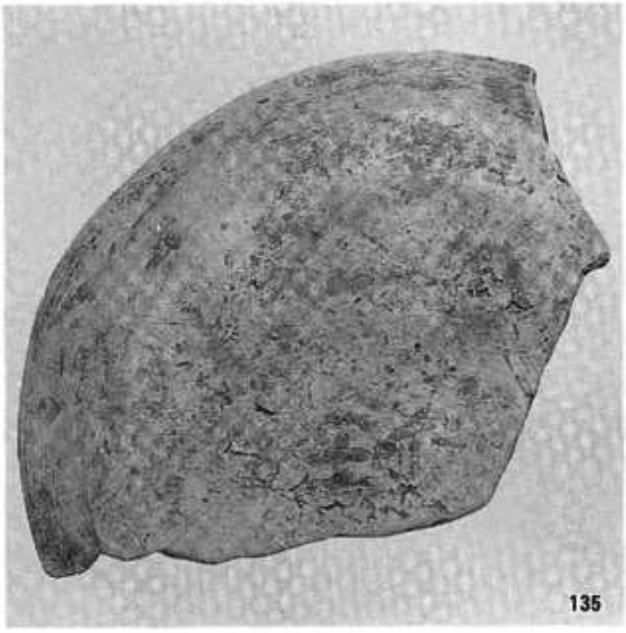
127

128

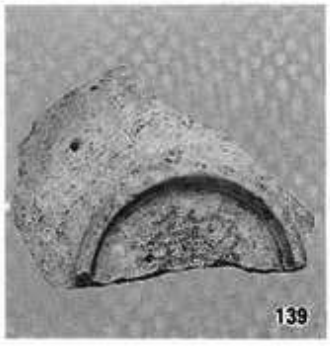

129

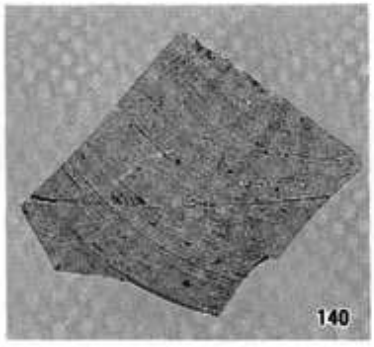

65

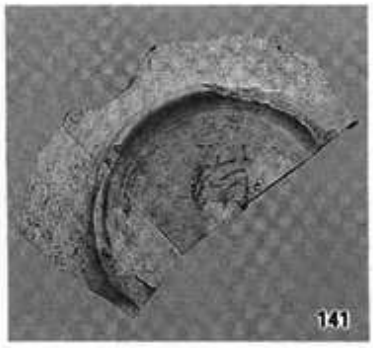
106


135

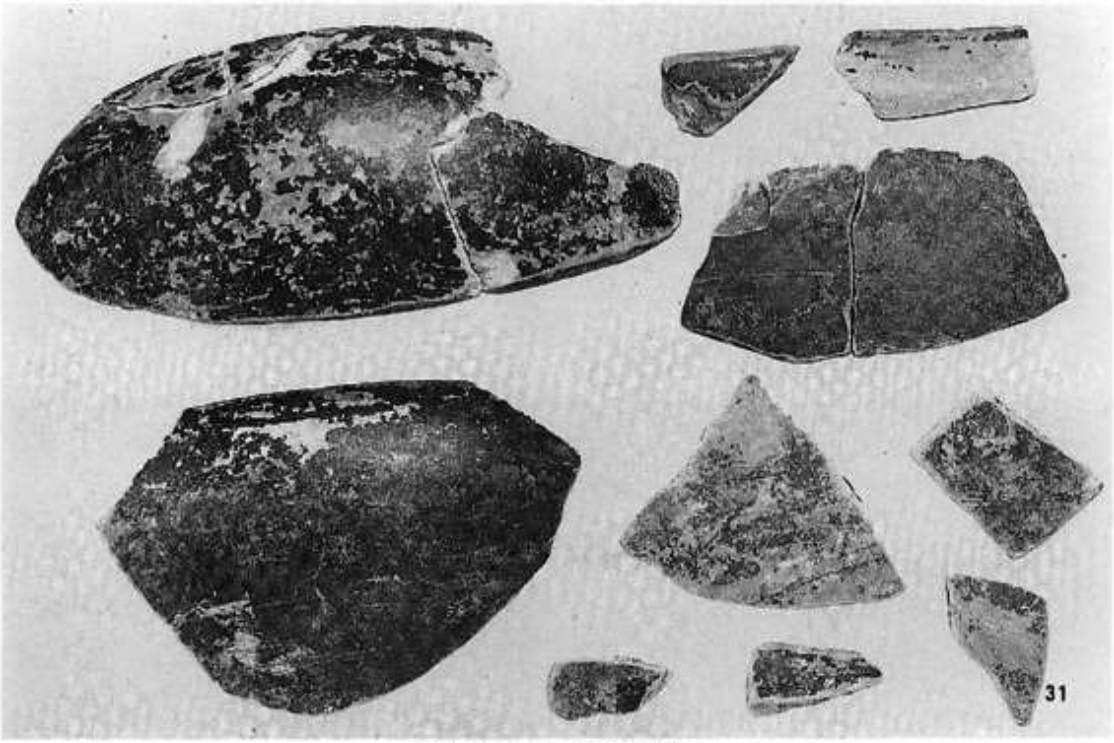
136


139

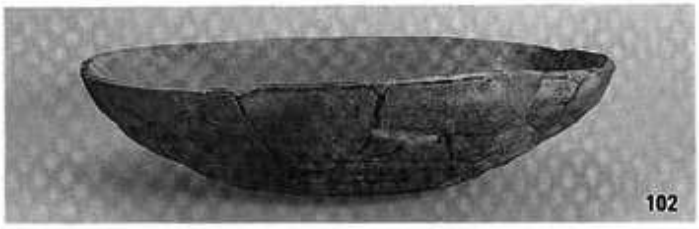

140


141

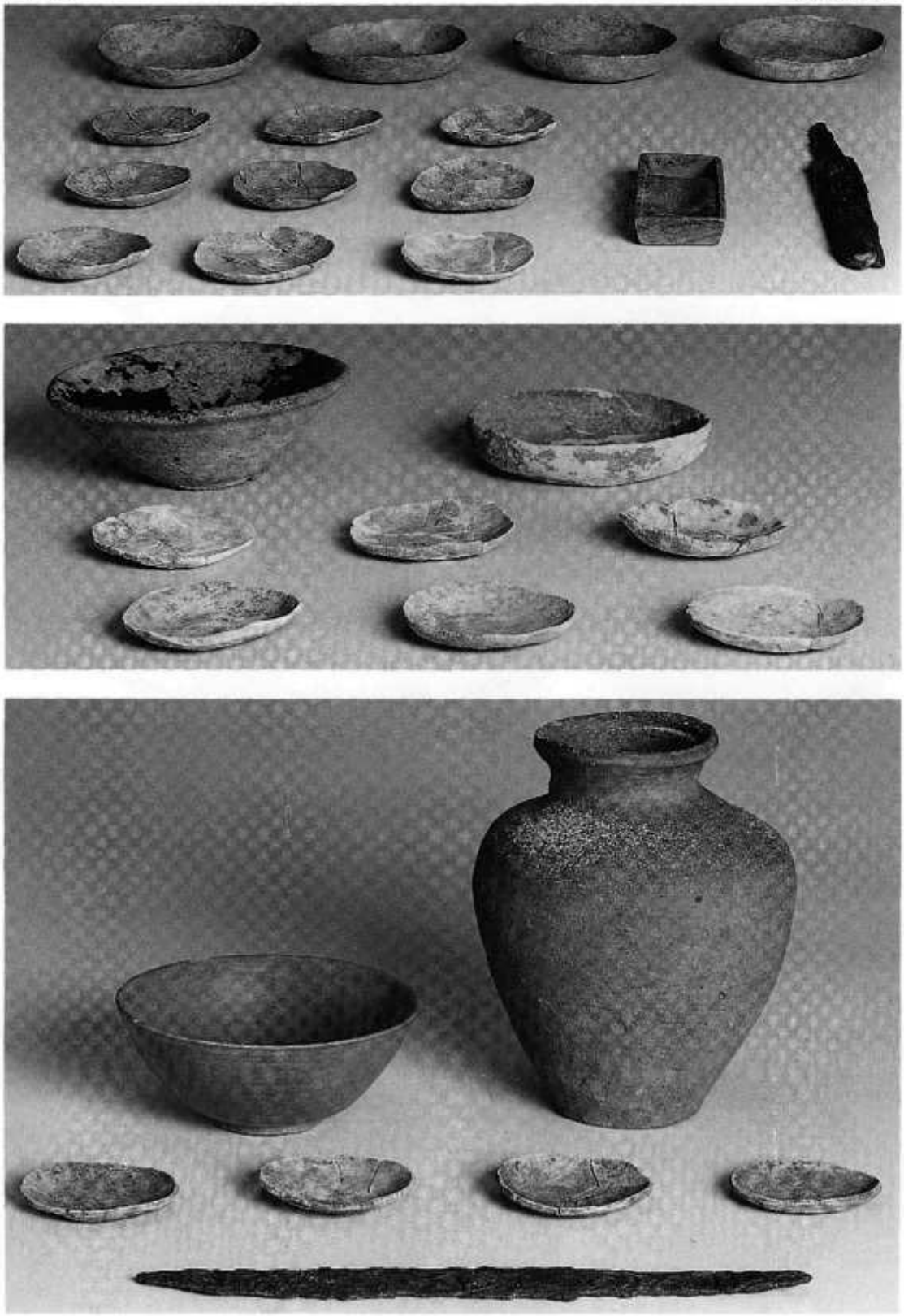
第90次調査　出土遺物



第91次調査　出土遺物



第93次調査　出土遺物



第93次調査　出土遺物（上：SX6533、中：SX6534、下：SX6537）

国史跡　斎宮跡

平成3年度

発掘調査概報

平成4年3月31日

編集発行　斎宮歴史博物館

印　　刷　光出版印刷株式会社

本書は、斎宮歴史博物館の許可を得て、
斎宮研究会が増刷したものである。